第14回　明治大学文学賞

第十四回　明治大学文学賞　受賞作品

第一部門　倉橋由美子文芸賞

大賞　「枝を接ぐ」　石塚　悠斗　（理工学部４年）

佳作　「ミミとココ」　児玉菜美穂　（文学部１年）

「ビロード包みの駆け足の春」　市川　拓真　（文学部４年）

「水死体」　永田　八重　（文学部１年）

第二部門　阿久悠作詞賞

大賞　「チミモウリョウ」　【B】課題タイトル作詞形式　金澤　一輝　（文学部１年）

佳作　「キミユキ」　【A】自由作詞形式　鈴木　涼太　（経営学部４年）

「学生街のカフェテラス」　【A】自由作詞形式　焼山　美羽　（文学部１年）

【目次】

第一部門　倉橋由美子文芸賞

倉橋由美子文芸賞　選評　……1

「枝を接ぐ」　石塚　悠斗（理工学部４年）……5

「ミミとココ」　児玉菜美穂（文学部１年）……31

「ビロード包みの駆け足の春」　市川　拓真（文学部４年）……61

「水死体」　永田　八重（文学部１年）……109

第二部門　阿久悠作詞賞

阿久悠作詞賞　選評　……124

「チミモウリョウ」　【B】課題タイトル作詞形式　金澤　一輝（文学部１年）……126

「キミユキ」　【A】自由作詞形式　鈴木　涼太（経営学部４年）……130

「学生街のカフェテラス」　【A】自由作詞形式　焼山　美羽（文学部１年）……134

倉橋由美子文芸賞　選評

井上 善幸

今回は「枝を接ぐ」を推します。これまで三回にわたって倉橋由美子文芸賞の選者を務めてきましたが、今回ほど作品に強い印象を受けたことはないように思います。

地図において、いわばその存在の記号となる図面上の痕跡を確認し、現実との対応関係を問題にすること、「ペーパータウン」としてのファントムを捜し出し抹消すること、さらには鉄塔の上という場所的非在性、海底ケーブルの地図化といった問題、これらの観念やイメージがいかに文学となり得るかを見事に具象化した著者の力量に賛辞を送りたく思います。地図の書き換えとは、創作行為としてのエクリチュール（＝執筆）に他ならないのでは、と思った次第です。

ミシェル・フーコーの『言葉と物』の中に、十七世紀と十八世紀における知の中心はタブローである、という言葉がありますが、この地図という存在も、まさにそのようなものの一つであることを改めて思い知った次第です。スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（一七二六）では、四部からなる各航海の冒頭に主人公の訪れることになる架空の場所が地図化されたものが置かれていますが（例えば、飛ぶ島ラピュータは日本の近くに位置することになっています。下図参照）、

このような実在しない想像上のトポスを現実世界に並存せしめ、そのような罅割れを通して現実に楔を打ち込むこと、それこそはまさに文学的営為そのものであり、文学や芸術とは、そのような存在（to be）と非在（not to be）とを繋ぐ「あるいは」（or）に場所を与えること、あるいは深淵に架けられた橋のごときものをある種の批評行為として構築することではないのか。そしてこの著者の素晴らしいと思えるところは、鉄塔の頂上と地底といった非日常の空間にそのような場所を見出し、それら空間上に点在する窪みもしくは坑道をいかにリゾーム状に繋いでゆくかに心をくだいていることにあるのではないか。そのようなことを考えました。いわば孤島としてのドット存在をニューロン的に接合してゆくこと、そのような思想に、ぼくはなにかしら生存への可能性のようなものを見出したい気持ちに襲われました。

以上のような理由から、「枝を接ぐ」を今回の受賞作として推す次第です。

今後の作者の活躍に期待します。

福間　具子

昨年度の選評で、フィクションを創る際も現実をよく観察して欲しいと書いたが、今年はそんな指摘は不要なほど、丁寧にリアリティを作り上げている作品が多かった。コロナ禍で長い間閉じ込められていた感性が事物に触れようと外に出始めたのを感じる。

良作が並ぶ中、審査員全員が満点を付けたのは、『ミミとココ』と『枝を接ぐ』であった。読んだ時点で、この二作の競い合いになるだろうと予想できた。作品としての完成度が拮抗する場合、問われるのは物語を貫く思想である。『ミミとココ』がふんわりと他愛ない青春群像劇の中に込めているのは、心は簡単に死んでしまうもの、という残酷な真実であろう。だからこそ大切に守らなくてはならない、という等身大なりに必死な願いは、下敷きとしている『人魚姫』と重なりながら美しく切なく響いていた。しかし、『枝を接ぐ』に込められた哲学的直観、そしてそれを具象化した作者の手腕は物凄いものだった。地図に書き込まれた架空の地形、鉄塔の上で静かに姿を消す人、獄中の庭師。それらを一回的事象から普遍へと反転させる力技には舌を巻いた。後半でいささか失速し、理屈っぽさが出たという見解は評者の間で一致していたが、それを差し引いて余りある快感を経験させてもらった。

物議を醸したのは『ビロード包みの駆け足の春』であった。作品としての構成力の点で上記二作に及ばなかったものの、靴を失った右足が左足に慰められながら「ああ、恥ずかしくて腐りそうだ」と嘆くなど、ちょっとした場面に心地よいナンセンスがあって好きだった。『水死体』は、グロテスクな設定なのだが、少年二人の関係には温かみがあり、対比が秀逸であった。ところどころ共感しきれない浮いた表現があったことが少し気にかかった。

その他、賞レースには絡まなかったが、密かに推していたのは『旅の菩薩』である。―「空。空というものはない。地上に降り注いだあらゆる光が、それを見上げる人の思いと編み込まれた色。常に移り変わることそのものを空という。」このような言葉を書ける人が周囲に影響を及ぼさないわけがない。きっと何らかの形で世に出るだろう。

谷本 道昭

今回、二十三点におよんだ応募作に目を通していく中で私が強く感じたのは、どの作品にも「物語」が書かれている、という当たり前といえば当たり前のことでした。どの作品も、たしかに物語として成立していて、その点については手放しで評価したいと思う一方で、作者が物語を物語として成り立たせようとしすぎたためか、作品に物語性やフィクション性が過度に充満してしまっているという印象を受けることも多くありました。

物語性がありながら、そのことが作品を読み進める読者にとっての妨げになっておらず、作品の物語性が作品にとって自然かつ必然的なものとして感じられる、というのが、すぐれた物語作品の条件の一つではないかと思うのですが、そのような条件を満たすのは簡単なことではないのかもしれません。

大賞・佳作に選ばれた『枝を接ぐ』『ミミとココ』『ビロード包みの駆け足の春』『水死体』の四作はしかし、私が考えた「条件」を十分に満たすどころか、作品の冒頭から、それぞれに独特な物語世界の中に、有無を言わすヒマさえ与えずに読者を引き込んでいく力強さと、そうした力強さ、強引さを支える語りのなめらかさ、技術を兼ね備えた「小説」としての魅力を惜しみなく放っているように感じました。

なかでも、『枝を接ぐ』はスケールの大きな物語の中で現実らしさと突拍子のなさがうまくバランスを取りあっていて、このまま書籍化されたとしても立派に通用するのではないかと思わせる、「大賞」の名にふさわしい作品でした。

ブラボー！ブラボー！ブラボー！

まるで正反対ともいえる作風ではありましたが、『ミミとココ』は「大賞」候補作として、『枝を接ぐ』を猛追する、完成度のきわめて高い、すぐれた現代性と文学的感性を持った作品として、選考委員一同を大いに唸らせました。私としては、倉橋由美子文芸賞を通じて、皆さんより一足先にこのような「新しい」作品を読ませていただく機会を得たことに密かに感謝しています。

『ビロード包みの駆け足の春』と『水死体』の二作についても、作風はまったく異なっていますが、どちらの作品にも良い意味でいびつなところがあって、ほかの応募作を大きく引き離す個性が感じられました。これからもどんどん「文学」していきましょう。

「枝を接ぐ」

石塚　悠斗

■受賞のコメント■

理系の、それも機械系にいますと、まず読書家にはお目にかかれません。石を投げれば地面に落ちる、ただそれだけです。重力です。万有引力です。そうした日々の苛立ちと文学部への憧れを燃料に、私は物語を書きました。入学当初から毎月の読書ノルマを設け、ひたすら岩波・ハヤカワ文庫とかなちゅうバスの横揺れに対峙し、４年目にようやく文学賞へ応募しました。この４年間でほんとうに様々な出来事がありましたが、こうして大賞を頂くに至り、非常に感慨深い思いです。

ところで、私は同期入学の誰よりも――当然、文系の方々よりも――本学図書館をヘビーユーズした自負があります。正直、一年分の学費を書籍代として浮かせてしまったかもしれません。でもお陰様で、カーヴァーやソウヤー、ヴォネガットにラヒリといった傑出した作家たちにめぐり逢えました。明治大学図書館の素晴らしい蔵書たちに、度重なる(現在進行形の)延滞と大量の貸し出しでご迷惑をお掛けした生田図書館の司書の皆様に、そして文学賞に関わって下さったすべての方々に、厚く御礼申し上げます。

枝を接ぐ

＊

1

雨は点であり、同時に、線だった。それはまるで光速で移動しているようだった。ビニール傘に透ける空からは、無数の線が降り注いでいた。ランダムに折り重なるその束に、男は模様を見出した。糸の撚りをほどくように、静かに雨に手を触れた。

男は同時に理解していた。線は雨である。それ以上でもそれ以下でもない。片付ける仕事がいまだ残っていた。ありふれた八月の夜空だった。

田舎の澄んだ空気と、都会の粉塵を吸い上げた水蒸気が混ざり合い、辺り一帯は亜熱帯と化している。インターネット以前から、私たちはこの空気と水蒸気で繋がっていたのではないか。男はそんな思考を巡らせながら、手元の資料に視線を移した。関東近郊の山間部、昭和期に景勝地として名を馳せた地域だった。この集落もいまはただ、緩慢な時の運行に身を任せている。管理者が去った住宅、改築命令が貼られた旅館、かつての繁栄を伝えるバスの時刻表。

ページを手繰りながら、男は目的の小道を探した。民家の間を抜けていく、細長い道のはずだった。

「ごめんください。」

少し離れた民家に灯りが点いていた。縁側の扉の向こうから、老人の声がした。売らないよこの家は。何度来てもらっても同じだから。それじゃあ。

「すみません、なにか誤解させてしまったようです。」「私、道路の調査で参りました。」

姿を見せた老夫婦に名刺を差し出した。軒先から垂れた雨粒が傘に反射する。

「はぁ、地図の、会社」

えぇ。男は自分の素性を明かした。地図の調査でやってきたこと。道路識別番号五十九番の所在を確認したいこと。土地を買い叩く意思はないこと。

「おかしいな、裏にこんな小道はありませんよ。なぁ、こんな道知ってるか？」「兄ちゃん、ほら、上がって」いえ、結構です。「雨で風邪ひくよ。さっきから手が震えてるじゃないか」お気遣いなく、大丈夫です。

「こんな道みたことありませんよ。なんでこんなことに。ちょっと確認してきてよ」「あぁ。」「兄ちゃん、案内してくれ。」

男は夫妻の気遣いに感謝しながら、いつもの文句を並べた。私はこの道が存在しないことを確認しにお邪魔したんです。先ほど目視で確認してきたのですが、念の為お尋ねした次第です。お世話になりました。失礼します。

雨脚がひどくなる前に退散する。男の望みは叶い

そうになかった。ひとまず大通りまで出て燃料を補給しなければ。そそくさと集落を出発し、帰路についた。

給油中にフロントガラスを見上げると、なにやら粘性の液体がへばりついているようだった。三センチメートル角ほどの汚れ。雨で大部分は剥がれているが、一部が水垢と固着してガラスに新たな柄を描いている。

フロントガラスには大抵、半円状の境界線が引かれる。ワイパーの手が届かない範囲に汚れが蓄積し、場合によっては鱗状の群島が生まれる。男は大抵、そうした島を放置していた。

車内の端末が震える。

「今日の進捗を聞かせてくれ。」

午後八時の定期連絡。課長との取り決めだった。

「五十九番も空振りでした。」

居心地が悪いのはお互い様だった。数秒間の沈黙の後、課長が咳払いして応じた。

「そうか。ご苦労。」

スタンドの従業員が備え付けの雑巾で汚れをふき取った。

アルバイトだろうか、金髪がキャップからはみ出た若者が車両の往来を整理している。濡れた作業靴が灰色の地面を黒く塗り変える。

「それでは。」

サイドブレーキを解除し、シフトレバーをドライブへ。ガソリンスタンドの光は、次第に国道の暗やみへ溶けていった。

錆びついたワイパーは、振れる度に鈍い鳴き声を発している。ラジオのボリュームを上げたが、アンテナの不良か豪雨の影響か、とにかく雑音が増えるばかりだった。

男は自分に言い聞かせた。そういうものだ。

＊

「かつて、ひとつの山脈が世界から消滅しました。名をコング山脈といいます。一七九八年、イギリスの権威ある地図製作者ジェームズ・レンネルは、自身が描いたアフリカの地図に虚構の山脈を描きこみました。以後百年以上、コング山脈は西アフリカ中央部にそびえ立ち、ヨーロッパ全土の探検家たちを悩ませ続けることになります。

もちろん、やがて幻は暴かれました。フランスの探検家ルイ・ギュスターヴ・バンジェーはさぞ驚いたに違いありません。これまで恐れられてきた死の

山がそびえるべき場所に、みごとな原野が広がっていたのですから。コング山脈は、存在しなかった。バンジェーがもたらした朗報―ないし悲報―は瞬く間に探検家たちに広まり、ほどなくしてコング山脈はアフリカから姿を消しました。こうして山脈は生まれ、そして、消えたのです。

ここで疑問が生まれます。レンネルが生み出したコング山脈は、果たして存在したといえるのか。それともただの落書きで、はた迷惑なでっちあげに過ぎなかったのか。さて、皆さんはどう思いますか？」

＊

「きみには地図を消してもらいたい。」

二年前、製作課で最初に下された命令だった。地図を消す。そのあまりに奇妙な響きに、男は唖然とした。地図を生み出す会社に就職したのではなかったのか。

「きみはペーパータウン、という言葉を聞いたことはあるかい？」男は否定した。それじゃあ、ファントム、はどうだろう。再び否定する。

「そうか。まずはその説明をしなければいけない。」課長はおもむろに椅子に腰かけ、眼鏡を外して続けた。

「地図は様々な人間と企業が作ってきた。古くは紀元前のギリシャから、果ては洞窟壁画から。そのどれもがオリジナルとは言い難く、どうしても参考にする箇所が発生してしまう。そもそも地図は原理的にひとつのモデル―地球―を参考にする以上、差別化が難しい。一方で、現代の地図製作においても、著作権の問題は例外ではないんだ。そうした背景をもとに発明された概念が、ペーパータウンだ。意図的に虚構の町を地図に描きこんでおくことで、真似した人間を言い逃れ出来なくさせる仕組みさ。もちろん本当は存在しない。町以外にも、架空の道路や架空の池、架空の地名で罠を張る場合もある。私たちはこうした工夫をまとめてファントム、と呼んでいる。実際には存在しない、まさに幽霊だからね。十九世紀にレンネルという学者がペーパー山脈を描きこんだ騒動もあったが、いずれにせよ、現代地図において架空のオブジェクトは不可欠な存在なんだ。」

「以前はファントムの生成は人力かつ手動で行っていた。まぁつまり、私みたいな課長級の人間が完成直前に一ヵ所適当に決めていたんだ。だが最近から、専用のソフトウェアでランダムに架空の道路をひとつ生成する仕様に変更された。セキュリティの

観点からみても妥当な判断だったろう。」
課長は机上の画面を操作し、男に見えるようそれを回した。さて、ようやく本題に入ろう。
「ところが、先日かけたファームウェアの更新が原因で、当該ソフトウェアにエラーが頻発するようになってしまった。挙句、本来ひとつだけ生成すればいいファントムが約六十箇所も生成されてしまったんだ。しかも輪をかけて厄介なことに、担当者が確認したところ、その中には実在する道に重なって生成されたものまで紛れている始末。つまり、だ。現在誤って生み出してしまった幽霊が六十体いて、連中の中には生きてる人間に取り憑いてるものもいる。ここまで理解できたかい？」
男はなんとか応じた。
「よろしい。きみにお願いしたいのは、言うなれば幽霊退治のようなものだ。疑わしい六十の道を現地で調査し、本当は実在する道に上書きされてしまったものなのか、それとも幽霊道路、ファントムなのかを見極めてもらいたい。今回は非常時だから、例えファントムでも全て削除して改めて生成せよとの通達も来ている。」
「きみはこれから地図を消し、そして描くんだ。」
時折、男は自分の意思と関係なく手が震えるようになった。製作課に来てしばらく、およそ一年前頃からだ。原因も薄々勘づいてはいた。徐々に周囲の視線で窮屈になり、免罪符をもらうように診察を受けた。けたたましい装置の中にも入ったし、何度も写真を撮った。結局原因は心の不調。医者が言った。ＰＴＳＤの一種でしょう。過去に体験した出来事が、あなたの精神に大きな負荷を与え続けているんです。この病気の患者さんの中には、自分がトラウマを抱えていると自覚している方とそうでない方がいらっしゃいます。あなたはどうやら後者らしい。左手の震えはあなたの心の傷に由来しているんです。当分は専用のお薬を処方しますから、そちらで様子をみてください。心療内科の紹介状も用意しておきますからね。
どうぞお大事に。はい、次の方。どうぞ。
答え合わせが終わったようだった。回復している気も、していない気もする。だから服薬も気まぐれだったし、特に問題にも感じていなかった。少なくとも、男はそう信じこむ予定だった。しかし幽霊退治にようやく終わりが見えてきた最近、震えが悪化していくようだった。しかし、男は断固として調査を継続した。不安を意識から追いやるただひとつの方法が仕事だった。

2

「こんにちは。道路の調査をしている者でして、こちらの道を通られた経験はございますか。」

穴という穴から汗が吹き出していた。警備員の老人に話しかけたものの、どうも芳しい答えは得られそうになかった。蝉に負けじと声を張って繰り返す。地図を製作する会社で道路を調査しているんです。ご存知ありませんか、こちらの道路。鉄塔の裏側から山道に抜けていくような道なんですが。

ようやく反応があった。悪いね、いまイヤホンしてて。そうでしたか、私、道路調査をしてまして。

結局ファントムか否かの証拠は得られなかった。重ねて確認したところ、関係者以外敷地内に立ち入ることは出来ず、八方塞がりとなった。識別番号三十一番は高架電線を架橋する鉄塔の管理会社の敷地内にあり、厄介な立地から後回しにしてきた場所だった。

途方に暮れていると、敷地内の山道でミニバンがエンストして騒ぎを起こしているのが見えた。警備員から借りた無線で運転手に交渉し、男の車両でバンを牽引する引き換えに監視下での調査が許された。

「災難でしたね。ええ、霧島さん。」男は作業員の胸元にある名札を読み取って話しかけた。長髪のひげ面だった。

「まさか山でエンストするとは。あんたがいなかったら本部から応援を呼ぶハメになってたかもしれない。警備員のじいさんはあてにならないし、いやはや、助かったよ。」

ミニバンの車内には霧島と、それから部下とおぼしきスポーツ刈りの青年が一人だけ、あとは山のような工具が積まれていた。

「先にあんたの用事から済ませてくれ。俺たちの作業は時間が読めないんだ。」ではお言葉に甘えて。

車外へ出た二人に男はいつもの調子で確認を始めた。

「こちらの地図をご覧ください。鉄塔がありますよね、その北側から川下の方向へ下ると山道があるのはご存知でしょうか。」彼らは頷いた。「両者の間を結ぶこの細い脇道、これです。この脇道はいかがです。」霧島が言った。「少なくとも俺は知らないな。」青年も同様だった。「そうですか。普段であれば私自身で確認してから関係者の方にお尋ねしてるんですが。場所が場所でして。」「お二人がよろしければ、一緒に来てくださいませんか。」

男のバンの後部に、霧島たちの故障車をケーブルで接続した。霧島が手慣れた手付きで牽引準備を終えた。

「それじゃあ、一旦鉄塔の下まで牽引頼む。そこから歩いて確認しにいこうじゃないの。」

問題の脇道は実在した。車両で横を通過する限りでは坂の死角となり気付かないもの、注意して観察すれば確かに道が通っていた。下り坂がカーブに差し掛かる直前、坂道の死角となる位置にある急傾斜の脇道、それが識別番号三十一番の正体だった。

「しかし妙だなこれは。」

霧島の言葉に部下の男が反応した。えぇ。一般車両も通れない細さです。誰が作ったんでしょう。

男は驚く二人を尻目に、端末に記録を始めた。調査対象が実在する道に上書きされたものだった場合、現地の写真を正確に記録し軽度の測量も行う手はずになっている。どこまでが生成された幻の道で、どこからが実在する道なのか判別するためである。

霧島が質問した。調べてみたらホントにありました、なんてことはよくあるのか。あんたは架空の道を調べてるんだろう？男は淡々と返した。すみません、守秘義務で詳しい内容は話せないんです。

風が吹いた。小石が坂を下って行った。大きく弾んで、茂みへ入った。

実のところ、存在する道が確認されたのはここが初めてだった。総計六十個に及ぶ全数検査が必要になったのも、三十一番のような上書きパターンのせいだった。デバックチームの話では、上書きされた道の数は恐らくひとつしかない。その容疑者が晴れて見つかった。

男は軽快に挨拶した。

「ありがとうございました。これで私の用件は完了です。」引き上げようとした男に、霧島が呼びかけた。

「茶でも飲んでいかないか、作業用の小屋を休憩所で使ってるんだ。」霧島によれば、彼らは一度小屋内で休憩してから装備を装着し、鉄塔での作業を開始するという。今日は大きな進捗があった。多少寄り道しても罰は当たるまい。第一、鉄塔に登って作業する彼らの仕事に純粋に興味が湧いた。二つ返事で了承し、小屋の脇に停車した。

冷えた麦茶をすすりながら、男は霧島の話に耳を傾けた。

「俺たちをラインマンと呼ぶひともいる。高架送電線のある高さまで上昇し、電線やその周辺モジュールを修理解体・保修や点検をするからだ。」「高さはどれくらいだろう」霧島が思案していると、部下の男が補足した。大体百メートル以上です。「そうそ

う百メートル。たしかビル三十階ぶんくらいの高さだ。俺たちはそこで送電線を引く。」送電線を引く。男はふとイメージした。東北などで発電された電気が、関東に向かって直線状に移動する光景。それも、太い高架送電線を伝って。不可視の電気の痕跡が、黒いケーブルの連なりとして現れる光景。上空から送電線を俯瞰でみたとき、それはどんな風に見えるのだろう。電気の地図。あながち間違いでもないのではないか。

「と、そういう職業だ。」霧島は語り終えると、小屋の奥へ装備を取りに向かった。ハーネスを装着し、各種工具を身につける。点呼でお互いの安全を確認する。二人の作業員の鉄塔登りが始まろうとしていた。

鉄塔の足元まで来ると、その巨大さに圧倒される。地上に固定された四本の脚には、専用の広径ボルトが締結されている。「それ、地面に何メートルも埋まってるんです。だから立っている、というより刺さっていると表現するべきかもしれません。」部下の男が言った。鉄塔は推進力を生み出す帆であり、同時に流れを受け止める錨でもあった。

「そろそろ、始めよう。」霧島の合図を起点に、二人の身体は鉄塔の上へ、また上へと上昇していく。鉄塔を遮るものはなにもない。直線状の金属が天を突きさすように伸びている。その様子はまるで、巨大都市を支える背骨が露わになったようだった。中枢たる関東へ向けて、ただ延伸していく鉄塔。神経たる黒い送電線で接続された鉄塔は、しかし、行く先を知らない。

地上から見上げる限り、彼らの作業は至極順調に見えた。じきに上空の霧島から無線が入った。

「こちら霧島。作業は順調に進行中。損傷の疑いのある碍子を交換後、ケーブル縁部の補修に取り掛かる。オーバー。」無線が切れた。しばらくすると再び無線が入った。なぁ、反応してくれよ。すみません、なんと応えるべきかわからなくて。なんでもいいんだよそういうのは。話ができればいいんだから。霧島の笑い声が聞こえた。霧島は不思議な明るさをまとう人間だった。言葉の端々に、プロとしての矜持を漂わせていた。

「坊主の訓練中だからあんたで暇つぶしさせてくれ。」男は応じた。

「上に来てまず驚くのはなんだとおもう？」

「高さ、ですかね。凡庸な答えですが。」

「違うんだなこれが。」

「上に来て最初に実感するのは、」

一拍おいて続けた。
「音だ。」
男は慎重に話の流れを想像した。
「上空百メートルってのは、地上の世界でもないが完全な空の世界でもない。だから、独特の音楽が流れている。」
「音楽、ですか。」
「そう、音楽。」
「地上の喧騒が限りなく薄く鳴りながらも、同時に風の音が響いている。」
「ある奴はそれを静寂と言った。ある奴はそれを音楽と言った。」
「いつかあんたも登ってみるといい。上に着いたら、まず目をつぶり、深く息を吸う。徐々に意識を聴覚へ集中させていく。すると、次第に聞こえ始める。あんたの耳に、音楽が聞こえ始める。」
およそ三十分後、霧島から作業終了を知らせる無線が入った。損傷の程度が浅く、想定以上に早く終わったらしい。
「坊主を先に下ろす。俺は最後の仕上げを済ませてからそっちに行くよ。」
「了解しました。」
男は〈坊主〉が鉄塔を降下してくるさまを観察した。登山同様、上昇よりも下降の方が事故率は高まる。作業完了による安心感、酸素濃度の増加などといった複合的な要因から、下降時には気のゆるみが生まれやすい。部下を先に行かせたのも、霧島の思惑に違いない。男はそう感じた。教え通り慎重に下降できるか、霧島はきっと上からチェックしている。
危なげなく降下作業を終えた部下の男が、小屋の中へ戻ってきた。男は声を掛けた。驚きました。あそこまで登って、そして降りてくるとは。流石プロですね。
〈坊主〉は照れる素振りもなく、淡々と言った。
「霧島さんに教わった人間はみんなこうなりますから。」
男が感心していると、〈坊主〉は無線で呼びかけた。霧島さん、俺です。いま小屋について荷解きを終えました。そちらは順調でしょうか。
男は小屋のガラス窓から鉄塔のはるか尖端を見ようとした。霧島がいるはずの場所だ。だが丁度がいし西日が重なり逆光でよく見えない。
「霧島さん、俺です。そっちは上手くいってますか」
返答がなかった。まったく。後輩をいじくるのも大概にしてほしいもんです。〈坊主〉は小走りで小屋を出て鉄塔の尖端を凝視した。男もあとに続いた。

それは奇妙な光景だった。

「霧島さん、返事してください。上にいないんならさっさと出てきてください。」〈坊主〉は苛立ちを隠せない。「すみません、小屋からＧＰＳモニターを持って来てもらえますか。」「液晶画面がついてる大きなやつです。」男は命じられるがまま装置を渡した。〈坊主〉は素早く装置を起動した。画面上の赤い点が穏やかに明滅している。

「そんな。」

慌てる〈坊主〉に男が尋ねる。どうされました。

〈坊主〉がまくしたてた。いいですか、装置の信号によると霧島さんは上にいるはずなんです。でも。いや、そんな。ありえない。男は自分が面倒に巻き込まれた事実を飲み込んだ。

「ひとまず、本部に連絡してみましょう。降下中に事故に遭った可能性もある。」「たしかに。そうですね連絡してきます。」

コーヒーの湯気が、小屋の窓を曇らせていた。

＊

「本部に連絡が入った二時間後、同じ課の人間十五名が行方不明者の捜索にあたりました。日没を前に、事態を重く見た上層部は警察へ通報。八月十八日当日夜から、捜査員に警察犬を含めたローラー作戦が展開されます。翌十九日早朝からは、上空よりドローンでの捜索も開始。計二百人体制での大規模な周辺捜索が実施されましたが、一向に見つかる気配はありませんでした。それどころか、まるごと消失していた装備一式も行方が分からずじまいに。

警察による捜索が始まって一週間後、警察はついに氏名その他個人情報を開示し公開捜査に踏み切っています。ところで、十八日の段階で二人は警察から事情聴取を受けていました。特に彼らの出会いが全くの偶然であり、本来彼は不法侵入で咎められる身である点を詰問されたようです。しかし一両日中に二人は解放されました。二人ともに動機がなかった上、無事アリバイも証明されたためです。鉄塔下および小屋内に設置された監視カメラが、二人の身の潔白を保障したのでした。」

＊

なにより、いつまでも鉄塔上部を指している霧島のＧＰＳが不可解だった。

人間が鉄塔の上、はるか百メートル上空で忽然と

消えた。まるで紐で繋いだ荷車がいつの間にか切れて、どこかに置き去りにしてきたような感覚。〈坊主〉と男の不安は以降解消されることはなかった。鉄塔はなにも語らず、そこに立つのみだった。

男は会社に戻り次第課長にことの顛末を報告した。

「それはたいへんだったろう。しばらくきみは休んだほうがいい。最近働き詰めだった。有給も溜まってるんだし。」いえ、大丈夫です。明日からまた調査を再開させてください。

「いいか、きみの大丈夫は大丈夫じゃないんだ。それにさっきから左手が震えてるじゃないか。早く病院で診てもらったほうがいい。」

男はそのとき初めて左手の震えに気が付いた。小刻みかつランダムに、なぜか左手が震えていた。

手の震えは、ちょうどこの時から始まった。男には、どうもなにかを探すような震えに思えた。ここにあるのに掴めない、見えてはいないが、触れはする、その何かを必死で探ろうとする震え。だが、なにを探したいのかは皆目分からなかった。

休暇を申請し、会社を出た瞬間に男は強烈な疲労感に見舞われた。長い長い調査だった。

霧島の失踪から約二週間後、警察の公開捜査が始まると現場には報道陣が駆けつけ、連日のワイドショーで特集が組まれた。人望の篤いベテランがなぜ、上空二百メートルでの神隠し事件！全国で頻発する行方不明事件、失踪者はどこへ？そういった触れ込みで世間は一瞬盛り上がった。当初は電気工学や行方不明者捜索の専門家など科学的な視点が大方を占めていたが、報道の波は次第にオカルト方面に傾いていった。ネット上では他殺説や誘拐説が持ち出され、その他陰謀論と融合しながら犯人捜しが行われた。

あれやこれやのブームが収まったのは、失踪発覚から一ヶ月後になる。一過性の祭りが過ぎ去り、残ったものといえば、いわくつきの鉄塔と行き場を失った関係者の不安だった。誰が悪いでもない。だからこそタチが悪い。怒りや焦りの捌け口を失ったまま、徐々に体調を壊す者、休暇を申し出る者が現れた。男もその一人だった。親族でも同僚でもない自分が、なぜあの日初めて会った人間にこれほど悩まされているのか。男は自分でもよく分からなかった。原因も結果も不明なこの出来事には、決定的に意味が欠けていた。消えた意味、居合わせた意味、助けられなかった意味、残された意味。すべてが宙づりのまま、いたずらに時は流れた。

それからおよそ一年、製作課に配属されてから二年が経ったちょうど今日、すべての調査が終了した。関連資料は報告書を除いて処分され、問題を引き起こしたソフトウェアも改修された。五十九体の幽霊と一匹の幽霊もどきは無事一掃された。

男はその日、辞表を提出した。

3

豪華な送別会だった。大手町のビル内に構える高級居酒屋で男の送別会が行われた。話したこともない若い女性社員が門出の口上を披露し、課長からは花束と寄せ書きが渡された。久しぶりとなる大人数の会食に、皆大いに盛り上がっていた。

「幽霊退治お疲れ様でした、では乾杯！」

ハイボールを二杯流しこんだ後、男は手洗いへ逃げこんだ。廊下に張られた大判なガラス窓から大手町が一望された。

確かに、前代未聞の調査をひとりで、しかも二年弱で完遂した功績は上司からいたく褒められた。だが例の件以来、どうしても自分の行為に自信が持てなくなった。倫理的責任とか、社会的責任とか、そういう上等なものではない。もっと曖昧な、非常に感傷的な引け目だった。

課長が名付けた幽霊退治というネーミングがひとり歩きして、社内ではいつの間にかゴーストバスターというあだ名が広まっていた。もっとも、男の業務の大半は会社外での実地調査であったから、不快に感じることはなかった。だが皮肉なことに、男は退治したはずの亡霊に取り憑かれていた。澱となって沈殿した引け目が、静かに男の精神を蝕んでいった。

自分が消した幽霊を思う。霧島の低い声を思う。立ちすくむ鉄塔の高さを思う。

大手町のビル街に、男のスーツが反射した。薄いシャツから肌着が透けていた。

翌日、男はハンドルを握っていた。目的地は決まっていた。

「事件後、鉄塔は文字通り腫れ物のように扱われました。上空での失踪という非科学的な現象を前に、管理会社は作業員を遠ざけることしか出来なかったのでしょう。心霊スポットとして荒らされ始めた鉄塔は、撤去の難しい基礎部分を除いてほとんどが解体され、その機能は隣接する鉄塔が引き継ぎました。幸い山間部でしたから、代わりには困らなかったと聞いています。」

青年が説明した。霧島の愛弟子であり、あの日、

男と一緒に事件に居合わせた作業員である。
施錠された入構ゲートの前で立ちつくしていた男は、一周忌となるちょうど今日、師匠の面影を探しにここを訪れていた。こないだまで関西の方にいたんです。事件後すぐに転属願を提出したが、やはりこの場所にどうしても戻ってきてしまう、そんな口振りだった。
「大部分が撤去されてからはご覧の通り廃墟です。呪われた鉄塔、なんて呼ばれて社の人間は寄り付きません。でも安全上の問題から放置させておくわけにもいかず、今では自分のような人間が定期的に送られています。あれからおかしな現象は何も起きていませんしね。むしろ一度廃墟化したせいで不法投棄が増えてしまって。」
一年の内に彼は別人になっていた。丸刈りだった頭部には結えるほどの長髪が、頬には無精ひげが生えていた。
男は不意に切り出した。
「もし可能であれば、」
「丘の上まで行ってみませんか。」
青年が言った。えぇ、そのつもりで自分も来ましたから。

日は徐々に傾き、鉄塔の残骸が鋭利な影を作った。
「作業が終わるといつも、ここで寝そべるのが習慣なんです。」
四つ脚の鉄塔の基礎に青年は横たわっていた。変色したコンクリートを軽く叩いて彼が言った。ほら、ここ、ちょうど中心の位置。
促された男は、同様に仰向けになり空を見上げた。一年前に下の作業小屋から見た景色とはまるで違う光景だった。真下から見上げる鉄塔は、金属のトンネルのようだった。
「四号機と呼ばれていたこの鉄塔は、四角鉄塔という形状に分類されます。」
青年が続ける。
「全体が四角錐の骨組構造をとることから、そう呼ばれているんです。他にも矩形鉄塔や門型鉄塔、烏帽子型鉄塔なんかもありますが、自分はこのタイプが一番落ち着きます。真下にいると、まるで尖端に吸い込まれそうになる。」
複雑に入り組んだ鋼材の描く幾何学構造が、幾重にも重なって金属のトンネルを生み出していた。四方に配置された基礎の脚は、塔の頂点めがけて収束してゆく。男はまるで遠近法絵画の内側にいる感覚に陥った。果てなく延びる線の絡まりが、消失点へ引き込んでいく、そんな感覚だった。

「一年前まではここから頂点まで一直線で見えたんですがね。」
彼の言う通り、男の見上げる先に鉄塔の尖端は存在しなかった。既に撤去された塔の上部なくしても、いまだその残骸から、尖端を幻視することは可能だった。消失点は、消失してこそ機能する。男にとってはどうもそれが確からしく思えた。
男は断続的に鳴っている機械音に気が付いた。
「あぁ。この装置の音です。なんだか形見のように思えて。」
青年は懐から携帯用のＧＰＳ装置を取り出した。一年前ここで霧島が消えて以来、端末の画面にはずっと赤い点が明滅していた。
「自分にとって霧島さんがいた唯一の証拠なんです、これが。」
「事件のあった夜、自分は警察で聴取を受けていました。その間に連絡を受けたご家族の方が、現場に残っていた霧島さんの私物をすべて持っていかれたんです。」
「容疑が晴れてから、改めて伺うつもりだったんですが、会社から止められまして。だから、この端末が自分にとって霧島さんと繋がりを持っていられる唯一の方法なんです。」
「赤い点の指す先に霧島さんはいません。恐らく装置の故障でしょう。わかってます。でも、私にはこれが何か、進むべき方角を示すコンパスのように思えるんです。」
それから青年は、霧島の記憶を男に語り始めた。
「自分が霧島さんに出会ったのは、いまの会社に就職して現場に配属された日です。とても蒸し暑い日でした。」

「新人の研修は低地の模擬鉄塔で行われます。自分は同期の中でも比較的飲み込みが早く、教官役の上司からも素質を認められていました。それだけに、霧島さんの身のこなしを見た時強い衝撃を受けたんです。あのひとは、鉄塔に潜っていくようでした。」
「多くの作業員の場合、鉄塔上部で作業する際はひどく緊張しています。いくら経験があろうと、命綱があろうと、上空百メートルでの作業ですから。でもあのひとは違った。まるで地面に引き留める重力などないかのように、水に沈み込むように登っていく。」
「それでいて作業中のミスは皆無で、たとえ上司でも危険な瞬間があれば即座に注意する。霧島さんはそういう人間でした。」
「上層部からも目をつけられていたらしく、関東地域を統括する管理センターのポストを提案された

こともあったそうです。結局は断っていつまでも鉄塔に登っていましたがね。」

「ある日、高所で補修作業をしている時に霧島さんが自分に尋ねました。坊主、お前は上にきてなにを感じた、と。」

「自分は答えました。声が聴こえます。鳥の鳴き声、車のエンジン音、自分の息遣い。それから霧島さんは言いました。」

「そうか。」

木々が風に揺れた。森のどこかから鳥の一群が飛び去っていった。

「霧島さんは、現場でツーマンセルを組むチームメイトである以上に、私生活でもいろいろなことを教わった恩人でした。現場仕事が終わると、いつも車で飲み屋まで連れていってもらいました。旅行の話、家族の話、それから本の話。よく溺愛している奥さんの話もしていました。ものごとに貴賤はなくとも、ものごとに向かう態度に貴賤はある。霧島さんの口癖でした。」

男は青年の話を聴いていく内に、彼が半ばこの鉄塔に取り憑かれていることを理解し、また同情した。自分ひとりではなかったという安堵感と共に、男自身にはそうした繋がりがほとんどないことを再認識した。

「カッパーフィールドという庭師をご存知ですか。二十世紀の、確かイギリス人だったと思います。」

男は首を振った。初耳です。珍しい名前ですね。

「霧島さんはよく、自分にこの庭師の話をしてくれました。」

＊

「レイモンド・カッパーフィールド。二十世紀初頭にイギリス全土でひそかに活躍した庭師です。カッパーフィールドは市井の一庭師であった一方で、当時は斬新だった作風から各地に熱狂的なパトロンを残しました。とはいえ、氏の功績と、そして氏が生前に手掛けたいわくつきの設計図は、のちに親族が発見するまで屋根裏で眠っていたそうです。カッパーフィールドが獄中で死亡してから五十年後、一九九〇年の出来事でした。

カッパーフィールドが手掛けた庭園の最大の特徴は、その非統一性にあります。彼は庭園を構成するあらゆる要素を最小限の単位まで分解し、別の文脈の上に並び替えます。樹木、草花、噴水、路面のタイル、そうした単位を構成し直すことで、より長期

間に渡り庭園を鑑賞可能にし、また庭園が持つ権威性を批評的に暴いていく。カッパーフィールドの作風は、のちのポストモダン芸術の先取りでもありました。」

「カッパーフィールドの生涯でただ一度だけ、製作途中で放棄された庭園があります。イングランド南部、セブンシスターズにある貴族庭園がそれです。一九二五年頃、カッパーフィールドは以前仕事を受け持った顧客の紹介でとある地主の造園を依頼されました。イギリス海峡を望む白亜の崖上にそびえる邸宅は、一見して、高貴な装飾で覆われていたといいます。屋敷中央から突き出たゴシック建築式の尖塔は一キロ先からでも視認でき、側壁に張られたステンドグラスは西日によく反射しました。竣工して間もない頃、船乗りたちの間には困惑が広まったものの、ひとりの使用人の機転が不安を安堵へ変えました。日没後に尖塔の上部にかがり火を灯したのです。屋敷の愛称である「ライトハウス(＝灯台)」が、こうした逸話をもとに生まれた事実はあまり知られていません。

依頼主は直接面会せず、使用人の男を介してのやり取りを希望しました。当初氏は不審に感じたものの、依頼主の積極的な姿勢から次第に受け入れていきました。のちの悲劇の一端とも言われています。

造園に着手して半年後、ちょうど庭園中央の幅広な歩道脇に円形の生垣が設置された日の夕暮れでした。毎週の規則である依頼主からの言伝を使用人が届けようとした時、作業中のカッパーフィールドの姿が庭園から消えていたのです。体調を崩したのか、仕事に嫌気がさしたのか、依頼主には見当もつきませんでした。

翌日も、そのまた翌日もカッパーフィールドの連絡は来ません。いよいよ不審に思った依頼主のもとに、ひとりの黒服が現れてこう言い放ったそうです。公安警察です。あなたにはIRAによるテロ関与の疑いがかけられています。ご同行願えますか。」

「後日、屋敷の主人であるジョナサン・オーウェルがテロ幇助の罪で立件、訴追されました。オーウェルはアイルランド独立及び北アイルランドの統一を目的とする組織、アイルランド共和軍通称ＩＲＡ

の幹部だったのです。一九二五年当時、ＩＲＡは公民権運動を標榜する一政治団体であり、のちに過激派が引き起こすテロ事件とは無縁と見られていました。しかし当局は、独自の情報網をもとに軍内部での分派ないしタカ派台頭の報せを水面下で入手していたのです。専制攻撃の形で加えられたこの逮捕劇は、軍内部に一定の緊張感を与えましたが、その強引な手法は後世で検証を余儀なくされます。ご興味ありましたら後ほど資料展示までご案内しますので、お声がけください。」

「さて、庭師のカッパーフィールドの名があまり知られていないのは、この逮捕劇も一因でしょう。当局はカッパーフィールドを軍が擁する工作員と目し捜査を進めており、治安紊乱及び器物損壊の容疑で彼を逮捕するに至ります。事実、カッパーフィールドが手掛けた庭園の依頼人の多くがＩＲＡの関係者であり、造園した庭に極秘の符丁を紛れ込ませることで組織を団結させ情報の交換を行ったといわれています。ところが、当のカッパーフィールドが本当に工作員だったか定かではありません。氏は逮捕後、自身にかけられた容疑のほとんどに沈黙しています。

既に存在する文脈を書き換え、新しく再編する彼の作風が生来暗号的解釈に近しかった、との見方もあります。確かに、後世に発見されたカッパーフィールド庭園の設計図はおよそ設計図と呼び難い、無数の線と落書きと記号が凝集した代物でした。そこにカッパーフィールドはどんな庭園を、どんな想いを託したのか。今となっては想像の域を出ません。」

＊

「彼は収監後も庭作りを続けました。」

青年は仰向けのまま、両手を後頭部で組んで続けた。

「カッパーフィールドは房内での散歩が日課でした。」

「毎日、毎日、彼は独房内を歩き続け、その歩数を距離に換算していました。一日あたりおよそ五キロ、幻の貴族庭園完成後の外周と同じ長さを。」

「当然そこは独房ですから、あるものといえば便器と窓くらいでしょう。しかしカッパーフィールドは、毎日の散歩を通して、少しずつ少しずつ空想の地図の上で残りの工程を終わらせていった。潮風を

嗅ぎ、伸びた枝を剪定した。折れた幹を別の仲間へ、慎重に接いでいった。

「カッパーフィールドが収監されてからしばらく、顔見知りの看守にこう言い残して彼は自殺したそうです。」

完成した、と。

いつの間にか日は沈み、あたりの気温は一気に低下していた。寝そべる男の眼前には、星々が散らばっていた。尖端を欠いた鉄塔の残骸が、望遠鏡のような役割を果たしていた。存在しないはずの消失点は、いつしか白く発光する天体として確かにそこで輝いていた。

「私はこれまで自分の仕事に誇りを持っていました。」

仰向けのまま男は青年に語り始めた。

「たくさんの幽霊を見つけて退治した。地図を正しいあり方へ戻していった。でも霧島さんの一件以来、誇りと裏腹に疑いが芽生えていきました。」

「もし、誰もソフトウェアのエラーに気付かず、六十個の存在しない道が残り続けたら。そもそも、他部署の誰かが幻の町を、幻の池を調べていたら。」

「すべての幻を消し去ることが、地図のためになる。それは間違いない。でも、それが他方で地図の豊かさを奪っていたとしたら。」

青年は目をつぶったまま男に尋ねた。

「カッパーフィールドの貴族庭園は果たして、完成したと思いますか。」

男は一瞬の思案ののち、上体を起こして応じた。

「ええ。」

「庭園は、たしかに完成したと思います。」

「私はここ一年ずっと、理由を探していました。地図を消す理由。地図を描く理由。あの日鉄塔にいた理由。霧島さんが消えた理由。そして今日、あなたと再会した理由。」

「偶然、がどうしても受け入れられなかった。たまたま居合わせただけ、たまたま命じられただけ。」

「投獄された庭師が日々続けた想像の造園作業、カッパーフィールドの行動はそうした偶然に対する彼なりの抵抗だったのではないでしょうか。」

「彼は歩くことで、想像の枝を刈り取ることで、自分のさだめに意味を与えていった。」

彼はいつの間にか目を開けていた。

「これから私に協力してくれませんか。」

「私たちの手で、鉄塔を建て直すんです。そして、」

冷えた空気が男の肺を刺激した。男の左手は、じっと拳を握りしめて静止していた。

「地図を描くんです。」

4

「こうして、彼らの地図は産声をあげました。」

館内に投影されたホログラムが電子音とともに切り替わった。青白い燐光が宙に形作る構造物は、前時代に『鉄塔』と呼ばれていた金属塊である。

「今となってはこうしたモデルで眺める他ありませんが、僅か二百年前は住宅街に設置されていても、誰も不思議がりませんでした。」

見学者たちは笑みを浮かべた。こんな大きなものがあったんですね。学生の一人が熱心に記録していた。

「十倉悟、そして千賀真司両名による鉄塔の地図化計画は、完了までにおよそ五年の歳月を要しました。電気事業者や専門の修理工、そして熱心な好事家の支援も手伝ってようやく完成した地図は、意外な反響を呼びます。」

「海底ケーブルの地図化、ですね。」

学生のひとりが端末から顔をあげて答えた。

「その通り、よく勉強されてらっしゃいますね。」

彼女の娘と同級生ほどの青年だった。

「完成した鉄塔の地図が公開されると、いち早くその有用性を見出した欧州の政府系シンクタンクが海底ケーブルの地図化事業を立案します。二〇三〇年のことです。」

再びホログラムが変化し、円筒状の細長い棒が見学者たちの眼前に現れた。

「ところで皆さん、前世紀までインターネット空間が何に支えられていたか、ご存知でしょうか。」

「現在では、量子コンピューティングを援用した衛星間通信が各種通信インフラの基盤となっています。しかし量子コンピューティングが実用化段階になかった前世紀では、依然として有線ケーブルが大規模に活用されていました。当時の技術では、有線を介した方が多くの情報をやり取り出来たためです。」

「もちろん、当時から問題点は指摘されていました。物理的接触によるデータ傍受の可能性、災害等による破損時に発生する莫大な修理コスト、そして海中環境への影響、などです。」

「そうした背景のもと、二〇三〇年秋に開催された国連主催のシンポジウムにて海底ケーブルの地図化が議題にのぼりました。」

「それ以前にも海底ケーブルの地図はある程度存在していましたが、民間企業が敷設している点、重大な軍事機密に抵触する点を理由に完全な地図化には至っていなかったのです。」

「研究者は提案します。いつか実現する完全無線通信インフラ時代の到来に向けて、現存する全ての海底ケーブルを地図化しないか、と。」

「提案から百年が経過した二一三〇年に完全無線化が実現すると、本格的に海底ケーブルの調査が開始し、調査員の総計は全世界で五十万人を越えたといいます。ちなみに、日本海の調査には鉄塔地図計画を立ち上げた二人の家族も招待されました。」

学生の手元にある端末が映像を映した。

「当然、国連としては世界規模に渡る産官学の連携を通じて国家間の融和を企図していました。世界の繋がりを視覚的に表出させる、いささか楽観的過ぎるそうした目論見があったのです。しかし同時に、地図化が完了すると意外な副反応が発生しました。」

「それは軍縮です。」

「二一三〇年以降、地図化に伴う海底ケーブル観光ツアーが増加し、その影響で海底ケーブル保存の声が高まります。当初は撤去が既に開始しており足踏みが揃わない各国でしたが、最終的には全世界での保存が承認されます。この際、敷設事業者を擁する大国がそれぞれ維持費を供出するよう取り決めたことで、結果的に地球規模の軍縮が実現したのです。」

「皮肉にも、互いを線引きし見かけ上でだけ連結していた海底ケーブルが、ほんとうに世界を繋げてしまったのです。」

「国連創設以来最も大きな成果であるこの功績を記念し、国連本部前にはひとつの彫像が設置されています。では皆さん、こちらへどうぞ。」

彼女に連れられた見学者たちは、博物館横の広場へぞろぞろと歩いていった。

「こちらをご覧ください。」

見学者は館内で鑑賞した構造物を思い出した。

「では、いまお連れの方と話していたそこの君、この像は何に見えますか？」

突然指名された少年は一瞬の戸惑いの後、見慣れない金属塊を指で指しあどけない声で答えた。鉄塔、かな。

「正解です。」

「先ほどの紹介プログラムにも登場しました、日本の鉄塔の彫像です。素材は実際に使用された鋼が、形状は最も一般的な四角鉄塔が採用されています。」

見学者たちはじっくりと観察した。頂点付近に設置された足の正体を学生たちが考察していると、先ほどの少年が横からひとこと、それは送電線と繋ぐところ。感心した学生たちは、再び観察に戻った。

広場では市民たちがベンチに腰を下ろし昼食をとっている。彼らの頭上には時折、白色の線条が交差する光景がみられた。海底ケーブルをテーマに製作された、現代アーティストのホログラム作品である。

「本日のツアーはこれにて終了となります。閉館まで館内は自由にご覧になれますので、ぜひ。」

「遺失博物館へのまたのお越しを、お待ちしております。」

5

「すみません、二三質問をしてもよろしいでしょうか。」

博物館屋上のテラスで休憩中の彼女の背後から、申し訳なさそうに学生が声をかけた。お休みのところすみません、先ほどの説明とこの施設について少しお聞きしたくて。

構いませんよ、なんでしょう。彼女は手に持ったグラスをしまい、彼女の横に座るよう促した。

「良い眺めでしょう、街と自然を一望できる。」

新国連本部はスイスのミューレンに建造された。雪山の中腹に構える円形の概観は観光客の目を引き、宣伝に大いに貢献している。屋上は広場として常時開放され、本部前の広場同様多くの市民で賑わっていた。

ニューヨークの大規模地盤沈下を受け、半世紀ほど前、米国にあった本部とジュネーブにあった欧州本部を統合する形で新本部が移転された。その目玉は、なんといっても併設の博物館である。遺失博物館、ロスト・ミュージアムと銘打たれた本施設は、世界各地古今東西に記録される〈いなくなったもの〉の博物館である。

化石燃料で飛ぶ飛行機。
盗まれた死海文書の原典。
四季と呼ばれた特殊な気候。
新薬開発で克服された文明病。
古地図に描きこまれた架空の国。
投獄中の建築家が作り上げた黄金郷。
隕石の落下で崩壊した世界種子保存庫。
遭難者が持ち込んだ細菌が生みだした無人島。
前世紀に天の川銀河外へ旅立った探査機からの定期連絡。

母語話者の最後の生き残りが仲違いしたせいで絶滅した言語。

戦争。

遺失博物館ではそうした〈遺失物〉の記録を管理収集している。彼女は主任研究員兼非常勤ガイドとして博物館に雇われ、平日のほとんどを国連敷地内で過ごしていた。

「二十一世紀に鉄塔の地図を作り始めた二人は、どうしてそんなことを思い立ったのでしょうか。」

「もちろん、先ほどの解説プログラムしかり研究文献しかり、千賀の鉄塔に対する病的な執念が根本にあった点は理解しています。」

「しかし千賀の執念と地図化という計画の間には大きな飛躍がある気がしてならないんです。」

問い掛けに彼女が応じた。

「確かに、その通りです。彼らの地図化計画はおよそ唐突であり、鉄塔作業員消失事件についてもいまだ多くの謎が残っています。一方で、彼らが興した地図が海底ケーブル地図化の呼び水となり、ついには世界規模の軍縮を引き起こしました。人類は二十三世紀に入りようやく恒久的な休戦状態を手にしたのです。」

「未来に生きる私たちにとって、ひとつの失踪事件が引き金となって巻き起こされた一連の奇妙な出来事は、単なる偶然の連続にしか見えません。」

「暗闇に赤い点が明滅しているとして、それが崖上に立つ灯台の灯火なのか、鉄塔の尖端で輝く航空障害灯のネオンなのか、はたまた東の空に鎮座する火星の煌めきなのか、遠く離れた私たちには想像することしか許されません。」

「でもだからこそ私たちは、そうした偶然という無数の枝に対して何らかの意味付けを、何らかの名付けをしなければなりません。

生えてしまったいびつな枝を、それらの絡まりを折ってはいけないのです。私たちはその延長線上を歩んでいるのですから。」

「遺失博物館が他の博物館と大きく異なるのは、データベース的な資料展示だけでなく、それぞれに物語を与えている点です。」

「人類はおよそ初期の段階から、物語を通して世界を把握してきました。ありえること、ありえたこと、ありえなかったこと。そうした可能性の束を並行して経験する方法こそが物語だったのです。」

「遺失博物館はこれからも、様々な〈いなくなったもの〉に意味を、物語を与えていくでしょう。そこで私たちが経験するのは、実際に起きた出来事だけではありません。ありえた可能性、潰えた未来をも含めて、何重にも折り重なった偶然の物語を読むことになるのです。」

ミューレンの空には粉雪が舞っている。しんしんと積み重ねる雪の重さを嘲笑うように、中空をゆっくりと降下している。曇天の白を背景にカモフラージュする粉雪は、線としての連なりを予め拒否しているようで、しかし個々が独立した糸の撚りのようでもある。地面に堆積してゆく新雪を、足にブレードを付けた観光客が滑走していく。いつしか航跡は長い尾となって、ミューレンの街へ延びていく。しかしやがて、降り積もる白さの内側に、その長い尾もそっと身を隠す。

学生が尋ねる。

「もし、この地図にまつわる奇妙な出来事を物語にするなら、それはどんなものになるでしょうか。」

彼女はミューレンに降りしきる粉雪を手で受け止めて答える。

「たとえば、そう、物語はこんな風に始まります。」

雨は点であり、同時に、

「ミミとココ」

児玉　菜美穂

■受賞のコメント■

この度、私の作品を明治大学文学賞・倉橋由美子文芸賞、佳作に選んでいただき、審査員の方々にお礼を申し上げたいと思います。また、このような機会を与えてくださいました明治大学連合父母会、株式会社阿久悠の皆さまにも、深く感謝いたします。

今回、私が書かせていただきました『ミミとココ』は、清水茜の人気漫画『はたらく細胞』とアンデルセン童話『人魚姫』からヒントを得たものです。体を生かそうと必死に奮闘する赤血球や白血球、そして自分の幸せよりも他人の幸せを願って泡となった人魚姫。この二つの姿が私の中で一つとなり、『ミミとココ』という小説となりました。本能のままただ生きるのが正解か、それとも人魚姫のように生き方に意味を求めるのが正解か、これは高度な知能を持つ動物としての人間にとって、最大の課題であるように私は感じます。『ミミとココ』では、この課題を女子高生の恋愛を通して表現しました。

まだ、佳作をいただいたという実感がはっきりと湧かず、未だに新鮮な気持ちです。佳作をいただいたとは言え、私の作品にはまだまだ未熟な点も多いと思います。選評してくださいました先生方のお言葉をヒントに、さらに素晴らしい作品を生み出せるよう、これからも邁進していく所存です。

ミミとココ

序

よくよく考えてごらん。ミミとココはいつだって一緒じゃなかったかい？　そして一つじゃなかったかい？　そう、そうだよ。いつも一緒だった。でもね、並大抵の仲良しとはちょっと違ってさ。

ミミとココはいつから一緒だったかしら。少なくとも生まれた時からじゃなかった。確か先に泣いたのはミミでさ。「ぎゃああ、ぎゃああ」って。初めて感じる薬やらゴムの手袋やらのツンとした匂いの混じった空気を肺いっぱいに感じてね。しばらく感じるありとあらゆる初めてに囲まれて、男の人の「ほら、生まれましたよ！」という声や、「うっ、うっ、生まれましたか？」という息も絶え絶えぶるぶる震える女の人の聞き覚えのある声を聞きながらさ、ミミは「あっ、あたし生まれたんだ」って言葉にはせずに思って元気に泣いたの。ほら、生まれたばかりの赤ちゃんって自分で呼吸するために肺を風船みたいに膨らませなきゃなんないでしょ？　ミミはそれが学者よりも先に分かってた。だから人の声が羊水越しじゃなく、直接自分の耳に届いて自分の誕生を知った時、嬉しいでも悲しいでもなく「ぎゃああ、ぎゃああ」と泣いたのさ。

さてココが生まれたのはもうちょっと後のこと。ミミと違ってココは「ぎゃああ」とも泣かずにひっそりと生まれてきた。確かミミが初めて甘いものを口にしてた時だったかな。あんまりひっそり生まれたもんだから、母さんでさえ気づかなかった。ココは生まれた時「おいしいわ、ああ嬉しいわ」と思った。そうしてミミとココは一緒になった。ところでココが泣く時はね、ミミが生まれた時泣いたのとは違ってちゃんと悲しみを持って泣くの。ミミとココでは「泣く」ということはちょっぴりニュアンスが違ってってさ。例えばだよ。お腹が空いた、だとか部屋の中が熱い、だとかで泣くのはミミ。対して母さんが自分のベッドから離れてっちゃった、とかお気に入りのおもちゃを取り上げられちゃった、とかで泣くのはいつだってココなの。

さてと、こうして誕生したミミとココ。こうして人の人生が始まっていくんだけど前にも言った通り、ミミとココはいつだって一緒だった。ご飯を食べる時も、母さんとお散歩する時も、毎週金曜夜八時にやってるお気に入りのアニメを見る時だってね。でもね、それはミミとココが本当に仲良しだったからとかじゃなくて、どうしても一緒じゃなきゃダメだったからなの。

不思議？　まあでもミミとココは少なくとも、馬の合う仲良しじゃない。だってねミミとココ、ちっとも似た者同士じゃないんだもの。正反対よ。外見はともかくとして、物の見方も感じ方も何もかも違ってるんだもの。

例えばミミ。ミミの前に、色とりどりの野菜とアルファベットの形をしたマカロニがいっぱい浮かんだスープがあるとするじゃない。それを見てミミはまず目を使う。「うん、食べ物だわ」そして次は鼻を近づけてくんくん匂いを嗅ぐの。「うん。これは食べても大丈夫」そしてスプーンでスープを掬ってパクリと口に入れる。「うん。やっぱり食べられるわ」スープが喉を伝って胃に落ちると、またもう一口掬ってパクリ。パクリパクリと何度か繰り返して体が温まってお腹の皮が張って満足するとそっとスプーンを置く。「これで十分。ごちそうさま」

それじゃココはどうかって？　彼女もやっぱり見ることから始める。でもね、ココは目でスープを見るんじゃないの。食べられるかどうかじゃなくてミミはね、スープを見たら必ずこう言う。「わあ、おいしそう！」そしてスープの中の具材で色々と考えてみる。青々としたブロッコリーなんかには「わあ、これを何百個、何千個と繋げたら大きな森ができるんじゃない？」と思ってみたり、ＡＢＣの形をしたマカロニなんかには「これをスプーンで集めていい具合にＣＯＣＯの字ができないかな？」と思ってみたり。そう、ココにとってスープは食べ物ってだけじゃないのさ。

こんな風にスープ一つにしたってミミとココでは見方がまるっきり違う。そんな風に正反対なミミとココ。ミミはよくココのことを不思議がる。

「どうしてブロッコリーで森を作ろうとしたり、マカロニで文字を書こうとしたりするんだろ。アレは食べるものよ。それ以外のなんでもない。ささっと食べちゃえばいいのに」

ココもよくミミを不思議がる。

「どうしてブロッコリーもマカロニも、全部さっさと食べちゃうんだろう。アレは食べるものってだけじゃないのに。文字にも森にもなるんだから。色々と考えてみればいいのに」

こんな風にミミとココは、ずっと一緒にぴったりくっつき合いながらも、お互いを理解できないままでいる。どうしてどうしてが重なり合って、重なって重なってぐんぐん大きくなるけれど、その「どうして」に決着をつけることは結局できなかった。ミミとココ、ずっと理解し合うことはなかったし感化されることもなく、平行線のまま時間は進む。

チクタクチクタク、ミミとココはどんどん大きくなる。中でもミミの成長ぶりと言ったらそりゃあもう！　じっと目を閉じて眠りに沈んでる間にミシミシ大きくなるの！　クラスのやんちゃ男子を圧倒するほどだった！

ココもどんどん大きくなった。一年また一年とお日さまがおはようとお休みを繰り返す度に、言葉を一つ一つ知っていく。小学校の半分を過ぎたあたりにはブロッコリー一つにしたって、何十もの名前で呼ぶことができたの。「いたずら妖精の秘密の隠れ家」とか「小っちゃなテントウムシの待ち合わせ場所」とか。そんな風に色々な名前を作り出していくココを、ミミは相変わらず不思議がる。

「どうして一々余計な名前を付けて、ゴテゴテ飾り付けたりするの？　ブロッコリーはブロッコリー。妖精なんか隠れてないし、テントウムシなんかくっついてたら汚いじゃない。変なこと考えちゃう前にパクリと食べちゃえばいい。そうすればお腹がいっぱいになるもん。そうよ、ブロッコリーはお腹を満たすためだけのもの。他の名前なんか付けるだけ無駄だわ。ココがすることって本当にしなきゃいけないことなの？　あたしのすることのほうがよっぽど役に立つ」

「ほら、始まった。ミミはいっつも一番を決めようとする」

ココも負けじと言い返す。

「あんたもあたしも大事なのよ。確かにあんたの言う通りブロッコリーに名前を付けるより早く食べちゃったほうがお腹は膨れるわ。でもさ、あたしは、と言うか人間はさ、お腹のためだけに生きてるんじゃないもん。だからこそあたしはブロッコリーを何十もの名前で呼ぶのよ」

ますます分からなくなるミミとココ。やっぱりお互い平行線。

「ココったら本当にバカだわ」

ミミはよくこう言う。

「生きるってことには工夫がいるわ。だからあたしはできるだけ早くお腹を膨れさせて、危ないことからは遠ざかろうとする。なのにココのやることって本当にめちゃくちゃよ。お腹がペコペコだってのに給食のパンを隣の子にあげちゃうし、鉄棒の逆上がりだって落っこちて頭を打ったりしたら大変なのにやろうとする。達成感が欲しいからって本当にバカよ。死んじゃったら何もかもお終いなのに。どうして人生をぐちゃぐちゃぐねぐね進もうとするの？　なんの得にもならないことばっかしてさ」

あれはね、小学校も段々終わりに近づいたある冬の日のことだった。北から来る風が窓のガラスをガタガタ揺らしてさ。朝、玄関に母さんが撒いた水がカチンコチンに凍ってるのを見て、ミミはこの夜じゅうずっと炬燵に籠城しようと決心してた。そうして晩御飯の後、ミミは炬燵布団の中で芋虫のように体を丸めて窓の揺れる音を聞いた。

「寒い寒い。今外に出たらきっと凍えて死んじゃう」

そんな風にブツブツ繰り返し、熱々のヒーターのそばで何度も足を組み替える。そうするうちに冷え切った手足もポカポカ温まってミミを益々布団の中に縫い留める。

「あんたいい加減にお風呂入りなさい！」と、母さんの声が聞こえてくるけどもミミはどこ吹く風。こんなに温かいのに炬燵を出るなんて冗談じゃない。わざわざすっぽこぽんになるなんて、凍死しに行くようなもんだわ。

なんてぬくぬくしているその時、ココが「ねえ、ちょっと」とミミを呼んだ。嬉しいのかどうか分からないくすぐったそうな調子で。

「今からちょっとさ、絵本読まない？」

「絵本？　十二歳にもなって？　小さいころ散々読んだのに？」

「なんとなくよ。理由なんてない。まあ、あんたには分かんないか。とりあえず部屋に行ってよ。『人魚姫』が読みたいな。あれ、すっごく好きなの」

「あれが？　どうしてよ」

「理由なんていらないでしょ」

ミミは仕方なく炬燵から這い出た。こんな寒い日に廊下に出るなんて。それでも、ミミはココの言う通りに自分の部屋に向かった。冬の廊下は南極の氷を敷き詰めたみたいに冷たくて、最早暴力的な寒さ。こんな日に海が舞台の話を読むなんて正気じゃないと思ったけど、ミミは黙って歩きとうとう自室のドアを開けた。

「上から三段目にあるでしょ。そう、それそれ」

ココの指示通りにミミは古い本棚から絵本を一冊引っ張り出して、床に広げた。アンデルセンの『人魚姫』。貝殻のティアラで王女の身分を示された女の子が、魚の尾を岩の上に投げ出して浜辺のお城を見つめている。蛍光灯の光を受けてきらきらと七色に光るスパンコールが貼られた尾びれが、ミミの目に眩しい。

「いつ見ても綺麗！　この人魚姫の寂しそうな背中！　とっても素敵だと思わない？」

ココはこの絵本を見るといつもこう言う。その物言いにミミは疑問を覚えずにいられない。

背中が寂し気ってどういうことよ。普通感情は顔か、仕草に出るもんでしょ？　首を支えてるだけの背中にそんな芸当できっこない。だって背中なんてたかが皮と筋肉と骨の塊じゃない。寂しさを表すなんて役目、背負ってるわけじゃないんだし。

そうは思ってもミミはどうしてもココのように言葉にはできない。そんな不満を唇の端を歪めることで表して、ミミはそっと絵本の表紙を指でなぞりもう一つポツンとこう思った。

この人、鰓と肺どっちで呼吸してんのかしら。

あんまりココが「早く読もうよ」と急き立てるから、ミミは子供の時によくしたようにカーペットが敷かれた床に腹ばいになって絵本を読み始めた。ページをめくる度に現れる、色とりどりの魚が泳ぎまわる暖かな海や、魔女の薬で足を手に入れた姫と王子の立ち姿や、目に痛いほど真っ白なウエディングドレスの強烈な絵に、ココは空気の中にキラキラと輝く粒子がぱっと散るように楽し気に声を上げる。ミミは逆に、そんな輝くばかりの華やかな紙をむっと片方のほっぺを膨らませて見ていた。

「どうして一々こんな目がチカチカするスパンコールを貼ったりするの？　色だって多すぎる。絵なんて形さえ分かればそれで十分なのに」

手の動きに合わせて話が進んでいくうちにとうとうミミとココは、姫が泡となって消えるラストシーンにたどり着いた。美しい姫の下半身が、相変わらずチカチカするスパンコールでできた泡に覆いつくされている絵。その絵を見てミミはますます嫌な気分になる。

相変わらずクソな話。

ミミは不服そうにココの方を窺った。小さいころこの話を読んだ時、ココもまた今のミミと同じようなことを言っていたのを思い出したんだ。

「あんまりだわ！　人魚姫は何も悪い事してないのに！」

ミミは、こっそりココがまた「あんまりだわ！」と言うのを期待した。でもね、ところがよ。やっぱりミミにとってココというのは気まぐれで理解し難いものね。あの時のココは、まるで三月の暖かな空気にふわふわ漂う蝶のようにうっとりした声でこう言ったの。

「素敵ね、この話。今まで読んだどのお話より素敵だわ」

「それ、マジで言ってる⁉」

ミミは仰天してココに大きな声を出した。

「だってココ、昔はあんたもあんまりだって言ってたじゃない！　それなのに一体どうしたってのよ！」

「そりゃ、長めに生きてれば考えが変わることだっ

てあるよ」

「こんなクソな話なのに⁉」

ミミはむずむずと足の指のあたりを動かした。ココの中身がちっとも透けて見えてこないのがなんだか腹立たしくって。

「だってココ。この話おかしいじゃん！　あの王子はもう違う人と結婚しちゃうのに自分が消える方を選ぶなんて、このお姫様相当頭が悪いよ！　せっかく助かる道を姉さんや魔女が作ってくれたのに！　大体さ、この王子を助けたところで人魚姫にはなんの得にもならないのよ？　全く！　自分のメリット、デメリットを見極められないなんてあたしに言わせりゃ、大バカ者よ！」

「ほら、ミミの悪い癖。あんたは目で感じるものが全部だって思うし生き方よりも生きることしか考えないよねぇ」

ココののんびりとしたその言葉が、ミミへとしっとり沁みとおる。

そうするとなぜかもうミミは言い返す気が起きなかった。これはいつものこと。どんなにココを不思議がっても、どんなにココに腹を立てても、なぜか彼女に反論されるとミミは黙り込んでしまう。なんとなくだけど胸の奥で、ココに逆らうことなんてできやしないとミミは思ってしまっている。

「ミミ。あんたが見てるよりね、ここにはたくさんのものがあるし、

そのもの一つだけでもあたしで見れば何千もの意味が隠れてるのよ。だから人魚姫だってただあんまりなだけじゃない。あたしは最近それに気づいたんだ。国語の教科書を音読したり、クラスの男子とドッジボールしたり、アイスの当たり棒を机の引き出しにしまっておこうか悩んだりしてるうちにね。人魚姫にはね、ただかわいそうってだけの感想より他のものがあるんだ」

なんだか全身くすぐったい感じがする。ミミはそう思った。ココにぷっと膨れた頬っぺたを突かれてるみたい。ココの言葉はまだまだ続く。

「ミミ。幸せってきっと自分のためだけにあるんじゃないのよ。人魚姫の幸せはさ、自分が王子と結ばれることじゃなくて王子が好きな人と結ばれることだったんじゃないかな」

「でも、それってなんか……損してない？」

「そうよね、確かに損だわ。でもその損を進んで選んだんだよ。すごいよね。あたしにはこういうことまだできない気がする。あたしはまだ欲しがる方だからさ。でもさぁ、ミミ。あたしももっと大きくなったらこういう立派な恋ができるようになるのかなぁ」

ミミはもう一度、絵本の上に目を落とした。やっぱり紙の上のスパンコールが光りすぎて目が痛いし、人魚姫が死んでいく後ろで呑気に花嫁を愛撫している王子の間抜け面には相変わらず呆れた。でも、さっきみたいに「くだらない」だとか「クソみたい」だとかはなんとなく言う気にはなれなくて、ミミはしばらくだんまりだった。壁に掛けられたフクロウ型の時計が刻むリズムだけが、ミミを刺激する。

そしてその時だった。ミミは突然床から跳ね起きると、瞼を何度も閉じては開いた。そうして親指の腹を紙の上の人魚姫の顔に当ててゴシゴシと何度も擦った。擦って擦って、ようやくミミはほーっと熱い息を吐きだした。

ああ、びっくりした。

心臓がいつものテンポを刻みだしたのを感じて、ミミは一言こう言った。さっきのアレは彼女にとって本当に恐ろしいものだったもの。怖いと思う暇もないくらい、びりびりっと背筋を駆け上っていく強烈な恐怖。ココの感じる恐怖よりももっと本能的なもの。

目が痛くなるほどのスパンコールに下半身を覆われて泡になって死んでいく人魚姫の顔が、一瞬だけココに見えたの。そのあまりにもひっそりと控えめな表情に、ミミはたちまち怖くなった。そんな顔を擦り取ろうと親指がゴシゴシと動いた。

「なんなのミミ？　そんなに怖いの？」

ココの相変わらず呑気な言葉の表し振り。そんなココの様子にミミはほっとしたけど、さっき立ち上がった不安がまだ端々で燻っている。

ココが消えてしまうんじゃないかしら。

警告灯のようにミミのどこともつかない場所で光る、そんな不安。

いつかいなくなってしまうんじゃないかしら。この人魚姫のように泡になって誰にも気づかれることなく、ひっそりこっそりなくなってしまうんじゃないかしら。

ついさっき指の腹が熱くなるのに合わせてしまい込んだ汗が、もう一度ミミの背を伝い始めた。ミミは風呂上がりの犬が水気を振り払うようにブルブルと全身を震わせた。激しい動きに合わせて、恐ろしさが抜け自然と筋肉が引き締まる。

そうだ。ココはとっても脆くて弱くて壊れやすいんだ。あちこち寄り道しては、傷ついて誤魔化して、糸で吊り下げられてるみたいにゆらゆら揺れて、いつプツっと切れてしまうか分からない。

「あんた、さっきから何度も言ってるでしょ！いつになったら風呂入んの！」

母さんの怒声が段々部屋に近づいてくる。それで

もミミもココも、返事をしようとはしなかった。ココはじっと絵本を見つめ、ミミはじっとココを見ていた。

ココを守らなきゃいけない。そうよ、ココを消したりしてはいけない。ミミとココ、両方揃ってなきゃいけないわ。両方揃って人間なんだから。あたしはココを守るための鎧なんだ。ココのバカげた行いを止めるために、あたしはお腹だって空かせるし、体中痛くすることだってするんだわ。そうよ、両方揃ってなきゃ。別にココを愛してる訳じゃないけれど、それでも彼女を守らなきゃいけないのは分かる。あんな訳の分からない終わり方でココを消したりなんか絶対させない。一緒に人間であるために生まれたんだもの。ならその使命をあたしは守らなきゃ。

さあ、人魚姫はとりあえず置いといて少し時計の針を進めてみましょう。小学校が終わってやがて中学生になると、ミミとココは益々ぐんぐん大きくなった。

だけどね、ミミの方は十四歳ぐらいになるとパタッと成長が止まってしまったの。そう確か初めて生理が来た時くらいからかな。背丈も伸びなくなったし、声もこれ以上は低くならなかった。「多分、もうこれで十分だからね」と、ミミはケロリとして満足そうに言っていた。

対してココよ。彼女の方はというと、成長のパッタリ止まってしまったミミとは違ってぐんぐん変わっていった。昔のように、ただ嬉しくて笑って、悲しくて泣く、それだけじゃなくってね、嬉しい時に泣いて、悲しい時に笑うということを知っていった。ミミに言わせれば本当に訳の分からない行為だけど。そして年を取れば取るほど、ココは不安定になっていった。先輩に無視されてるかも、だの、部活で陰口言われてるかも、だのといった心配事を持ち込んではミミをよく嘔吐させた。ミミに生理が来た時なんかもう大変でさ。いくらミミが「誰にでも来るものなんだから大丈夫」と言っても「どうしよう！　どうしよう！　血が出てる！　怖いよう！」と、これぱっかり喚き散らすわ泣くわでミミもすっかり参っちゃった。

そんな風にココがぐらぐら揺れる度にミミは必死に彼女を宥め、時にはわざとお腹を空かせたり、体調を悪くして学校を休ませたりして彼女を守った。そう、人魚姫のように泡になんてさせないために。

でもそんなココも中学を卒業するころにはすっかり落ち着いた。やたらとパニックになることもなくなったし父さんと母さんに反抗することも少なくな

った。そしてココが落ち着くに連れて、ミミの方も体調を崩したり気分を悪くしたりすることもなくなった。つまり、成長が完璧に終わったということよ。

それで。ようやく大人になれたことは喜ばしいけど、やっぱりミミにとってココはよく分からない存在だった。ココを守ろうとは思ったけれど、別に彼女を理解したいとか愛したいとか、そんな思いはなかったもの。だってそういうもんはミミの役目ではないんだし。だからココはミミにとっていつまでも訳が分からない。相変わらず理解し難いことを言い理解し難いことをする。全く理に適ってないことばかり。そうだ、例えば恋。恋においてもミミとココは全然違った。

恋ってどうしてすると思う？　ミミに言わせりゃそれは「得になるから」なんだってさ。

「だって人間にしろ動物にしろ、いつかは子供を生まなきゃいけないでしょ？　そのために生理だって来るし、胸だって大きくなる。恋も子供を作るための下準備よ。ちゃんと女が男に惹かれて結ばれて、自分を残していくためにね。いわば自然の命令、そして自分の得のためのものよ恋なんてのは。ピンクのハートや、胸のぞわっとするような御大層な言葉で、ゴテゴテ飾り立てるほどのものでもない」

「それはどうなんだろう」

ミミが喋れば、ココはこう言う。

「恋って……人間って……ミミだけで成り立ってるもの？　あたしだって人間の一つなのに。ミミが言うようにそんなに単純なものなのかしら？　そんな風になんでも命令通りにカチンカチンと動いていくアンドロイドのようなものと人は違う。ミミ。人は……いいえ、あたしは時には自然の命令にだって背くしどんな力の支配だって受けないわ。例えあんたが鎖に繋がれてても、あたしは宇宙まで飛んでいけるもの」

こんな風に対立しあってて果たしてちゃんと恋ができるのやら。いつしかココがもう本当にさっぱり分からない類の恋をした時、ミミは一体どうなるんだろう。そんな心配がさ、高校一年の時とうとう本当になった。ココが恋をしたの。それも、ミミにとってもう本当に頓珍漢でしったかめったかでとち狂った恋をね。

あれは確か高校の入学式。人生の節目節目で入学式ってとりわけ緊張すると思う。友達ちゃんとできるかな、とか、先生優しいかな、とか。そんな不安

がぐるぐる渦巻いてさ。ココもそうだった。前日の夜からココは「大丈夫かな、大丈夫かな……」とおろおろして、そのおかげでミミは吐き気と戦いながらトイレに何時間も籠城する羽目になった。

家を出るギリギリまでゲーゲーやってようやく学校に着いたけど、まだココはうるさかったしミミも胃が裏返りそうなくらい気持ちが悪かった。ココが「どうしよう！　どうしよう！」と喚く度にミミの心臓がギリギリ痛む。

「ちょっと、いい加減落ち着いてよ！　あんたがソワソワすればその分苦しむのはあたしなんだからね！」

ミミはぴしゃりとココを叱りつけた。四月の桜が校門から続く煉瓦道の上に降り注いでいる。暗い色の歩道に花びらの白が眩しい。だけどその花びらを雪や星に喩えるだけの気力は、あの時のココにはなかった。

そわそわと辺りを見渡せば真新しい制服に着られた新入生がたくさん。その中でも特に女の子達を見て、ココはため息をつく。

「どうしてみんなこんなに可愛いんだろ。同じ黒髪なのにあの子達のはずっと華やかでパッと明るい！　まるで一本一本綺麗に束ねられた絹糸みたい！　ミミ、あんたに髪を巻かせりゃよかった！」

「いい加減にしてよ、ココ！　髪がなんだっての、ただの頭に生えてる毛じゃない！」

ぶつくさ文句を言いあいながらミミは玄関に入った。端から端までずらっと並んだ下駄箱に、たくさんの新入生がもじもじと動いていた。あちこちから「一緒のクラスだっけ？」だの「よかったら教室まで一緒に行かん？」だのといった声が聞こえてくる。

「ここだわミミ！　ここで友達作りよ！　ほら、近くの子に話しかけて！」

ココが喧しい。それでもミミは、下駄箱から自分の名字の「海野」を見つけた後もどうにも声が出せなかった。喉がギリギリと引き攣り舌が海綿のように乾く。

「ココのバカ！」

ミミは毒づいた。こうなるのは大抵ココが緊張しているせい。いつだってそう。ココが思うことは、大抵いつもミミの上に正直に現れる。心臓が呼吸器官を上り詰めんばかりに高鳴る中ココが震える声で「話しかけろ」とせっつく。そんな命令に反して、ミミはただずっとおろおろと周りを見渡し何度も口を開閉させる。そんな風に五分くらいが経過した、その時だった。

「ごめん、海野さんだっけ？」

ミミのすぐ後ろで声がした。その声に喧しかった

ココがすっと静かになった。
「えーと、ごめんね急に話しかけて。でもすごい可愛い子だから気になっちゃって！」
「綺麗な声」
　ココが静かに呟いた。
「いいえ、綺麗って一言だけじゃ足りないくらい。声だけで色々な思いが広がっていく。水面に指先をちょんって付けたら、さあって模様が大きくなるみたいに」
「おーい、海野さん？　え、待って名前あってるよね？」
　声がもう一度呼びかけてきた。ココが大慌てでミミに「ほら返事返事！」とうるさく言う。
「ああ、ごめん！　あってる、あってる！」
　精一杯の笑顔を作ってミミは後ろを向き声の主の顔を見た。自分の後ろに立つ女の子。その顔を間近で見て、ミミは自分でも気づかないうちに瞼をぐっと持ち上げていた。
　わ！　綺麗な子！
　ミミは「ハンズアップ！」と怒鳴られた時、パッと考えなしに両手を上げる時のようにこう思った。後ろに立ち声をかけてきたその子は、そうまあ、ミミ的に言うならきちっと整った顔立ちの、本能的に素敵だと感じざるをえない美少女だったの。
「おっ、よかった。えーと、海野……心美ちゃん？私、島田志保。よろしくね」
「あ、うん、よろしく。えっと……志保ちゃん」
　ミミはガクガクと頷き笑顔を顔いっぱいに広げた。島田志保が、その顔を見てさらに口角に力を入れる。
「ん、どうも！　心美ちゃん、クラス同じだよね？一緒に行こ！」
　志保がミミの手をぎゅっと握って引っ張る。つやつやとして滑らかな手。ミミが感じるその感触がココにとっては新しかった。歩きながら志保は盛んに喋りミミも精一杯返した。ココが喜んでいるのが分かる。だってやけに胸がまったり寛いでいるんだもの。
「あんたの計画通り友達ゲット。よかったじゃん、ココ」
　ミミがココにこっそり言った。
「うん、本当によかった。しかもとっても綺麗な子」
「確かに、きっちり整った顔だね」
「あの黒髪を見て。綺麗よね、ミミ」
「うん、まあね。ツヤツヤしてるね」
「それだけじゃない。ああ、まるで星月夜の空をドロドロに溶かしてその溶液で染め上げたみたい！いいえ、まだ足りないわ。なんて言い表したらいいか分からないくらい！」

「え、そうかな？　確かに綺麗だけど髪の毛は髪の毛じゃない？」
「ミミは本当にもう！　じゃあ、ほらあの肌の色を見て！」
「はいはい。ちょっと日焼けしてるけどすべすべだね」
「まるで灼熱の砂漠の砂地のよう！」
「いや、なんで人間の皮膚が砂になんのよ」
　志保はミミとココの喧しい会話なんて聞こえていなかったし知りもしなかった。教室に並べてある椅子に二人で座って「家、どこらへん？」だとか「この校長狸に顔めっちゃ似てない？」だとか、全くもって実りのない会話を先生に止められるまで何十分もした。
　不思議だ、とココは思った。どうしてこんな中身のない会話が志保と一緒だと面白いの？　よく見渡せば同じくらい美人な子は結構いるのになぜ志保だけ違って見えるの？　なぜあの時後ろにいたのは志保だったの？
　考えても考えても答えは出ない。それが一層ココを高ぶらせる。高ぶって高ぶって。無性に志保のそばを離れ難くする。入学式が始まる十分前教室の外に番号順に並ぶ時だって。

　ようやくココが自分を落ち着けたのは、志保と連絡先を交換し、家に帰り、晩ご飯を食べ、ベッドに寝転がっていた時だった。
「ミミ、心臓がドキドキしてる？」
　ココがベッドの上のミミにこう喋りかけた。
「うん、してる。もうそりゃすごい勢いで。苦しいぐらいよ。ココ、あんたまた変なこと考えてる？」
「そうね……確かに変ね……」
　ココが笑う。ミミは怪訝そうに顔をしかめた。ココが笑うのは必ずしも嬉しいからってだけじゃないんだもの。今日は新しい友達が一人できて万々歳のはずなのに、どうしてこんな怪しい笑い方をするんだか。ミミはひたすら首を捻ってお風呂もすっぽかして眠った。

　人と人との繋がりなんて長続きしないとは言うけれど、何にでも当てはまるとは限らないもの。朝のトーストに苦心しながら卵を落としている間に高校生活は始まっていったけど、志保はずっと一緒だった。だけどそれはミミとココの一緒とは違って、志保はしっかり選んで一緒だった。それが純粋に嬉しかった。

ミミはよく志保と触りあった。志保はやたらとボディタッチが多い子で彼女の指はよくミミの髪や手に伸びた。

「心美、めっちゃ髪綺麗だよね」

そう言って志保はよくミミの髪を弄くり回して編み込みを作る。彼女の指が頭皮や手の甲の上を滑っていく度に、ミミの心臓はいつも漁船の甲板で跳ね回る魚のように大暴れした。変だな、とミミは思う。この所志保の前ではいつもこうだ。本当はこういうのは、男に向けるものなのに。実際、ミミは志保に劣らないくらい美人ではあったから男子生徒に話しかけられることも多い。そういう時はちゃんと心臓の引き攣りが彼に向けられる。それなのに、志保に名前を呼ばれると男への高鳴りがパッと消えてしまう。変だな、とミミは思う。

ココの方も、混乱と不思議のただ中にいた。この数日間起きるのは知らないことばかり。初めてで不思議で、どうしようもなく高ぶることばかり。志保がこっちを見てくる。あの目。あの目を何かに喩えて見たくなる。何に？　星の粒か柘榴の一片か、何か宝石の欠けた部分か。いいえ、それだけじゃない。何かもっと他のもの。星や宝石なんかよりもっともっと相応しいものがあるはず。でも一体何？　志保の目は「美しい」という言葉すら超えてしまう。あの目が本当に堪らない！　何時間でも、いいえ一生かかったって見つめていたい！　志保！　あたしを見て！　あたしはミミの奥底でひっそりと生きている！　今まで誰にも見せたことはないけれど、でもあなたには見つけてほしい！

「胸が痛いよ、ココ」

眠る前、ミミが憎々し気にココに言った。

「痛くて苦しいよ、ココ。あんたのせいだ。あんた最近おかしいよボーっとしてさ。どうしたってのよ」

「ミミ。胸が苦しいのは確かにあたしのせい。あのね、ある人のことを思うと必ずあんたを苦しめてしまう」

「ある人のことを思うと？……ねえ、ココ、それってもしかして……」

ミミはにやりと笑った。ははあ、なるほど、ココのヤツとうとう……！

「あんた、誰かに恋してるんじゃない⁉」

「え……えええ⁉」

ココがびっくりしてミミに言い返す。

「ええ？　嘘でしょ……あたし、恋してるの？」

「そうよ、そうよ！　特定の人をココが思うと、あたしの胸がきゅーっと痛くなる！　これって間違いなく恋してる時の現象よ！　ココったらバカね、自

分のことくらい自分で面倒見て……あれ？」
ミミはそっと自分の頬に触れた。すると、指先がじっとりと湿る。うそでしょ⁉　ミミは大急ぎでスマホを取り出し、カメラを内側に向けた。
嘘でしょ⁉
ミミはもう一度、今度はもう少ししっかりと驚いた。
どうして⁉　なんでなの⁉　なんであたしは泣いてるの⁉
「ココ！」
ミミがぎろりとココを睨んだ。その間にも、はらはら涙が溢れる。ココの方も泣いていた。ミミのように涙は出ないけれど、ぽろぽろぽろぽろ感情がココから滴り落ちる。
「ちょっとなんなの、ココ！　いい加減にしてよ！」
ミミが怒鳴った。
「なんで泣いたりするの！　勘弁してよ、もう！　恋ってのは別に悲しむことじゃないわ！　むしろ嬉しいことよ！　あんたとあたしはこれでもう一人前の女なんだから！」
「だって、だってあたし、だって！」
ココがつっかえつっかえ話し出した。
「恋なんて知らなかった……今まで知らなかったのに急にこんな……ミミ、どうしよう。なんだかあたし変な気持ち。こんなにぐちゃぐちゃ乱れてるのにそれがたった一言で片づけられちゃうなんて……」
分からん。
ミミはすっかり呆れ果てて頬の涙をパジャマの袖でぐいっと拭った。
全くもって分からん。ココはいつも一つのことに千の感情を持ち込む。
「落ち着いてよ、ココ。ま、そうね、初めてのことにびっくりして怖くなるのはよくあることよね。ほら、もう泣かないで、ね。そういうものなんだって、割り切ってさ。で、取り合えず教えてよ。あんたが思ってあたしを苦しめるのは一体誰なの？」
「あのね、あの……ね」
すっきりさっぱりと言ってのけたミミに、ココは水あめのようにのったりとした返事をする。あまりに「あのね」が繰り返されるのでミミはうんざりして勝手にココがこれから出す名前の推測を始めた。
学級委員長の橋本君かな。それとも二組の野神君？　あ、もしかしたら上条先輩とか。
そんな風に男子の名簿を思い出していると、ふとミミは嫌な予感がした。
あれ？　そういえばあたしの胸が苦しくなるのって、いつも……。
「あのね」

ココの五十回目の「あのね」。だけどなんだか声色が違う。
「志保なの」
ミミは沈黙した。カバみたいにパカっと口を開けてしばらくだんまりになり、そして大声を出した。
「志保⁉」
ココが黙ってうなずく。ミミは口をパクパクさせながら、ああそうかとどこか冷静に納得した。
そうだ。あたしの胸が変になるのはいつも志保の前だった。
だけど、次の瞬間には勢いよく頭を左右に振る。
志保？　志保ですって？　彼女のことが好きだって言うの⁉
「ちょ、待って、志保⁉　冗談じゃないわよ！」
ミミは厳しい大声でココに詰め寄った。分からん。本当に分からん。ぐるぐるする思考の中、そんな文句ばっかりが行ったり来たりする。
「しっかりしてよ、ココ！　考えてみて！　志保は女なのよ！」
「そうよ、女よ！　でもそれがなんだっていうの！」
ココから滴り落ちていたごちゃごちゃした感情がパタリと止まっていた。彼女の声は強かった。強いけれどほんの少し震えていた。
「なんだってのって、ココ！　とにかく女が女に惹かれるなんてダメなの！」
ミミも負けじと言い返す。
「あんた、どうして生き物は男と女に分かれてると思う？　それはね、より強い子を残すため。そのために自分とは違うものを取り入れるのよ。そうやってあたし達がまだ粒だった時から本能としてインプットされてるの！　だから女は男を必然的に欲しがる。インプットされた本能に従って女は男と結ばれて子供を授かる。そうやって自分を残していくの！　だから恋なんて自分の本能を満たすためのものよ！　だけど女が女に惹かれるなんて、そんな……いい？　志保はあんたに子を産ませてくれないしあんたの子を産んでもくれない！　言わば全くメリットがないのよ！　それなのに彼女を欲しがるなんて正気じゃない！　生物として道を外れてるわ！」
「そうとは思わないわ！」
ココが言い返した。そしてまた泣き出す。でも今度滴り落ちるのは、さっきのただびっくりして驚いてポロっと出るものじゃない。ギリギリっと食いしばってつい漏らしてしまう、そういう感情の逆りだった。
「ミミ。人間ってそんな風に損得のためだけに生きる、そんな単純なものかしら⁉　欲しがってしまうものにそんなにくっきり理由を付けてしまうものか

しら⁉　ミミ、あんたはそうかもしれないけど、あたしは違う！　あたしは恋をしっかり目的を持ってするものとは思えない！　恋ってするもんじゃなくて落ちるもんだもの！　自分でも気づかないうちに訳も分からないままに、すとんと落っこちてしまってる」

ココの逆りがミミの涙になった。ココが溢れ出させる切なさや激しさが、はっきり形となってミミから流れ出た。

「どうして志保を好きかって、そんなのあたしにも分からない。上手くいきっこないのに手に入りっこないのに、どうしても惹かれてしまう。理不尽だわ、あんたの言う通り。でもミミ、あたしが人間だからだわ。理由も分からないことしてしまうのはあたしが人間だからだわ」

ミミの頬を、だらだらと涙は流れる。熱い涙。それなのにひたすら熱をミミから溢れ出させるココには、少しの体温もない。

ココ。

理解し難い感情に飲み込まれ、ただ泣き続けるココを見つめるうちに、ミミはあの人魚姫を思い出していた。あんなくだらない理由で誰に気づかれることもなく、ひっそりと消えてしまった人魚姫。その顔にココが重なったあの冬の日。なぜだかココに危うさを覚えてしまったあの日の夜。

ココの志保への恋。ミミの内側にこっそり隠されたココの恋。そんな恋を、ミミはただ驚き混乱しながら持て余す毎日。志保に触れられる時も他の友達に彼氏の話を持ち掛けられる時も、ミミの心臓は高鳴る。この高鳴りの意味をミミは知ってしまった。だから変に緊張してしまう。

「ねえ志保を見て、ミミ」

ここ最近ココはずっと喧しい。

「あの目の動きにはなんの意味があるの？　あの指の形は？　どうして髪が他より輝いて見えるの？　ずっと見ていてね、ミミ。あたしが彼女の全てに名前を付けるからさ。ああ、志保。お願い、ミミだけじゃなくてあたしも見て！　あたしは確かにいるのよ！　ミミを押し開いてあたしを見つけて！」

志保を思って苦しくなるのは、何もココだけじゃない。ミミだってそう。志保を見つめてココが騒ぐと、いつもミミの胸が引き攣り始める。我慢ならないほどの痛み！　本当に凄まじいほどの苦しみ！　恋は苦いと言うけれど、こんな風にミミにまで苦味が行くなんて！　波打つ心臓がバンっと弾けて熱く燃え立つ血がミミから流れ出てしまいそう！

「そうなってくれたら！」
　そうココは言う。
「そうなってくれたらいいのに！　あんたの血が本当に炎だったら！　そうすれば志保はあたしに気づいてくれる！」
「バカ言わないで！　死んでしまう！」
「死んだっていい！　ほら苦しいでしょ、辛いでしょ！　あたしの苦しみはあんたの苦しみでもあるんだもの！　一緒よ、ミミ、あんたはあたしと一緒！　今に見てなさい、あんたも直に志保が欲しくなる！　あんたはあたしには勝てないもの！」
　そんなまさか、とミミは思う。
　あたしが女を欲しがるなんて。いいえ、志保を欲しがるなんて。
　だけれど最近ミミも不思議なことがある。志保といる時に感じる胸の高鳴り。その高鳴りが妙に心地いい。それに志保。なぜか最近志保の髪や胸や腰ばかりに目が行ってしまう。
　よくよく考えてごらん。ミミとココはいつも一緒じゃなかったかい？

　ミミはココには勝てない。それが本当になったのはある月曜のお昼休みの時だった。校舎裏にある非常階段に、ミミは志保と並んで腰かけてお弁当箱を膝に広げていた。
「心美、口開けて！　ほらあーん！」
　お弁当箱の蓋を閉めていると、志保が箸で挟んだ唐揚げをミミの口元に差し出してきた。ミミは最初「不衛生だな」と思った。でも断る前にココが喋った。
「ミミ！　ああ、志保がくれるものよ、ほら口開けて！」
　言われるままミミは口を開け、志保が差し出す肉を自分の中に入れた。「なぜ？」と思う暇もないほど素早くミミはそうしたの。
「おいしい？　今日私が作ったんだけど」
　志保がそう言って笑う。ミミも口いっぱい頬張りながら「おいひい」ともごもご言った。そしてそのまま歯で肉を噛もうとした時、ミミは妙なことを思ったの。
　もっと欲しい。
　正直言ってミミは母さん特製特盛オムライス弁当を完食したばかりでお腹がいっぱいだった。本当なら「はい、これで十分」と食事を切り上げるところだけど、どうしてだかミミは全く逆のことを思ったの。今口の中にあるものがもっと欲しい。どれだけお腹が苦しくてももっともっと。志保の手からあた

しの口へ。
「心美、めっちゃおいしそうに食べるよね。りんごもいる？」
ココよりもはっきりと思いすぎたせい。志保がピンクのタッパーからウサギの形をしたリンゴを出してミミの口へ押し込んだ。果実は甘美だった。ただ口に心地いいだけじゃない。激しい甘さが喉から腹に、腹から下肢に流れ落ちてミミの全てを燃え立たせる。
もっと欲しい！　もっと欲しい！
志保が笑ってミミの肩に手を置く。触れられたところが、なぜかじわりと熱を持つのを、ミミは感じた。もっと！　もっと！　繰り返すうちにやがてミミは全身で、ミミの全ての器官を使ってこう思った。
志保が欲しい！
「ね、ミミ。あたしには勝てないのよ」
ココが笑った。

女同士なんてバカげてる。なんのいいこともないし苦しいだけ。そんな風に相変わらずミミは思うけれど、やっぱりどうしてだか志保を見ると欲しいと思ってしまう。彼女の髪、彼女の肌、それに手を伸ばしたくなってしまう。髪や肌を絹に喩えることはできないけれど、ただ欲しいという欲望だけがはっきりとミミに現れる。
「ココのバカ。あんたがおかしいおかげであたしまで変になっちゃった。どうしてだか志保を見ると次から次へ欲が湧いてくる。本当なら男に向けるはずの欲が」
「やっぱりミミってあたしあってのミミなのね。人間はこういう風にできてるのね」
ココだけでなく、ミミもまた志保を求め始めた。段々夏が近づいてくるのに合わせてミミはココの思うままに燃え上がる。
「志保を見て、ミミ」
「見てるわ。ずっとずっと見てる」
昼過ぎの数学のクラスで、ミミは目の前の席に座る志保の後ろ姿をじっと見た。彼女の背を覆う長い髪はあの日だけは後頭部ですっきり纏められ、白い項が露わになってた。
「綺麗な首ね、ミミ。ずっと見てて」
「見てるわ。目が離せない」
「いつか海に行った時に拾った白い小石を覚えてる？　あの石を磨いて磨いて、そしたらあんな項になるのかな」
「回りくどい言い方は好きじゃない」
「触ってみたい？」
「触りたい」

「でもだめよ」
「どうして？」
ココは何も答えなかった。ココにも、なぜミミにだめよと言ったのか分からなかった。
どうしたんだろ、あたし急に。

不思議ね。ミミがようやく志保を求め始めたあの日から、ココは少し様子が変だった。あれほど欲しがった志保。触れたいと思った志保。それなのに、ミミが彼女を求めれば求めるほどココの中の欲求は萎んでいく。
まさか彼女に飽きたのかしら。
そう思ってみたりもしたけど、そうじゃない気がした。志保の顔を見ると相変わらず幸せだもの。彼女の笑顔。幸せそうに笑った顔。あの顔が堪らなく好き。彼女が笑うとあたしも自然に嬉しくなる。彼女の髪も肌も瞳も相変わらず綺麗。でもなぜ？　なんとしてでも手に入れたいとは不思議に思えない。
変なヤツだ、とミミは思う。
ココが志保を思ったからあたしは彼女を欲しがるのよ。それなのに、いざあたしが欲しがり始めたらココはじりじり後ずさりする。
「欲しい欲しい！　志保に触ってみたい！　あたしのものにしたい！」

「だめよ、だめよ、ミミ」
夜、布団の上でミミが我慢できずに叫び出すとココは静かに彼女を窘める。そんなココに激怒してミミは言い返す。
「ふざけないでココ！　あんたのせいであたしは女なんか欲しがって苦しんでるのよ！　それなのにあんたは何さ！　せっかくあたしも志保を思い始めたのにあんたは欲しがらないでさ！」
「あたしね、あたしね、ミミ」
ココがいつか志保への思いを初めて語った日と同じように、つっかえつっかえ話し始める。だけど口調は静かで強い。声の震えすらどこか気高い。
「あたしね、最近思うようになったの。あたし志保の笑った顔が好き。彼女が幸せそうだとあたしも嬉しい」
「志保の幸せがなんだってのさ」
ミミは舌を大きく鳴らす。
「あたしは彼女を手に入れたいのよ。彼女がどう思おうと知ったことか」
「ミミ。あたしとあんたはやっぱりここまでしか一緒になれないのね。その先はあたしだけのものなのね」
ココの声が不自然に小さい。ミミは驚いて布団から上半身を起こした。「ココ！」と呼びかけてみる。

「ココ！　ちゃんといる？」
「大丈夫よ」と小さな声がした。ミミにだけ聞こえるココの声。脆くて弱くて壊れやすくて、糸で吊り下げられてるみたいにゆらゆら揺れて。
「大丈夫よ、ミミ。まだここよ」
　ココの声は水中から聞こえてくるかのようにくぐもって聞こえた。ぼんやりとして不安を掻き立てる声。ミミは何気なしに冬の人魚姫を思い出した。幸せそうな、全く訳の分からない笑顔で海底へと泡になって消えていった人魚姫。
「あの絵本ね」
　ココが言った。

「最近、彼氏でもできたん？」
　昼休みのロッカールームで坂口華奈にこう言われたのは、夏休み明けの九月のことだった。坂口華奈というのは、初夏のころにテニス部の体験入部で知り合った子で、志保やミミのように物凄く容姿のいい子ではなかったけど気さくで話しやすくってココのお気に入りだった。もちろん、華奈に対する「好き」は友達向けのものだったけど！
「できるか、バーカ！」
「おっ、あんた美人のくせに非モテか！」

　ミミの乱暴な口調に華奈が身を屈めてくすくす笑った。その日、志保は委員会の仕事で理科室だったから、ロッカールームには華奈と二人だけだった。二人分の笑い声が、狭い部屋にやたら大きく響く。一頻りゲラゲラ笑った後、華奈はパチパチ爪を鳴らしながらこう言った。
「えー、でも好きな人ぐらいはいるっしょ？　なんかウチ分かっちゃうんよね。だって心美最近めっちゃ可愛いもん」
　華奈に対する返事はなかった。ミミはすぐに「いるよ」と答えようとしたんだけど、すかさずココが「だめよ、ミミ！」と叫んだから。
「まー、別にどっちでもいいんだけどさ」
　華奈はミミの沈黙をさっぱりと受け流していたずらっぽく笑い、ポケットからカラフルなグミの袋を取り出して一粒だけ口に入れた。そして眠そうな目を擦り擦り、片方の手でグミの袋をミミに渡した。
「あ、でも彼氏と言ったらさあ」
　五粒ほど一気に頬張るミミに、華奈は欠伸交じりに話しかける。ミミはハムスターのようにもぐもぐと口を動かしながら華奈の次の言葉を待った。どうせ華奈の好きな声優の熱愛スキャンダルのことだろうな。華奈はゴクリと喉を鳴らし舌をチッチッと二度鳴らしてからこう言った。

「志保のことなんだけどね」

「ココ？」

ミミの呼びかけにココは何も答えなかった。ただじっと黙って動かない。ミミの中に閉じこもってただじっと。

「ココ」

ミミはもう一度ココに呼びかけた。もちろん返事なんて期待してない。それでもミミはココを呼んだ。何度も何度も。

「ほら、あのこれあくまで予想だよ？」

今日の昼間華奈はこう言った。

「二組に野神君っているじゃん？　イケメンの。その野神君と同じクラスでウチと仲いい子がいてその子が言ってたんだけど、なんかね、野神君と志保幼馴染同士なんだって。スマホの待ち受けが志保とのツーショになってて、友達が不思議に思って聞いたらそう答えたらしいの。夏休みも二人で遊んだりしてたらしくて、でね、それ聞いてウチなんかこう思ったんだよね」

そう言って華奈は少し声を潜めた。

「志保ってさ、野神君のこと好きなんじゃないかな。いや、まだ分かんないけどさ、志保が野神君と喋ってるとことか見てたらなんとなくそうなんじゃないかなーって。野神君の方はちょっと分かんないけど志保の方は結構当たってると思うんよね。心美はどう思う？　……え、気づかなかった？　あー、マジか、ちょっと意外。だって志保のことって心美が最初に気づくと思ったもん」

「そうね、気づくよね普通」

ココがようやく話した。

「気づくよね。だって二人が話してるとこ何回も見たもん。ねえ、ミミそうだよね。今思い返せばあの時の志保ったら大きな目をうるうるさせてほっぺもピンクでさ。あの表情、あたしが一番よく知ってるもの」

「ココ！」

ミミが叫んだ。胸が苦しい。春と夏の前に味わったちょっぴり甘い苦しみとは全然違う。悪態つくことも揶揄うこともできずただ泣くしかない、そんな苦しさ。

「ココ！　じゃあ志保はやっぱりあの男のことが好きなの⁉　あたしのことを欲しがってくれないの⁉

もう志保はあたしの、ううん、あんたのものにはならないの⁉」
　何度か見かけたことがある、志保と野神君の立ち姿。今日までは気にもとめなかったあの時の志保の顔。それに応える男の顔。嫌な顔！　胸がムカムカする！　ミミはギリギリと歯を食いしばる。
　それなのにココはミミの声に答えたりはしなかった。ただ泣きもせず怒りもせず言いもせず、にっこり笑ったままで。
「ねえ、ココ！　志保が男と愛し合ったらあんたは見つけてもらえなくなるんだよ⁉　あんたはずっとあたしの中に閉じこもったまま、そのまま死ぬんだよ⁉」
　ミミの血を吐くような叫びに相変わらずココは笑ったままだった。ただ温度も形もない手でミミに触れて彼女の名前を呼んだ。
「ミミ。あの時の志保を思い出して。野神君を見つめるあの眼差し。苦味も苦しみもあるけれどその暗ささえキラキラ光ってて。そう、彼女は幸せそうだった。それがね、あたしには嬉しいの」
　ミミが肩を震わせた。人魚姫。そう人魚姫だ。自分の代わりにあのクソ王子を生かすようなイカレポンチ女。
　気づけばミミの手はココの頬を思いっきり殴りつけていた。ココが痛そうに顔を歪める。そしてミミも呻き声を上げた。ココの痛み。じくじくとしてべったりと張り付くような痛みが、ミミの頬に立ち昇る。
「嫌だ……嫌だ……」
　食いしばった歯の奥から声を出す。涙がボロボロとミミの痛む頬に流れ落ちた。
「嫌だあ、嫌だよ、嫌だあああ」
　ミミは泣き続けた。あれだけ欲しがっていたものがプツリと切れて、それなのにまだ欲しくて、駄々っ子のように泣いた。悲しみよりも行き場のない激しい欲望だけがミミを泣かせた。そんなミミをココは静かに笑って見つめ続けた。でも笑顔だけがココの全てじゃなかった。

　ココが喋らなくなった。そう華奈とのあの日から。志保と話しても彼女と触れ合っても、ココは静かだった。志保の髪を星月夜に喩えることも項を小石に喩えることもなくなった。
　だけどミミは違った。
「あたしのものよ」
　志保の声が耳に触れる度指が体に触れる度、ミミは激しくなる。

「あんたがどう思おうとあたしはまだ欲しがってる。だからあんたをあたしのものにしてやる。どんな手を使ってもココをあんたに教えてやる」

九月も暮れていっていよいよ文化祭が近づいた。秋風が窓のガラスを擦る放課後に、ミミとココは志保と二人っきりだった。教室を飾り付ける折り紙を鋏で切り取る作業を実行委員に任されたの。寂しい秋の教室に、しばらく二言三言だけの会話で二人は過ごした。窓の外で唸る風、鋏の軽やかな金属音、それから志保の震える息の音。それだけが二人の間を埋めていた。

「心美」

志保の手が出すシャキシャキという音が止まって、ミミが顔を上げると志保は下を向いて固まっていた。長くて濃い睫毛が変なくらい際立ってさ。

「ねえ、心美」

志保が顔を上げた。本当に腹の立つくらい大きくて潤んだ瞳。

「心美はさ、友達としてずっと接してきた人のこと好きになったことある？　気持ちを打ち明けたら何もかも壊してしまうかもしれないって苦しんだことある？」

口の中の水分が一気に弾け飛んだ。鋏を持つ手がブルブル震えて肌がざあっと粟立つ。ミミが無意識に震え始めるに連れココ自身も揺らぎ始めた。

ああ、きっと野神君のことを話すんだわ。彼のことが好きなの、ねえどうしたらいい？　こう話すんだ。

「ココ」

ミミはココにそっと話しかけた。

「あたし達も打ち明けよう。あんな男のことは忘れてあたしを見てって言うの。チャンスは今よ」

「野神優斗のこと知ってるでしょ？　噂の通りなの。心美。あのね、私ね、もう分かるよね。怖いんだ私。今すっごい怖い。でもね、やらなきゃいけないってことは分かってるの。勇気を出さなきゃ。でもできないの。いつも気持ちが挫けてしまって」

志保の手が鋏から離れミミの手に伸びた。あの時と変わらない手だ、とココは思った。いまだに変わっていない気がする。まだミミの肌に新しいんだもの。

「ねえ、心美。私さ、あんたに頑張れって言われたら前に進める気がする！　あんたが応援してくれたら勇気が出る気がする！　だって心美は私の親友だもん！」

ミミの震えはもう彼女という地を揺るがす地震だ

った。揺れて揺れて震えて震えて。揺らめく喉から出た声が言う。「あたしは……あたしはね……」ミミがゆらりと立ち上がる。この震えがどこから来るものなのか、そんな風に思う暇もないほど荒く息をして腕が勢いよく志保へと伸びる。

　あたしのよ！　応援なんてしない！　だって欲しいんだもの！

　手は志保の制服の胸へと向かう。指が曲がる。曲がって心臓を力いっぱい掴もうとする。

「心美」

　志保の声がした。安心しきって緩んだ声。なぜ？　なぜこんな嬉しそうな声を出すの？　ミミは信じられない思いで下を向く。志保の胸に向かって伸ばされたはずの自分の手。その手が、志保の手の甲に優しく重なっている。

「志保」

　ミミの口が動く。

「あたしね、応援するよ」

　違う！　あたしじゃない！

　ミミは絶句して口に手をやった。

　あたしじゃない！　あたしはこんなこと言おうとしてない！　なら一体誰が⁉　誰があたしの口を使って喋ってるの⁉

「ねえ、志保。一か八かやってみようよ！　野神君に告白しよう！」

　ミミの口がまた勝手に動く。

　何⁉　一体なんなの⁉

　混乱のあまり頭がぼうっとなる。口だけが勝手に動き続ける。嫌なことを立て続けに喋る。全くもって訳の分からないことばかり。まるでココみたいに！

　ココ？　待って、まさか！

　ココなの⁉

「心美、本当なの？　本当に私を応援してくれるの？」

「あったり前じゃん！　だってあんた、あたしの親友だもん！　親友が困ってたら背中押すのは当然っしょ！」

　ココが喋ってる！　あたしの口で！　ココの声！　ココの気持ち！　初めてだわ、ココが志保に向き合うのは！

「やめて、ココ！」

　ミミが力いっぱい叫んだ。でも声にはならない。今声を使ってるのはココだもの。ミミはただココの後ろで藻掻くだけだった。

「ココ！　やめて、もう喋らないで！」

「ね、志保、頑張ろうよ。あんたならきっと上手くいくって」

「喋るなって言ってんでしょ！　黙って！」
「あたし、野神君もあんたのこと好きなんじゃないかなって思うな。見てれば分かるよ。だってあんたといる時野神君すごい嬉しそうなんだもん」
「黙れ！　黙れよ！」
「絶対脈ありだよ、あれ。ね、だからきっと上手くいく。ほら笑って！　そうその調子！　その顔で野神君にアタック！」
「もうやめて！　もう嘘はやめて、ココ！」
「志保。あたしね、志保の笑った顔が一番好きだなぁ」
　涙が出るんじゃ、とミミは思った。でも出てこない。泣かない。代わりにミミは笑っていた。いいえ違う、ココが笑っていた。泡になる直前、水面越しの光に煌めいていたあの人魚姫の顔で。
「ありがと、心美」
　志保が椅子を引いて立ち上がった。頬は赤く上気して瞳は明るい。唇の形は本当に心楽し気。
「優斗、確かまだ残ってるから私今行ってくるよ！　行ってちゃんと話す！　心美、私頑張る！」
　黒い髪が空気の中に広がった。ああ綺麗だとココは思う。床を蹴る足音が小さくなっていく。志保のあの背中。何度掌に感じたか知れないあの背中。どんどん遠くへ行ってしまう。
「い、行かないで……」
　ミミがようやく声を取り戻した時、もう志保はいなかった。志保はいなかった。
「なんなのよ」
　ようやくミミは泣くことができた。熱い涙。怒りに熱されて煮え立つ涙。なのにココは笑っている。本当に幸福そうに。
「ココ！　あんたはよくも！」
　ミミはココに怒鳴った。
「どうして志保を行かせたりしたの！　どうして！　あんなこと言ったらもう二度と志保は手に入らないのよ！　あんたは自分で始めた恋を自分の手で滅茶苦茶にしたんだ！」
「滅茶苦茶になんてなってないわ、ミミ。あたし今とっても幸せよ」
「嘘をつけ！」
　ミミは涙で濡れた頬を両手で力いっぱい掴んだ。
「幸せだって言うんならこの涙は何⁉　なんであたしは泣いてるの⁉　胸が痛くて堪らないの⁉　まだ彼女を欲しがってるの⁉　ココ！　これがあんたの本当よ！　あんたはまだ彼女を欲しがってるんだ！　だからあたしも欲しがるんだ！　これが答えなのよ！　ココ！　あたしは嘘をつかないわ！　御大層な言葉で飾り立てたりもしない！　いつだってあり

のまま！　ありのままの海野心美よ！　でもあんたは違う！　嘘をつく！　誤魔化す！　回り道する！　自分を傷つける！　バカよ、大バカよ、救いようがない！」

「ミミ……」

ココが笑ってる。今まで一度しか知らない笑い方。

「嘘ついて誤魔化して回り道して自分を傷つけるのはね、人間だからよ。人間だからなの」

「……」

「人間は……あたしはね、欲しがってばかりじゃ生きられない。だから志保も欲しくない。それより大事なことがあるもの。自分を犠牲にしても幸せと思えることがね。だって人間だもの。全く得にならないことも進んでしてしまうのも人間だからだもの」

「バカだわ」

「そうね、バカね。でもあんたの言うバカって大事なこと。そんなバカを積み上げて人は偉大になるのよ。ああ、だから神様は人の姿をしているのね」

隣のクラスから華やかな歓声が上がった。「おめでとー！」だの「やったじゃん！」だの。そんな声が聞こえてくる。

「ミミ」

ココの声。水の底へ沈み込んでいくような静かな声。泡の弾ける音が聞こえる気がする。

「あたし、今とっても幸せよ」

人間は何でできてると思う？　海野心美の場合、それは二人の女の子。

一人は体（ミミ）。もう一人は心（ココ）。

体（ミミ）の役目は生きること。欲しがり食べ飲み必要な時に泣き、とにかく命を繋ぎ、守ること。そのために彼女は合理性や損得や本能を重視して不味いものは口にしない。だけど彼女はちょっぴり弱い。心（ココ）の思う事に引っ張られ、とんでもないものが欲しくなったり胸や頭が痛くなる。なんでも心（ココ）に影響されて、彼女に反発することもある。

心（ココ）の役目はよく生きること。そのために女にも恋するし幸せを深く考える。思いやり誤魔化し愛することもある。自分を殺すこともする。そして死や犠牲にも意味を見出す。彼女には得のない行動すら素晴らしい。そして正直な体（ミミ）に嘘をつく。

心（ココ）の苦しみは体（ミミ）の苦しみ。心（ココ）の欲は体（ミミ）の欲。ほらね、ミミとココはいつだって一緒だったでしょ？

だけどね、一つだけ一緒じゃないのがある。心（ココ）の

死は体の死とは違うの。体よりもひっそりあっさり心は死ぬ。

しばらくは、ミミとココは一緒だった。でも最近ココは口数が少ない。喋る時はいつも志保の前でだけ。例えば志保が優斗と手を繋いで歩いてる時。

「ああ、あたし今とっても幸せよ」

この一言を言う。水の上を漂う泡のように揺れる小さな声で。

でもそんなココも、文化祭が終わるころにはすっかり何も話さなくなった。前ではあの一言以外にも「葉っぱが綺麗に赤くなったね」だとか「中間テストやだねぇ」だとか言ってたのに。最近では全く聞かない。あの一言さえ最近では喋らない。

「ココ、いる？」

ある日ミミはココに話しかけた。

「ココ？　ココ？」

声は返ってこない。見るもの聞くもの全てに名前を付けてはしゃいでいたココの声はもう返ってこない。

ああ、とミミは一人きりで頷く。

死んじゃったんだな。

ココのいなくなった後も月日は流れる。ココがなくてもミミさえあれば、海野心美はまあ生きることはできるもの。だけど不思議ね。ココがなくなって、ミミはまるでロボットだった。バカなことを言うココに言い返すこともできなくなったし『人魚姫』をクソだと思うこともなくなった。そして志保。彼女のことも別に欲しいとも思わない。あれほどミミが泣き苦しみ欲しがったのは、きっとココもどこかで欲望を持っていたからね。

志保はココが死んだ一週間後に優斗と別れた。ココの犠牲で成り立った恋は、優斗の二股発覚で呆気なく崩れ去った。志保はしばらく学校中の笑い者になった。独り身になった志保をミミは相変わらず欲しがったりはしなかった。星月夜の髪も小石の項も、今やただの毛と皮で、あれほど欲望が湧きたった顔も別に美しいとも思えなかった。なぜ過去の自分はこれほど月並みな女をあんなに欲しがったのか、もう思い出すこともなかった。志保の方も、優斗と別れてからは心美に興味をすっかりなくし、学年が上がりクラスが分かれてからは二人は一度も言葉を交わさなかった。

「ねえ、何かあったの？　あんた最近つまらないよ」
高校二年のある日、華奈がこう言った。
「何言われても空返事ばっかでさ。そんなんじゃこれから先ずっと友達、ウチだけになるよ？　あんたおかしいよ最近。前はもっと楽しそうだったのに一体どうしたの？」
華奈が言うように、心美はずっと華奈以外の友達がいなかった。それでもミミは具合を悪くしたり悲しんだりすることはない。友達なんかなくたって生きてはいけるんだもの。
ロボットみたいだ、と周りの人はひそひそと言う。ただだんまりで必要なことしかしなくて、心がないのかしら？
確かにその通りだった。

三度目の春、高校を卒業した。志保は心美に目もくれず新しい彼氏と写真を撮っていた。ちゃらちゃらした見た目に反して義理堅い華奈だけが心美のそばに寄り添っていた。彼女だけはずっと心美の友達でいてくれたけど、特別ミミは有難いとも思わなかった。

やがて大学生活がスタートした。花盛りの四月のこと。入学式が東京の騒がしい一角で行われ心美はそこに向かった。花の盛りでも彼女は、ミミは無表情。降り注ぐ花びらを雪に喩えるあの子はもういない。
入学式の会場へと黙々と歩くミミ。黒いパンプスが足にキツイけれどわざわざそう思ってみたりはしない。大げさに「そうだよねぇ」と言うあの子は三年前に死んだ。
黒スーツではしゃぎ手を伸ばしてスマホをかざす新入生の波を抜けて歩く。すると、突然肩に固いものが当たった。ほんの少しの痛み。その後で「あ、ごめん！」という声がミミに届いた。
「ごめん、ごめん！　ぶつかっちゃった、ケガない⁉」
顔を横に向けると、染めたての茶髪に明るいオレンジのメイクをした同い年くらいの女の子が立っていた。幼い顔立ち。その顔のパーツ全部を使って彼女は何も喋らないミミに盛んに話しかける。
「マジでごめんね！　でも今日人多いからさ。あ、私、浜田真実。よろしくねー！　ね、学部一緒？　一緒だといいなぁ。あ、そだ！　席隣座らん？」
ミミは喋りかけられて嬉しいとも思わない。ただなんとなく、喧しい子だなぁ、まるでココみたい、

と思った。思って驚いた。
ココ？
そっと自分の胸に触れる。どこも痛くない。なのになぜ？　なぜ体が熱く感じるんだろう？
「あ！　名札見せて！　心美ちゃん？　じゃあココちゃんね！　よろしく、ココちゃん！」
真実の手がミミの手に触れた。滑らかだ。すべすべとして新しい。
あ、あたしこれ知ってる。
ミミがポツリと呟いた。
ああ、なんだろう、この懐かしさ、この熱さ。いいえ、どうしてあたしはこんなこと思うんだろう。
その時、声が奥底でした。誰にも聞こえないはずの、懐かしい声。脆くて弱くて壊れやすくて、それでも偉大だった人間の声。
「ねえ、ミミ。彼女の髪を麦の穂に喩えてみない？」

心とは、泡のように知らぬうちにふっと消えてしまうもの。それでも人生がこれほど未知と人に溢れているならば、少しだけ揺らした水の中から、もう一度湧き上がってくるもの。

「ビロード包みの駆け足の春」

市川　拓真

■受賞のコメント■

私の小説を佳作に選んでいただき、大変光栄に思います。このような機会を設けていただいた明治大学連合父母会、（株）阿久悠、審査員の先生方、および文学部関係者の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

昨年の夏に就職活動を終えてから、時間に余裕が生まれたため、なにか創作をしてこの賞に応募しようと思い立ちました。歌詞と小説の募集がありましたが、歌詞よりも小説のほうが倍率が低そうで、受賞する確率が高いと踏んだため、小説を書くことに決めました。しかし私にはなにをどのように書けばよいのか見当もつかず、そもそも小説とはなんなのかということすらわかりませんでした。そこで世の中で小説と言われているものを読んでプロットや文体を盗みながら文章を書き進め、締め切り直前になってなんとか形にすることができました。ところが最後の最後に文字数が多すぎるという問題が発生したため、泣く泣く分量を大幅に削って応募しました。

これからはより一層精進し、読んでくださる方の心に響く美しい作品を書けるようになりたいです。この度は本当にありがとうございました。

ビロード包みの駆け足の春

一

一・一

俺は春が好きだな！　それというのも、なんだか心が軽くなったような気がするからだ。というよりも、俺の体そのものが軽くなっているようなのだ。通りを歩いていても体がふわふわと舞いあがってしまうので、電信柱や街路樹を掴みながら、なんとも妙なあんばいで移動しなければならないのだ。まるであの一九六九年に月に降り立った、ニール・アームストロング船長みたいなおぼつかない足どりで！

俺は通行人の目も気にせずに軽々と進んで行く。部屋を出てしばらくは常識的な歩き方をしようと努めていたけれど、さっき橋を渡り終えた辺りから、いよいよ二足歩行をするのが億劫になってしまった。そんなこんなで、いまではこうしてコートに身を包み、ぽかんと空を眺めながら、背中を下にして、ゆらゆらと通りを漂っているというわけなのだ。ところで体が軽いっていうのは、実にすがすがしいものだよ。例えば右足と同時に前に出すのは右腕なのか、それとも左腕なのかっていうたぐいの難しいことを、ちっとも考えなくて済むからね！　それにほら、見てごらん！　水色と桃色の渦巻き模様が空を埋め尽くしているじゃないか！　繋がったり離れたりする無数の渦を見ていると、くらくらとめまいが起こりそうになる。ついには俺の両眼もかざぐるまになって、くるくると回りはじめる始末なのだ。

駅前広場まで漂ってきたところで、体をひねって方向を変えた。広場を行き交う人々が立ちどまって俺を見あげている。目抜き通りを渡りかけた俺は、慌てて道路標識のポールを掴み、体の動きを止めた。右折してきたスクールバスに、危うくぶつかりかけたのだ。バスの後部座席から子供たちが手を振っている。俺は平泳ぎの要領で交差点の上を通り過ぎると、顔なじみのハトと近ごろ大流行中の鳥インフルエンザについて意見を交わしながら、いくつかの建物の屋上をやり過ごした。大学の校舎はもうすぐだ。

俺は体を垂直に起こし、ホテルの屋根を滑りおりて、校舎の前の舗道に転がった。

大学の主要な校舎は地上二三〇階にもおよぶリベルテタワーという名前の超高層ビルディングで、この街のランドマークになっている。タワーの屋上には右手でトリコロールカラーのパラソルを差し、左手にナオミ・ウエムラの肖像を抱えた、素っ裸の自由の女神像が立っているのだと云われている。しかしタワーの上層部はいつでもたなびく白雲に覆い隠されているので、未だにそれを見た者はいないそう

だ。入学式の日には、新入生の群れが女神像にお目にかかろうとこぞって天を仰いでいる。ところが受験勉強でうつむいてばかりいたところで突然に頭をのけ反らせるものだから、首の骨を折って病院に担ぎこまれる学生が毎年山のように発生し、大学当局の頭を悩ませていた。

俺はタワーの陰にひっそりと建つ、三階建ての旧校舎の地下へ下りていった。黴臭い廊下の先にある、研究室のドアをノックする。反応がないので、そっとドアを開けると、教授は部屋の奥でパンツをぶるんぶるんと振り回していらっしゃった。執筆中の『世界アンダーウェア大全』の第十二章で使用する、下着の遠心力のデータを集めているのだ。

俺は教授から借りていた『伊達眼鏡党宣言』を返却した。

「ありがとうございました。人類はみな眼鏡を掛けるべきだという著者の主張に共感しました」

「そうかね。それはよかった」

教授はそう云うと俺から受けとった『伊達眼鏡党宣言』をごみ箱に放りこんだ。

「ところでチェリー君、卒業論文の題材は決まったのかね？」

「はい。月にウサギはいるのか、いないのか、という問題について論じようと思います」

「なんと！　君はまだそのような二十世紀的問題にこだわっているのか！　その問いについてはすでに答えが出ているぞ！」

教授はミズクラゲの笠の骨やピルトダウン人の頭蓋骨などの資料が並ぶ棚から、『月刊ラビット二〇二一年二月号』という雑誌を取り出して見せてくれた。その紙面にはオリンピック男子ウサギ跳び代表のインタビュー記事や、ウサギ騎士団のシドニー侵攻の取材記事に混じって、「月のウサギ、ついに発見！」というタイトルの、いかがわしい記事が載っていた。

これはなにかの冗談でしょうかと訊くと、教授は記事を読むように急きたてた。

「月のウサギ、ついに発見！」

三名の宇宙飛行士を乗せた中国の月面探査船「輝夜1号」（船長兎尾氏）は二月十日午後一時四十分三十秒に月面のフォン・カルマン・クレーターへの着陸に成功した。着陸後、兎尾飛行士が船を離脱し、同四十二分二十秒、人類で初めて月の裏側に降り立った。その直後、兎飛行士はクレーターを駆け回るウサギを発見した。

兎尾、貉耳両飛行士は午後二時三十分頃にウサギが飛びこんだ直径約一メートルの穴に潜入し、クレーター内部にて多数のウサギの生息と餅工場

の存在を確認した。同五十分頃、両飛行士とウサギとの間に戦闘が発生。飛行士側がウサギを射殺し、事態は沈静化した。殺害されたウサギの総数は不明。兎飛行士は二十日に行われたアジア宇宙平和会議で、「ウサギたちが杵を振りかざして襲いかかってきたため、身の安全の為に応戦した。正当防衛であり、殺すつもりはなかった」と述べた。戦闘時にカメラが破損したため、写真による記録は残されていない。

アメリカ航空宇宙局副長官のラクーン・ラビエンコ氏は『月刊ラビット』の電話取材に対し、「中国側の発表には不可解な点が多く、宇宙飛行士による月ウサギの大量虐殺が行われた可能性がある。今後三年以内に我々は月の裏側を制圧し、月ウサギのための居留地を設ける」と答えた。

月ウサギの死体は輝夜1号により回収され、十八日未明に地球へ到着。中国宇宙先端大学の研究チームによる科学的分析の後、剥製にされた。四月より中国国家博物館にて一般公開される予定。期間は八月下旬まで。閲覧料は三〇〇元[1]

「ウサギの餅工場ってなんだか楽しそうですね。お腹が空いてきちゃったな」

俺はそう云って雑誌を閉じ、表紙のバニーガールのグラビヤ写真を眺めた。

教授は地団太を踏みながら叫んだ。

「楽しいだなんてとんでもない！　ウサギどもの間に非人道的な階級制度があって、強制労働が行われていたそうではないか！　これは労働問題だ！　人権問題だ！　いや、動物虐待かな」

「夢のない世の中になりましたね」

俺は卒論のアイデアが振りだしに戻ってしまい落胆した。教授は部屋の奥に戻って下着の遠心力の調査を再開した。今度は左右の手にそれぞれキャミソールとペチコートを握りしめ、頭の上で豪快に振り回している。

一・二
一・二・一

さんさんと降り注ぐ日射しは春の陽気に色めいていたが、空にはまだしかめ面をした冬が居座っていて、街路という街路にびゅうびゅうと冷たい風を吹きかけていた。石畳の上を新聞紙や手紙の切れ端がひゅるひゅると流れていく。そんな道を人々は帽子を手で押さえコートの裾をなびかせながらせかせかと行き来している。

大学の裏手のだらだら坂を、大蛇のように分厚い

ストールに顔を埋めた婦人が、これまた厚手のマフラーをぐるぐる巻きにした小犬を十数匹も連れて歩いている。俺は小犬たちの上をひょいひょいと飛び越して、街で一番の大通りへ踊り出た。

横断歩道の前に白いファサードの本屋があった。俺は店先に置かれた木箱の中から古い雑誌を拾い、パラパラとページをめくった。

30センチ切ってショートヘアに。

私、髪を切っちゃったんです。朝、家を出る時は、切ろうなんてこれっぽっちも思ってなかったんだけど……。

最初は「パーマあてよう」と思いついて美容院へ向かったんですが、街を歩いていて目につくのは、ワンレングスのお姉様たち。

いつだったかの『アンアン』にも書いてありました。20代女性の90パーセントはロングだって。私は流行に左右されてのばしてるわけじゃないけど、そういうふうに見られちゃうんだろうなぁ。そんなことを考えていると、いらいらムカムカしてきたのです。

それで美容院で、肩より長かった自慢のサラサラヘアを30センチ以上も切ってショートにしました。

次の日学校に行ったら、友人たちの反応はすごかったですよ。男の子達も「おはよう！」ってあいさつするたびに目をまんまるにしてました。ふしぎにみんなにあいさつしたくなるんですね。

やっと、春がきたってかんじかな。

（大阪府／まる）2

ふと目を転ずると、通りの先の都市銀行の角を、ベージュのコートを羽織ったショートカットの少女が歩いているのが見えた。俺の目はその娘にくぎづけになった。突然、彼女が激しい勢いで足を滑らせたからだ。空中で足を頭よりも高く蹴りあげる格好になり、コートがはらりと翻り、ストンと地面に尻餅をついた。少女は何事もなかったかのようにすくと立ちあがると、コートについた汚れを払い、帽子を拾って被り直した。それからこちらに向かって歩いて来るようだった。俺はとても懐かしい気持ちになって、早くこっちに来ないかな、と思った。娘は蕾の膨らみはじめた桜並木の下をたいくつそうにすたすたとやって来た。俺は本屋の軒先で雑誌を読むふりをしながら、娘が近づくのを待ち、ようやく側に来た時に声を掛けた。

「モンブラン、おはよう！」

「あ、チェリー、久しぶり！」

モンブランは丸眼鏡を掛け、てっぺんに四角い板のついたいわゆる博士帽子を被っている。彼女はその帽子をちょっぴり持ちあげて挨拶をした。それからコートのポケットに手を入れてニヤニヤと笑っていた。

「……どうしたの？」

「実はね、さっきなにもないところで転んじゃって、恥ずかしかった……」

「怪我しなくてよかったね。見られなかったのが残念だ！」

モンブランは頬に手を当てて首を傾げていた。

二人の間を自転車が颯爽と駆けぬけた。俺はとっさに背後の桜の木にしがみついた。

「このごろは元気にしてた？」と彼女は取り澄ました声で云った。

「もちろん、いい気分だよ」

俺は桜の幹をよじ登り、宙返りをしながら飛び降りてみせた。

「わあ、危ないなあ！」

「モンブランも元気そうだね。最近は山に登ってるの？」

彼女はかぶりを振った。

「ぜんぜん。大学から活動が禁止されちゃってたから……」

「それは残念だったね……。でもこれからは許可が下りるはずだよ！」

「そうだといいんだけど」

俺はモンブランの所属する体育会登山部について根掘り葉掘り質問をした。俺もかつてはこの部活動の一員として活動していたのだが、校舎の壁をよじ登った罪をとがめられ、組織を追放されてしまったのだ。

一．二．二

あれはたしか昨年の、秋晴れの平日の真昼だった。

そのころの登山部のトレーニングは皇居の外周でランニングをすることだった。俺たちは来る日も来る日も朝から晩まで走っていた。

それは酷暑の夏には非常に厳しい活動となった。何人もの部員が走りながら溶けてバターになり、大学の生協に出荷された。そんな夏も終わり、快適な秋がやってきたが、我々はすっかりランニングに飽き飽きしていた。どんなに懸命に皇居の周りを走っても、天皇陛下にお近づきになれるわけでもないからだ。

そこでクライミングの自主練習という名目で、リベルテタワーの外壁をよじ登ることを思い立った。俺はヘルメットを被り背中にパラソルを縛りつけ、

陽光にきらめくタワーの登攀を開始した。煉瓦と瀝青で固められたタワーの壁面には不揃いな出っ張りがあり、その凹凸を足がかりにすれば、よじ登るのは簡単だった。それでも階数が二百三十もあるものだから、どこまで登ることができるのかは未知数だ。十二階まで上がったところで首をひねって下を見ると、タワーの前の舗道に数人の見物人が現れていた。こうなったら中途半端なところで諦めるわけにはいかないだろう。俺は張りつめた高揚感を覚えながらさくさくと壁を登り続けた。風のない穏やかな日で、空は抜けるように青かったが、タワーの上部は綿菓子のような雲に覆われていた。

いよいよ食堂のある百七十階まで辿りつき、窓枠に体を預けて一息ついた。もうこの辺りは雲の中で、赤褐色のタワーの壁の他にはなにも見えない。俺は息苦しいほどの湿気の中で疲労を感じながら、学生たちが食堂を動き回る様を観察した。事件が起こったのはその時だった。柱の裏から現れた一人の学生が、ガラスにへばりつく俺と対峙したのだ。彼女は持っていたお盆を床に落とし、ムンクの『叫び』のように頬に両手を当てて俺を見た。瞬く間に他の学生たちも集結し、こちらを指さしたり口をぱくぱく動かしたりしはじめた。俺はガラス越しに右往左往する彼らを眺めていたが、ふと自分が動物園に飼われる珍獣にでもなったような気がして、思わず大笑いしてしまった。そうして気の緩んだ隙に手足を滑らせた。

俺はタワーの壁面を垂直に落ちていった。すぐに雲の下へ出て眩しくなった。俺は背中からパラソルを引きぬいた。パラソルが顔に当たって眼鏡が吹きとんだ。頭を下にした体勢で落ちていたから、腹筋に力を入れて体をねじり、パラソルを開いた。とたんに腕を支点にして体の向きが反転し、パラソルが風をはらみ、落下速度が遅くなった。

舗道には野次馬が集って俺を見あげている。地面に近づくと、彼らは俺の着地地点を中心にしてドーナツ状に並んだ。俺は片手でパラソルにぶら下がったまま、彼らの真ん中に舞いおりた。

野次馬というくらいなので、彼らの大半は馬だった。馬たちは互いに頭を突きあわせて尻尾を振っている。馬たちの間から一人の男が前に進み出て、眼鏡を手渡してくれた。俺は礼を云って受けとった。レンズが粉々に割れ、フレームはねじ曲がっている。

「お気の毒です」とその警備員は云った。

「ご心配には及びません」と俺は答えた。

「伊達眼鏡なので」

俺はその日のうちに主将から呼び出された。

一・二・三

裁判の開かれる大教室には総勢五百人の部員が一堂に会していた。ほとんどの部員は教室の後方の傍聴席にぎゅうぎゅう詰めになっている。

裁判官と書記官と原告人を兼ねる主将が厳かな声で云った。

「それではこれより、被告人に対するリベルテタワーよじ登り事件の審理を始めます」

主将の座る席を挟んで二つの長机が「ハ」の字に向き合って置かれている。一方の机は被告人の俺と弁護人のモンブランの席になっている。もう一方の机は証人席で、俺をよく知る十二人の部員が横一列に並んでいる。教室の配置は裁判というよりも討論会の様相を呈していた。

主将は立ちあがり、起訴状を朗読した。

「起訴事実。被告人は本日正午ごろ、大学当局及び登山部執行部の許可を得ずにリベルテタワーの外壁を百七十階までよじ登ったものである」

傍聴席が少しざわついた。主将は俺に対し、起訴事実に異論がないかどうか訊ねた。

「どこに登ろうが私の自由です。こんな茶番はやめてください」と俺は云った。

すると傍聴席の部員たちが怒涛のごとく騒ぎはじめ、彼らの声が大波となって押し寄せてきた。

「この馬鹿野郎！」

「総括しろっ！」

「おっぱい！」

「コアラの尻尾！」

俺もモンブランも証人席の連中も、とっさに床に身を伏せてやり過ごした。ところが主将はまともに声の波をくらって椅子から転げ落ち、ぶちまけられたペンキのように壁にこびりついてしまった。

傍聴席の騒ぎが凪のように静まった。その場で新しい主将が任命され、裁判官と書記官と原告人の役割が引き継がれた。

新しい主将は古い主将を壁から引っぺがして壁と床の隙間にぐいぐい押しこむと、着席して口を開いた。

「起訴内容について、弁護人のご意見はいかがですか？」

モンブランが立ちあがった。

「今回の件は被告人の若気の至りだと思います。どうか許してあげてください」

彼女がそう云うと、証人席の一年部員がきょろきょろと周りを見回しながら云った。

「二十一歳って、若くはないですよね？」

この発言を受け、証人席には賛否の入り乱れるど

よめきが起こった。主将が皆の話し声を制して述べた。
「被告人はヘルメットやパラソルを準備し、高所恐怖症を克服したうえで壁をよじ登りました。このような計画的犯行を、若気の至りという言葉でごまかすことはできません」
今度は証人席の真ん中にいる部員が発言した。
「被告は複数名の後輩にも壁をよじ登るように勧めていたとのことです」
俺は主将にその真偽を訊ねられたが、そっぽを向いて黙っていた。
モンブランが俺に代わって答えた。
「被告人はマンネリ化したトレーニングに新しいメニューを加えるという意図でタワーをよじ登ったのではないでしょうか。トレーニングとして捉えていたからこそ、後輩にも勧めたのでしょう」
彼女は俺を見おろして問いかけた。
「そうだよね、チェリー？」
俺がなおも押し黙っていると、証人席の部員たちはモンブランに冷たく云い放った。
「仮にそうであるとすれば、トレーニング係であるあなたが魅力的なメニューを考案してこなかったことも問題なのではないでしょうか？」
「もしくは、……あなたが被告人にタワーをよじ登ることをそそのかしたのではありませんか？」
モンブランはどこ吹く風と受け流す態度を見せていたが、やがてうつむいて泣きだしてしまった。彼女はとても感じやすい性質なのだ。俺の内心に初めて恥じらいの感情が芽生えたが、これといって云うことが浮かばなかった。
証人席の連中はモンブランをやりこめると、再び俺に的を絞った。
「被告人は二〇一八年秋の北アルプス縦走にて、下界に全員分の食料を忘れて、班員を飢餓状態に陥れました」
「二〇一九年夏の北海道合宿では、ヒグマの前でブレイクダンスを踊る、金太郎飴を切断してその断面を見せつける、などの挑発を行い、仲裁に入った班長の〈古着屋フエラムネ〉を生命の危機に晒しました」
「そんなに昔のことを蒸し返さないでください」と俺は云った。
またもや傍聴席が騒ぎ出す兆候が現れた。主将は即座に「静粛に！　静粛に！」と叫びながら、机の穴から顔を出すモグラたちに次から次へとハンマーを叩きつけた。それを終えると彼は重々しい口調で、
「同情の余地はありませんね」と云った。
「被告人の犯行は極めて悪質であり、我々登山部の

評判を著しく貶める行為です。過去の活動での素行も悪く、今後さらなる蛮行に手を染める恐れがあります。よって被告人への処遇は登山部からの永久追放こそふさわしいと考えます」

証人席の連中はいやらしいほどに神妙な顔つきで俺を注視している。モンブランは机にうつ伏せになって顔を隠している。

「異論のある方はいらっしゃいますか？」と主将は云った。大教室は明け方の森のような静寂に包まれている。

主将は五百人の熱烈な視線を浴びながら、よく通る声で宣言した。

「チェリー・ブロッサム被告を登山部から除名することに決定いたします」

一・二・四

「あの時は大変だったね」とモンブランは云った。

「殺されるかと思ったよ。ああ、思い出すだけで震えが止まらない」

俺は震える声で店員を呼び、暖房の温度を上げてもらった。

「いまはなにを勉強してるの？」

「中世の人身売買について研究してるよ」

彼女は目下研究中の内容を詳しく説明してくれたが、俺には難しくてちっとも理解できなかった。

モンブランは歴史学部が設立されて以来、最も研究熱心な学生だと云われている。一度なんかは積みあげた研究書に圧し潰されて死にかけたこともあるくらい熱心なのだ。図書館司書に救出されるまでの間に、彼女は三途の川であの与謝野晶子と一緒にバーベキューをして、「君死にたまふことなかれ」というお言葉を頂いたのだそうだ。

モンブランは赤い花柄模様のワンピースを着ていた。グラスについていた結露がテーブルに流れた。

俺は皿の上にスプーンを置いて云った。

「高みを目指すためなら、どんな場所でも登るつもりだよ。いずれは東京スカイツリーにだって登れるような気がしているんだ。それだけじゃないよ。ロッテワールドタワーだって上海タワーだって、ブルジュ・ハリファにだって登ってみせるさ！」

モンブランはデザートの焼き林檎を飲みこむと、産まれたての赤ん坊を見るような目で俺を見た。そらからなにかしゃべりかけてひっそりと口をつぐんだ。例えそれがどんな意味を持つ言葉だったとしても、俺はぜんぜん意に介さなかったことだろう。

なぜなら俺は垂直的人間だからだ。

俺は水平的人間に止まるわけにはいかない。

二

二・一

「天皇陛下万歳！　天皇陛下万歳！　天皇陛下万歳！」

枕元に置かれた「三島由紀夫目覚まし時計」から流れる威勢のよい演説によって、俺の一日は始まる。デジタル時計の横に、フェルトの軍服に身を包んだちっちゃな三島由紀夫がついている。朝になると、ゼンマイ仕掛けの腕をカクカクと動かしながら、ちっちゃな体に見合わない力強い声で熱弁をふるうのだ。まぶたをこすりながら時計の上のスイッチを叩くと、三島由紀夫はプラスチックの刀を抜いてハラキリをし、腰から上をカタリと前に倒した。

俺は布団からのそのそと這い出し、毛布に身を包んで薄明のバルコニーへ出た。毛布の隙間から冷たい外気が沁み入ってくる。俺はぶるぶると震えながら冷えた手すりを握った。

部屋の前には大きな河が流れている。ゆるやかに蛇行する広い河面を、様々なものが流れていく。

ほんとうにたくさんのものが、河上から流れてきて、河下に消えていくのだ。

例えば、魚の群れや倒木や、動物の死骸が流れていった。

寺院や学校や原子力発電所や、詩人の死体が流れていった。

男や女や男でも女でもある者や男でも女でもない者がもつれ合いながら流れていった。

いろいろな国家やイデオロギーが、星の数ほどの老若男女の死体に取り囲まれて流れていった。

そして意味から解き放たれた莫大な情報の海と、その上を油のように漂うかつて詩を成していた感傷的な言葉たちが流れていった。

朝のほとりで、河上の都市は夢のなごりを洗い流しているようだった。河は都市の裾元から流れ出て、太陽の産まれる埠頭へと繋がっているのだ。俺はバルコニーの手すりにもたれかかり、髪をとかし終えた都市がいたずらそうな流し目を使うのを、望とした気持ちで眺めていた。やがて河の水位が下がりはじめ、水の下から灯りの消えた街並みが姿を現した。街は朝日に照らされてちらちらと光っている。俺はくしゃみをした。

それから洗面所で顔を洗い、髭を剃り、歯ブラシをくわえてキッチンに立った。ポップアップ式トースターに食パンを差しこみ、オリーブオイルを引いたフライパンの上で卵を割った。卵の片面が焼きあがると、目玉焼きをくるりと裏返し、両面にしっかりと焼き目をつける。

俺はトースターがトーストを射出する瞬間を狙ってフライパンを振りあげ、目玉焼きをひょいと放り投げた。熱々のトーストと熱々の目玉焼きが宙で合体し、ぺたりと皿の上に落ちた。「今日も調子がいいわね、ダーリン」とトーストが云い、「君もだよ、ハニー」と目玉焼きが答えた。

ラジオが弾んだ声色で告げた。

「今日は全国で気温が上がり、各地で桜が満開を迎えるでしょう」

俺は目玉焼きトーストを平らげると、「ヤクルト」を一本飲んでからアトリエに入った。

アトリエには本棚と本棚と本棚と本棚と床の間がある。床の間には「糖分」と書かれた軸が掛けてあり、床板には「コカ・コーラ」の一ガロン瓶が置かれている。

俺はキャンバスの前に座って鉛筆を持ち、今朝の河の情景のスケッチを試みた。しかし手前の河岸に手をつけたところで鉛筆を置いた。いったいぜんたい、あんなわけのわからない河の絵を、どうやって描けばよいのだろうか？

俺は天井に向けて呼びかけた。

「おーい、〈板垣退助の髭〉、こっちへおいで」

〈板垣退助の髭〉は十四本の足を忙しなく動かしながら天井を這い、額縁にはまったタンギーの『ママ、パパが怪我しているよ！』の脇を壁伝いに下り、ダリの『欲望の謎、母よ、母よ、母よ』を立て掛けたキャンバスの下を通りぬけ、ようやく俺の座る椅子の足元に辿りついた。〈板垣退助の髭〉は「ギュルギュル」と鳴いた。

〈板垣退助の髭〉はそんじょそこらのダンゴムシとは違っている。体長がなんと五十センチもあって、背中がクロームメッキみたいに黒光りしているのだ。毎朝栄養たっぷりのご飯を与え、日曜日には欠かさず革靴用クリームで背中を磨くことにより、ここまで立派に育てあげたのだった。

「さて、あの河の絵をどうやって描いたらいいかな？」

俺がそう訊ねると、〈板垣退助の髭〉は、

「ギュルギュル、ギュルギュルギュルギュル、ギュルギュル」と鳴いた。

「なるほど、それはいいアイデアだね！」

河を描きかけた画用紙をキャンバスから外すと、バルコニーへ運び、ポイッと河に投げ捨てた。画用紙はじたばた暴れながら河を流れていった。

俺は解凍した冷凍ネズミを中華皿に盛りつけて、〈板垣退助の髭〉の前に差し出した。〈板垣退助の髭〉はむしゃむしゃと美味しそうにネズミを食べた。それから彼は身体を横に揺らして感謝の意を示し、俺

の体に登って這い回った。こいつが腰にまとわりつくと、くすぐったくてぞくぞくするのだ。俺は耐えきれずに笑いながら、〈板垣退助の髭〉を両手で抱えて床に下ろし、硬い背中を撫でてやった。

「よしよし、いい子だな」

〈板垣退助の髭〉は「ギュルギュル」と鳴いて体を丸めた。

俺は風呂敷に教科書と筆記用具を包んで肩に担ぎ、「行ってきます！」と云って窓枠をまたいだ。本棚と本棚と本棚と本棚が、声を揃えて見送ってくれた。

「いってらっしゃい、みてらっしゃい、きいてらっしゃい、しゃしゃいのしゃい」

二・二

俺はクロールをしながら軽快に街の上空を進み、満開の桜並木を横切った。春風が桜の花びらとワルツを踊りながら、体をくるくると掠めていく。やがてホテルの屋根を滑りおりて、体操選手よろしく三回転の宙返りを決めると、大学の前の舗道に足を揃えて着地した。

リベルテタワーのエントランスに、折しもエレベーターが到着した。ポニーテールのエレベーターガールがドアを開いて待っている。俺は数人の学生とともに駆けこんだ。

エレベーターは二階で停まり、キャンパス・ツアーに参加するご老人方がざっと百二十人くらい乗りこんできた。彼らをみんな収容すると、重量オーバーを示すサイレンが鳴り響いた。ご老人方が一人残らず重い腰痛を抱えていたからだ。エレベーターガールが入り口近くにいた人口統計学の教授を両手で「えいっ」と弾き出すと、ドアは元気よく閉まった。

俺はご老人方を掻き分けて一五〇階で降り、中国語の再履修科目が開かれる一五七〇五番教室の前へ来た。この部屋には歴代の中国語教師たちとの闘いに敗れ、じくじたる思いを抱いて大学を去って行った学生たちの怨霊が漂っている。俺は体に塩を練りこみ、額にお札を張りつけてから教室のドアを開けた。

室内にはすでにちらほらと受講生が見え、後輩の〈穴熊の姿焼き〉の姿もあった。

「チェリー先輩、おはようございます」

「おはよう。一緒に頑張ろうね」

〈穴熊の姿焼き〉は彼が再履修をする破目になった要因を滔々と語った。それによると、彼は昨年のオンライン期末試験に友達と力を合わせて回答した結果、どういうわけか二人とも答案がまったく同じになってしまい、不正を犯したことが先生にばれてしまったのだそうだ。

「で、その友達はどうしたの？」
「中退しました。でも僕はちゃんとこの単位をとって卒業するつもりです。だからもう落とすわけにはいかないんです」
「俺も絶対に落とすことはできないよ。これで再々再履修なんだ」
「先輩、さすがですね！」
俺は椅子ごと〈穴熊の姿焼き〉に接近し、彼の右足を踏みつけた。
「あはは、冗談ですよ。なにか楽な単位があれば教えてください」
俺は風呂敷から表紙にチェブラーシカのイラストがついた手帳を取り出した。その裏表紙にクレヨンで可愛くデコレーションされた時間割表が貼ってある。それぞれの科目をカラフルな文様で彩り、隣に先生の似顔絵を描いているのだ。
「そうだなあ、この『催眠術概論』は絶対にとったほうがいいよ。講義中に寝れば寝るほど評価が高くなるからね。あとはこの『ダダイスム実践』もおすすめだね。科目としては存在しているんだけど、先生が授業をやらない主義の人だから、履修登録しておくだけで単位が貰えるよ。でも裏ルートで登録する必要があるから、やりかたを教えるね」
俺は小さな紙きれを〈穴熊の姿焼き〉に握らせた。
そこには履修制度を陰で操る老齢の事務室職員の名前と、彼に履修登録を依頼する際に必要な合言葉が記されていた。
「あとで事務室に行ってみます」と彼は云った。
「ところでそのサルみたいなやつはなんですか？」
「これはね、チェブラーシカだよ」
〈穴熊の姿焼き〉は俺の目を見つめ、一目惚れをした中学生みたいな声を発した。
「かわいいですね、チェブラーシカ」
教室には俺たちの他にも三十人ほどの学生がいて、大変賑やかだ。
最前列の席には、机の上であぐらをかき、お香を焚いている学生がいた。近づいてしげしげと眺めると、彼は甲高い声で喚いた。
「後生だから放っておいてくれ！　僕はこれから悟りの境地に辿りつかなくちゃいけないんだ！　時間が、もう時間がないんだよ！」
教室の中央にはキリンが座っていた。座るといっても頭が教室の天井よりも高いので、首を強引に折り曲げて背中を椅子に乗せ、四本の脚を上に挙げた姿勢でやっと教室に収まっている。
「アクセシビリティという言葉をご存知ですか？」
天井付近からキリンの悲痛な声が降ってきた。
「この有様ではソマリアの同胞に合わせる顔があり

ませんよ」
　俺の隣の席にはミン・アウン・フライン氏にそっくりな男がいた。
「もしもし、あなたはミン・アウン・フライン将軍ですか？」と俺が訊くと、男は「いいえ」と即答した。
「よく似ていると云われませんか？」
「云われませんよ、そんなこと。だいたいミン・アウン・フラインなんて名前は初めて聞きました。それに不用意に名前を出すのはその人に対して失礼ではありませんか？」
　彼は軍服の胸ポケットからハンカチーフを出し、玉のように滲む額の汗を拭いた。
　中国語教師が現れたのは授業の開始時刻きっかりだった。そのくせ彼は一冊の教科書の他にはなにも持っておらず、まるで散歩の途中に気が向いて立ち寄ったとでもいうような風情をしていた。
「それではさっそくですが、講義を始めます」
教師は使い古された真っ赤な表紙の『愉快な中国語』を学生に見えるように持ちあげた。
「みなさんこの教科書は持っていますか？　持っていない人がいれば教えてください」
　学生たちは一斉に教科書を掲げてみせた。
「誰も忘れていないとは、みなさん優秀ですね。今日は数字の一から一億を中国語で云えるようになりましょう。では三ページを開いてください」
　教師は舌でれろれろと舐めた指先を使い教科書のページをめくった。
「まずは一から五を読んでみましょう。では私に続いて読んでください」
　教師が数字を読みあげると、学生たちが復唱した。
「イー、ァー、サン、スー、ウー、はいどうぞ」
「イー、ァー、サン、スー、ウー、はいどうぞ」
「はいどうぞの部分はいりませんよ。イー、ァー、サン、スー、ウー、はいどうぞ」
「はいどうぞの部分はいりませんよ。イー、ァー、サン、スー、ウー、はいどうぞ」
　教師は長大な咳払いをかました。
「リィウ、チー、バー、ジゥ、シー、はいどうぞ」
「リィウ、チー、バー、ジゥ、シー、はいどうぞ」
「それでは一人ずつ発音して貰いましょう。では先頭のあなたからどうぞ」
　教師は最前列で解脱を目指す青年に発音練習を促した。青年は発声した。
「なうまくじつちりやしびきやなんだたぎやたなんあんびらじひらじまかしや」
「発音がなっていませんね。もう少し練習してください。では次の方、どうぞ」

今度はカーテンの裏でカップラーメンにお湯を注いでいた女子学生が示された。彼女は数字の一から五を三分もかけてねっとりと読みあげたので、教室に忍び笑いが広がった。

「もっと発音練習を繰り返してください」と教師は教壇の上で云った。

「みなさん、いいですか？　数字が読めなければ買い物ができません。買い物ができなければ飢えて死んでしまいます。それが資本主義というものです。私はみなさんに、せめて中国共産党に入党できるくらいの語学力を身に着けさせたいという思いでここに立っています。どうかみなさんもそのつもりになって、積極的な姿勢で授業に参加してください」

しかし教師の期待に応えられそうな優れた学徒は、この教室の中にはただの一人もいなかった。授業が進むにつれて学生たちは集中力を失い、走り回る者や、花火を打ちあげる者や、マントラを唱えながら空中浮遊を成しとげる者が現れて、てんやわんやの大騒ぎに発展した。やがて講義が壊滅すると、教師は『愉快な中国語』をほっぽりだして逃げるように教室を去った。

「これでこの科目の約七パーセントを破壊しましたね」と〈穴熊の姿焼き〉が云った。

「二限も授業があるの？」

「はい、『アトランティス帝国の文化』があります」

「それじゃあ、また来週」

俺は後輩と別れると、『愉快な中国語』をお尻の下に敷いてローラーつき滑り台を滑走した。この滑り台を使うと、エレベーターに乗るよりも早く地上に下りることができるのだ。ところが途中の階で次から次へと学生が割りこむので、下の階へ行くほど滑り台は混雑する。誤って頭を下に向けて飛びこむ者や、お弁当を食べながら滑る者、恋人同士で抱き合いながら滑走する者もいる。学生たちは滅茶苦茶に折り重なりながら一階のフロアに投げ出された。

俺は酔っ払いのようにふらつきながら街へ出た。

二・三

裏通りに美術書を扱う古書店があった。

店の前に、店員なのか客なのか、はたまた浮浪者なのか定かでないおばあさんが所在なげに佇んでいて、扉を開ける俺に一瞥をくれた。

店内は薄暗く、古い紙の匂いに満ちていた。五メートルはあろうかという背の高い本棚が、狭い通路を威圧するように並んでいる。俺は西洋絵画の棚の前に立ち、画集の極彩色の背表紙に目を走らせた。

ruben Bellinkx……victor Brauner……bernerd

Buffet……bruno Bruni……hans Burkhardt……sandro Botticelli……hieronymus Bosch……piter Bruegel……、

C……、CHAGALL

俺は梯子を登り、棚の高みにあるシャガールの本を引きぬいた。

それはこの巨匠の戦前の作品を一挙に収録したフランス版の画集だった。キュビスムに影響を受けたパリ時代の絵画が余すところなく載っている。これは種類に富むシャガールの画集の中でも珍しいことだ。ピカソとの関係を研究するうえで都合がよいので、買って帰ろうと思い、見返しの値段をたしかめた。ところがどっこい、十万円もするのだ。見間違いかと思いゼロの数を何度も数えたが、やはり十万円なのだ。それから爪でこすってゼロを一つか二つ消そうとしたがうまくいかなかった。財布の中にはしわくちゃになった千円札が一枚だけ入っていた。野口英世はようやく財布から出してもらえると悟ったのか、「俺の顔にふさわしい、セクシーなものを買ってくれよ、ベイビー」と云った。「心配しないで」と俺は財布を覗きながらささやいた。

「すごく素敵なものを見つけたんだ！」

店員はレジの後ろのパイプ椅子に腰かけて本に値段をつけている。俺がカウンターの上に画集を置くと、彼はおもむろに顔をあげた。分厚い前髪が眼に掛かっている。俺は壁に貼られたアルバイト募集の案内を気にしながら、ちょっとした賭けを持ちかけてみた。

「僕と勝負をしませんか？　僕がこれから一つのなぞなぞを出します。あなたがそのなぞなぞに五分以内に答えられた場合、僕はこの店で一か月間、ただ働きをしましょう。しかし正しく答えられなければ、……この画集を千円札一枚で売っていただきます。どうでしょう？」

店員は素早い手さばきで前髪を掻きあげると、眉間にしわを寄せて俺を値踏みしながらゆっくりと椅子を立った。

「よいでしょう……。その勝負、受けて立ちましょう！」

俺はカウンターに積まれていた展覧会のチラシの裏になぞなぞを書き、店員に手渡した。

［問題］

3人の火星人が月のホテルを訪れ、合計30ムーン・ドルを支払って宿泊しました。

しかし翌朝、ホテルの支配人は本当の宿泊代が

25ムーン・ドルであったことを思い出し、月ウサギに5ムーン・ドルを手渡し、3人の火星人に返すように云いました。

ところが月ウサギはこっそり2ムーン・ドルを盗み、3人に1ムーン・ドルずつ返しました。

さて、3人の火星人は宿泊代を9ムーン・ドルずつ支払ったことになります。

それに月ウサギが盗んだ2ムーン・ドルを足すと29ムーン・ドルです。

あとの1ムーン・ドルはどこへいってしまったのでしょうか？

店員は問題に取りかかった。顔を曇らせ、フクロウみたいにぐりぐりと首をひねっている。俺はそわそわした気分で、彼の顔と時計の秒針とを代わる代わる見た。三分が過ぎたころ、いよいよ彼の首は見事に一回転を成しとげた。そして五分が経過する寸前に、早口で次のような回答を述べた。

「わかりました。ほんとうは月ウサギが3ムーン・ドルを盗んでいたのでしょう」

「違います。それじゃあ答えになっていませんよ」

俺は正しい答えを教えた。[3]

店員は蒼白な顔をしてもう一度問題文を読むと、大きな目をぱちくりさせて、

「いじわるな問題だ！」と憤慨した。

トレーの上の野口英世が満面の笑みでウインクをした。

俺は画集を固く抱きしめながら店を出た。店先にいたおばあさんが乾いた雑巾のような声で云ってくれた。

「ありがとう。また来てね」

俺は人気のない路地に駆けこむと、画集に頬ずりをして、いつまでもいつまでも、うっとりと飽かずに眺めていた。

二．四

翌日、シャガールの技法を大いに参考にしながら天婦羅の絵を描いた。『エビの天婦羅』というタイトルで、絵の裏側に自作の詩もつけた。

天婦羅よ、エビの天婦羅よ。
煮えたつ油の海から
上陸する
エビの群れ。

俺はその絵に十万円の値をつけて天婦羅屋に持ちこんだ。天婦羅屋は値切りに値切って十銭で買いとった。俺の絵は壁に飾られた。

翌日、電話が掛かってきた。
「尻尾だけ残してエビが消えてしまいました。どうすればよろしいでしょうか？」
「誰かが食べてしまったのでしょう。タイトルを『エビの天婦羅の尻尾』に書き換えてください。しかし無礼なやつもいるもんだなあ」

三

三・一

ある日、たいくつしのぎに通りでトンボ返りをして遊んでいると、カッフェーのテラス席に座るモンブランの姿が目にとまった。ライトグレーのセーターを着て、白い丸テーブルに頬杖をつき、文庫本を読んでいる。俺はそっと横から近づいて本の表紙を覗いた。それは『シャトゥーン-ヒグマの森』という小説だった。
「おはよう。ここに座ってもいい？」
「そこは眩しいから、こっちに座りなよ」
彼女はテーブルの上からプラスチックの間仕切りを外して地面に置いた。
俺はモンブランに、兎澤堂の桜もちと、道端で拾った桜の枝をあげた。桜の枝は長さが七十センチもあって、おまけに七色に光るイモムシが引っついていたので、モンブランは驚いて七百メートルも後方に飛び退いた。
「その本、面白いの？」と俺は七百メートルを走って戻って来たモンブランに訊ねた。彼女は百メートルを十二秒台で走ることができるランナーなのだ。
「おすすめだよ！　ヒグマが人を襲いまくる物語なんだけど、かなりいい感じに残虐なんだよね。映画化したら絶対に面白いと思うんだけどなあ」
モンブランは一流のスプラッター映画評論家で、この分野に対する次のように完全無欠な評価軸を持っていた。
一・グロテスクでなければスプラッター映画とはいえない。
二・スプラッター映画はグロテスクであればあるほど素晴らしい。
三・一と二以外のいかなる観点からも、スプラッター映画を批評するべきではない。
これらの観点から世界中のあらゆる映画を分析した結果、最も優れたスプラッター映画は『バックマン家の人々』であることが判明した。
俺はこの三原則をポルノグラフィーに援用することで、前人未到の批評領域に到達した。
一・エロティックでなければポルノグラフィーとはいえない。

二．ポルノグラフィーはエロティックであればあるほど素晴らしい。
三．一と二以外のいかなる観点からも、ポルノグラフィーを批評するべきではない。
これらの観点から世界中のあらゆる芸術を分析した結果、最も優れたポルノグラフィーは『男はつらいよ』であることが判明したのだ。
「北海道を思い出したよ。あれからもう二年が過ぎたのか……。ほんとうに楽しかったな」
「うん。楽しかったね。またスノーロイヤルを食べたいなあ」
モンブランは文庫本を鞄にしまい、両手でカップを持ちあげてコーヒーを飲んだ。彼女は宇宙の真珠のような耳飾りをつけていた。
「就活はうまくいってるの？」
「まあまあって感じかな。なんとか内定を貰えたけど、まだ続けているよ」
「よかった。私は大学院に進もうと思うんだ」
「大学院に入るのって難しいの？」
「別に難しくはないけど、秋に試験があるの」
「へえ、だからずっと部屋に籠っているんだね」
モンブランは大学図書館の内部に自分の部屋をつくり、そこに暮らしているのだ。
部屋は地下三階の哲学の本が並ぶ棚のちょうど裏側にある。部屋には机、椅子、ピアノ、コーヒーメーカーなどが小奇麗に並べられ、蓋のちぎれたナルゲンボトルに、春には梅の花が、秋には萩の花が挿してある。花がなくちゃ、生きていけないからだ。
その部屋は実に、この女子学生の慎ましやかな生活上の聖域であり、図書館警備員の攻略するべき最後の砦だった。両者の間にはこの区画を巡って日夜激しい戦いが繰り広げられていた。部屋の壁には鉈が二つ掛けられていて、一つは登山時の藪漕ぎ用、もう一つは図書館警備員との戦闘用だった。
「ずっとあそこにいると疲れちゃうから、時々ここへきて息抜きをするの」
「映画は見ないの？」
「この前『地獄の黙示録』を見にいったよ」
「面白かった？」
「うーん、三十点ってところかな」
ローラースケートを履いた給仕が颯爽とこちらに滑ってきて、俺の注文したコーヒーをテーブルに置いた。俺はテーブルに備えられている砂糖のありったけをカップに投入してかき混ぜた。モンブランはその俺の手の動きをまじまじと見つめていた。
「甘すぎて病気になりそう」
「俺はコーヒーよりも砂糖が好きなんだ。いつも砂糖の山にコーヒーを垂らして、スプーンでじゃりじ

やり食べているよ」
「それはコーヒーに対する冒涜ね」
「砂糖に対する忠誠だよ」
「絶対にやめたほうがいいよ」
「絶対にやめる気はないね」
「コーヒーに溺れる夢を見たいの？　それとも砂糖に溺れる夢を見たいの？」
　そんなふうにおかしなもの云いをされると、俺はなにも云い返せなくなってしまう。
　だいたいモンブランは俺よりも聡明で、俺よりも親切で、俺よりも屈強で、俺よりも多くの天皇の名前を知っていた。だから俺が彼女を打ち負かすためには、背後から奇襲攻撃を仕掛けるか、あるいは彼女がワニを乗り回したいとでも云った時に、どこかの動物園からワニを引っぱってくることぐらいしかできそうになかった。
「ほら、立派なアリゲーターを連れてきたよ。思う存分乗り回したまえ」
　ところが彼女は照れ笑いを浮かべてこう云うかもしれない。
「えへへ、やっぱりワニじゃなくてトラがいいな」
　昼下がりの日射しが丸いテーブルを半分だけ照らしていた。俺は暖かい陽光を浴びながら、淡い影の中にいるモンブランの話に耳を傾けていた。テーブルの下では数羽のハトがしきりに石畳をついばんでいる。
　俺たちは我が国の将来について深遠な議論を繰り広げた。お待ちかねの国政選挙が近づいていたからだ。
「チェリーはどの政党に入れる？　私は丸眼鏡党かな」
「俺は伊達眼鏡党に入れるよ」
　彼女はきょとんとした顔で訊ねた。
「なんで丸眼鏡党に入れないの？」
　俺は椅子の背もたれに寄りかかった。
「そりゃあ、伊達眼鏡党の政策が優れているからだよ」
「でも丸眼鏡党もいいと思わない？」
「別に思わないよ」
「丸眼鏡党は税金を安くしてくれるって聞いたけど」
「伊達眼鏡党は税金を撤廃してくれるんだよ」
「そんなの実現できないと思う」
「それは丸眼鏡党だって同じだよ」
「じゃあ丸眼鏡党でもいいじゃない」
「伊達眼鏡党の方がロマンがあるんだよ」
　モンブランは黙りこくってしまった。
　まずいことをしたな、と俺は思った。どこかで彼女の癪に障ることを口走ったようだ。

「でも、丸眼鏡党にもいいところはあると思うよ。うん、どちらもいい政党だ。いや、待てよ、むしろ丸眼鏡党の方が優れているかもしれない。丸眼鏡党は素晴らしい政党だ！　丸眼鏡党万歳！　そのピアス素敵だね」

「そうだ、なにか食べようよ！」とモンブランは急に快活になって云った。

「そうしよう」と俺は深く頷いた。

　我々は国語辞典のようにぎっしりと文字の詰まったメニュー本を開き、虫眼鏡を使って目を通した。

「俺は百二十ページの下から三行目にあるこのプリンアラモードにするよ」

プリンアラモード（Pudding a la mode）

　太平洋戦争後に日本で誕生した和製洋菓子の一種。カスタードプディングの周囲にアイスクリーム、各種フルーツなどを盛り合わせる。

　三〇〇キロカロリー。五〇〇円。

「えーっと、私はこの五十五ページにあるアイスクリームがいいな。あ、やっぱりこの二百四十ページのケーキにしよう！」

「景気がいいね！」

「えーっと、二十点かな」とモンブランは真剣な面持ちで云った。

　我々は注文したものを食べ尽くすと席を立った。

　店員がレジスターの後ろから「ご一緒ですか？」と訊ねた。俺は、別々で、と云いかけて、「一緒にしてください」と答えた。

「俺の分も払ってくれないかな」と俺はモンブランに云った。

「お金がないんだ……」

　モンブランは苦笑いをしながら二人分の会計を済ませた。

「ありがとう。見てごらん、こうして忘れないようにメモをしておくよ」

　俺は左手の甲にサインペンで「モンブラン、八〇〇円」と書き記した。

　たいくつな俺たちは街の中を当てもなく歩いた。何もやるべきことはなかったし、金もないのでどこへも行くことができないのだ。モンブランは博士帽子を頭に乗せ、右手に桜の枝を握り、左手にキャンバス地のバッグを下げていた。桜の並木が表通りに花吹雪を散らしている。近年稀に見る強烈な吹雪なので、季節外れの除雪車が出動し、車道に溜った花びらをせっせと掻き退けている。俺たちはくるぶしの辺りまで積もった花びらを、足で蹴り払いながら歩いていた。

「実はね、私もあんまりお金がないの。この前バイト先が潰れちゃったから」
「え？　あの和食が有名な中華風イタリアンのお店が？」
「そうなの。でもおばあちゃんがお小遣いをくれるから大丈夫なの。私のおばあちゃんはすごく優しくて、会いに行くたびに必ず二万円もくれるから。でもなんだか申し訳ないから、これからは会いに行く頻度を減らそうと思ってるけどね」
「俺はこれから仕事だよ。でもまだ二時間も暇なんだ」
　空では水色と桃色の渦巻き模様がひしめいていた。
「たいくつだ」とどちらともなく云った
「たいくつだね」
「どこへ行く？」
「どこへ行こう」
「なにをする？」
「なにをしよう」
　子供たちをめいっぱい積んだ路線バスが我々の横を走り過ぎた。俺は生暖かい排気ガスと花びらの狼藉を浴びるうちに、どうしようもなく悲しくなってきて、モンブランの顔を見ることができなくなってしまった。
　我々は連れだって楽器屋の並ぶ通りを行き、駅前の交差点を走って渡り、埃にまみれながら細道を抜け、門の閉ざされた教会の前でなにも云わずに別れた。
　俺は一人でもと来た道を引き返さなければならなかった。途中で地面に落ちていた石ころを蹴り飛ばし、大きく伸びをした。
　その瞬間、俺はついにたいくつの野郎を捕まえることに成功した。ビロードのようになめらかな尻尾が手に触れたのだ。俺は尻尾を握りしめて力いっぱい振り回し、「それっ！」と空高く放り投げた。
　たいくつの野郎は猛烈な速度でぐんぐん空を昇っていく。あいつは風に乗ってどこか遠くの街へ流れつき、また別の誰かを包みこむのだろう。

三・二

　俺は鉄道の高架下にあるダンゴムシ専門店に勤めている。「ローリー・ポーリー」という名の店で、入り口のドアガラスの上では「ＲＯＬＹ―ＰＯＬＹ！」という表記のカラフルなネオンサインが光っている。
　店長の〈生活習慣病博物館〉はカウンターの裏の椅子にふんぞり返って、缶ビールを飲みながら知恵の輪で遊んでいた。彼は俺が挨拶をすると無言で立ちあがって店の奥に消えた。店の照明はダンゴムシ

に配慮して青白く、いつもどおり客は一人も来ていなかった。

俺はタイムカードを押して腰にエプロンを巻き、カウンターに貼られた仕事割り当て表の自分の欄を見た。

チェリー・ブロッサム
18時～19時：お掃除
19時～20時：お勉強
20時～21時：お散歩
21時～22時：お食事

俺はさっそく飼育ケースの清掃を始めた。ケースの内側の汚れを拭き、土の表面からダンゴムシの糞や餌の食べ残しを取り除いたあと、霧吹きで土を湿らせていく。単純だけれど、ケースの数が多いから大変な作業だ。この店には計五百個の飼育ケースがあり、各ケースに五百匹ずつダンゴムシが飼育されている。ありふれた種から外国の絶滅危惧種に至るまで、どんな種類のダンゴムシでも扱っていることが店の売りなのだ。

二百五十七個目のケースの蓋を開けようとした時、目を疑うような出来事が起こった。なんと店に来客があったのだ。客の姿を見るのは半年ぶりくらいじゃなかろうか。客は八本の脚と四本の腕を持ち、細長い胴体の上に大きく膨らんだ赤茶色の頭がついていた。

「やあ、あなたは火星人ですね！」と俺は興奮を押さえきれずに云った。

「さようです」と火星人は答え、十二個の眼で店内を見渡した。

「この星で最も一般的なダンゴムシを二十ダースください」

「承知いたしました」と云って俺はふとつけ加えた。

「ところで、失礼ですが、ダンゴムシをどのような用途で使われるでしょうか？　食用ですか？」

「まさか。こんな気持ち悪い生物を食べるわけがないでしょう」

火星人は全ての手脚を同時にくねらせた。

「あなたは火星の地殻がなにでできているかご存知ですか？」

「いえ、知りません」

「実はですね」

火星人は細長い口を俺の耳元に近づけてささめいた。

「火星はチョコブラウニーでできているのですよ」

「へえ、興味深いですね！　しかしダンゴムシとな

にか関係があるのですか？」
「大いに関係があるのです。近ごろ火星では火山活動の異常な活発化にともない地表のチョコブラウニーの割合が増加するという現象が起こっています。つまり一種の環境問題ですな。そこで地球のダンゴムシを放つことで土壌成分のバランスを調整しようという計画があるのです。私は本日、そのためのダンゴムシを買いつけに伺ったのです」
「なるほど。この子たちは甘いものが大好きですし、繁殖力も強いですからうまくいくと思いますよ」
「さようですか。安心しました」
俺は二十ダースのオカダンゴムシを紙袋に詰めて火星人に渡した。火星人はクレジットカードの一括払いで購入すると、「それでは失敬」と云ってそそくさと店を出た。
俺はドアガラスに片手を当てて火星人を見送った。外はもう薄暗くなっていた。店の前の車道に停められていた円盤が宙に浮かんで火星人を下から吸いこみ、夕焼けの空の彼方に消え去った。
「貴様！　なにをしてやがる！」
いきなり、背後から〈生活習慣病博物館〉の怒声が聞こえたので、俺はハッとして振り向いた。〈生活習慣病博物館〉は鬼のような形相でにじり寄ってきた。
「火星人が来ていたんですよ。ほんとうなんです。信じてください！」
「あ？　なにを云いやがる。客が来るわけがねえだろ！　ついに頭がいかれちまったのか！　このタコ野郎！」
「ええ、そうなんです。タコみたいな野郎なんです。そいつがやって来てダンゴムシを二十ダース買っていったんです」
「なんだとてめえ！　それ以上くだらねえことをほざくと給料減らすぞ！」
店長は壁際に俺を追いつめた。俺はまた殴られるんじゃないかと思って身構えたが、どうやら怒りが収まったらしく、スマートフォンで時刻を確認した。「もう掃除はいいから授業の準備をしやがれ」と彼は云った。
俺は飼育ケースの並ぶ通路の奥にリキテンスタインの『Ｈｏｐｅｌｅｓｓ』がプリントされた大きなレジャーシートを敷き、その前にビール箱を置いた。ここでダンゴムシたちに道徳教育を行うのだ。〈生活習慣病博物館〉はカウンターの椅子にだらしなく体を沈め、知恵の輪を手に取った。
「八時になりました。皆さま、どうぞお集まりください」
俺が店内放送でそう呼びかけると、数千のダンゴ

ムシがケースからざあっと這い出してきて、きれいにレジャーシートの上に整列した。シートは一面真っ黒になって、入りきらないダンゴムシは上へ上へと積み重なっていく。やがて俺の背丈ほどの立派なダンゴムシ作りのピラミッドが完成した。

俺はビール箱にまたがって幸田露伴の『努力論』の読み聞かせを始めた。

『……たとえば、今自分は脚力が弱くてならぬから健脚の人とならんと希望する時は、一念心が脚に向う。脚と自分と一気相連なっていないのではダメだが、先ず普通の状態即ち病態でない以上は、心が脚を動かさんとすると同時に気が心に率いられて動く、そこで脚はおのずから動く。言うまでもなく脚と自分と一気流通して居るからである。ところで健脚法の練習という段になると、ただぶらぶらと歩いたのではいけぬ、一歩一歩に足に心を入れるのである』[4]

はい、それではこの部分を読み解いていきましょう。まず露伴さんは心が気を率い、気が血を率い、血が身を率いるということを述べています。これがどういうことかというと……」

講義をここまで進めたところで、〈生活習慣病博物館〉が陳列棚の裏から声を張りあげた。

「おいてめえ、俺の〈マリリン・モンローの唇〉を知らねえか？」

「知りませんよ」と俺はすかさず云った。

「おかしいな。どこにもいねえんだ」

彼はお気に入りのダンゴムシが見当たらないので、すっかり困惑している様子だった。しまったな、と俺は思った。不覚にも、〈マリリン・モンローの唇〉を、火星人に売った二十ダースのダンゴムシに混ぜてしまっていたらしい。しかしそんなことを口にすればただでは済まないだろうから、俺は知らぬふりをすることを決めこんだ。

そのまま読み聞かせを続けていると、店長はついに眼前まで近づいてきて、俺の腕を掴んだ。『努力論』の文庫本が床に落ちた。

「てめえがちゃんと目配りしねえからこうなるんだろ！」

「やめてください」と云って俺は彼の手を振り払った。

ダンゴムシたちはシートの上で一斉に丸くなった。ピラミッドがくずれ、コールタールのように床に広がった。

「他に誰もいねえだろ！　さっさと白状しやがれ！」

「きっとお隣のカメレオンが食べちゃったんですよ。そうだ、そうに違いない」

俺がとっさにそう云うと、店長は店を飛び出し、俺がため息をつく間もなく戻ってきた。店の上の線

路を列車が通過し、その振動で陳列棚がガタガタと揺れた。

「俺を担ぎやがったな、この野郎」と〈生活習慣病博物館〉はガタガタと震えながら云った。

「お宅のカメレオンがうちのダンゴムシをお食べになったようですがと訪ねてやると起きぬけのカメレオンが這い出してきて私は舌がいいから牛ヒレ肉以外は頂きませんとおっしゃる。ダンゴムシなんぞ塩気がなくて不味いから召しあがらないとおっしゃる。じゃあうちのダンゴムシはどこへ消えたんでしょうかこれが神隠しというやつでしょうかと訊ねるとさっきお客様がお見えでしたからその方がお盗みになったのではございませんかとおっしゃった。やっぱりてめえの仕業だな！」

「違います。本当に知らないんですよ」

俺は店長に胸倉を掴まれ、リノリウムの床に転ばされた。俺は倒れたまま彼の脛を思いきり蹴りつけてやった。彼は脛を両手で押さえて跳びあがった。

ダンゴムシたちは床の上で右往左往していた。数千のダンゴムシの作る黒い模様がアメーバ状に動き回り、レジャーシートにプリントされた涙を流す女の顔が現れたり隠れたりした。

俺はこれまでに〈生活習慣病博物館〉から被った諸々の仕打ちを思い浮かべた。そのなかには数多の加虐行為が含まれていた。この男が暴言と暴力によって従業員を叩きのめすことに快楽を感じていることは明白だ。俺が知っているだけでも、少なくとも八十六人が店長との暴力沙汰によって病院送りにされている。つい先日にも、彼は新入りの女子高生を羽交い絞めにして、わずか半日で退職に追いこんだではないか。それでも給料がべらぼうに高いので、俺はこの男の乱暴に耐え忍んできたのだった。

〈生活習慣病博物館〉はモップを手にして飛びかかってきた。俺は彼の脚に不格好なタックルを加えてなぎ倒すと、ダンゴムシを靴の裏で潰さないように注意して壁際に移動した。

壁際にはダンゴムシの飼料であるドラム缶入りの業務用ココアパウダーが積まれている。俺はドラム缶の封を開け、中身を〈生活習慣病博物館〉の体にぶちまけた。

店長は膝に手を当てて立ちあがろうとしていたが、ココアパウダーの直撃をくらって再び転倒した。すると匂いに釣られた無数のダンゴムシが大挙して彼の体に押し寄せた。彼の全身はあっという間に蠢動する黒い波に覆われてしまった。俺はぞっとした心地でその様子を見おろしていた。店長は言葉にならない叫びをあげながらのたうち回ったが、その抵抗もむなしく、止まる気配のないダンゴムシの殺到に

より動きを封じられた。
　俺は自分の体についたダンゴムシを払いながら、店の出入り口まで退いた。ガラス扉の前から振り返ると、陳列棚に挟まれた通路の奥に、青白い灯りに照らされた奇妙な塊が見えた。それは冷えきった溶岩のように静止していた。
　俺は罵りの言葉をリズミカルに刻んでみた。
「ざまァみろ！　粗大ごみ！　ウドの大木！　死にぞこない！　とんま！　虫ケラ！　愚か者！　ロリコン！　与太郎！　犬畜生！　人面獣心！　けつくらえ！　おたんこなす！　くたばっちまえ！　腐れチンポコ野郎！」
　それからウミユリのようなガス灯の並ぶ夜道を逃走した。

四

四・一

　俺は濃紺のスーツを着て風呂敷包みを小脇に抱え、全速力で駅に向かって駆けていた。
　駅舎の時計塔が近づいてきた。この調子ならなんとか間に合いそうだと俺は思った。改札口を風のように抜けると、プラットホームに列車が停車しているのが見えた。先頭の蒸気機関車がもうもうと煙を吹いている。乗客はあらかた乗りこんだあとのようで、ホームの端に小旗を持った車掌が立っている。プラットホームを覆う鉄骨屋根が地面に幾何学模様の影を落としている。俺はその複雑な影に足をとられながらホームをドタバタと突っ走った。発車を知らせるピストルが鳴り、客車のドアが閉まりだした。
　俺は清水の舞台から飛び降りるような気持ちで跳躍し、ドアの隙間を目がけてヘッドスライディングをした。
　俺は腕を伸ばしてするりとデッキに突入したが、あとちょっとというところで、右の足首をドアにがっしりと挟まれてしまった。体を起こし、両手でドアをこじ開けて右足を客車に取りこもうとする。しかしドアの圧力が強く、隙間を広げることができない。
　プラットホームにいた駅員が寄ってきて、ドアの外にはみ出した俺の右足をぐいぐいと引っぱった。
「無理なご乗車はおやめください！　お客様、無理なご乗車はおやめください！」
「放してください！」と俺は右脚をひねりながら叫んだ。
「もう乗車しています！」
　けたたましい汽笛が鳴り、列車はゆっくりと動きはじめた。すると右足が一層強い力で外に引かれた。ドアの隙間を覗くと、駅員が俺の右足にぶら下がっ

たままホームを腹ばいになってずるずると引きずられている。恐るべき執念だ！　列車がホームを離れるまでに決着をつけなければならない。俺は両手と左足をドアに押しあて、力の限りを尽くして右脚の膝を曲げた。すると靴が「すぽん」と気のぬけた音を立てて足を外れた。右足はとうとうデッキの中に収まり、ドアは完全に閉ざされた。すぐに立ちあがり窓の外を見ると、駅員は俺の革靴を掴んだままホームをごろごろと転がっていた。列車が駅を離れ、ホームも駅員の姿も視界から消えた。

靴を失った右足は左足に慰められていた。

「泣かないで。靴がなくたって歩くことはできるよ」

「ああ、恥ずかしくて腐りそうだ」と右足は嘆いた。

俺はデッキから車両へ入った。車両の中ほどにあるボックス席の一つに、〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉が座っていた。俺は左足でけんけんをしながら通路を移動し、彼の側に立った。彼は俺に気づくと膝を叩いた。

「チェリーじゃないか！　まだ生きていたんだな！」

俺は〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉の向いに腰を下ろした。彼が俺の服装の乱れを不思議がるので、俺は右足を椅子の陰に隠し、「ちょっと転んだだけだよ」と云った。〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は洗いざらしのジーンズを履き、真っ白いボタンダウンのシャツを着て、レイバンのサングラスを掛けていた。彼がこれ以外の服装をしているところを見たことがない。

「就活？」

「面接のために浦安に行くんだ」

「俺はもっと先まで行くよ。上野から乗ってきたのさ」

窓枠の下に蛇口がいくつか突き出ていた。〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は「サントリーウイスキー」と書かれた蛇口をひねってグラスにウイスキーを注ぎ、隣の「水」の蛇口を使い水割りにした。俺は「なっちゃん」の蛇口からオレンジジュースをグラスになみなみと注ぎ、一気に飲み干した。〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は俺の学部の同級生で、最後に会ったのはもう一年も前だった。彼はすでに就職先が決まっていて、いまは実家に帰るところだと云った。

「ねえねえ、どんな業界なの？」と俺は訊ねた。

彼は誰もが知る大手ディベロッパーの名前を挙げた。

「そりゃあすごいな。おめでとう！」

「ありがとう」と云って彼は窓の外を見た。

「おまえはどうなってる？」

「まだ一つも内定が貰えてなくて……。適性検査で

落ちてしまうんだよ。俺は社会に適性がないのかもしれない」
「おまえ、まさか性格検査で馬鹿正直に答えてないだろうな？」
「もちろん正直に答えてるよ」
「マジかよ。あれはいい感じに人格を作りあげなくちゃ駄目なんだ」
「そう云われても、俺はいい感じってのがわからないよ」
　俺がそう云うと、〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は椅子に座り直して脚を組んだ。
「まず社交的で努力家で決断力があるという点を強調するんだ。それから自信に満ち溢れていながらも他者に対する慈愛の心を持った人間として解答すれば、大体うまくいくよ。とにかく明るい性格を打ち出すことが肝心だな」
「……どれも俺に当てはまらないよ」
「お前が実際にどういう人間かなんてどうだって構わないんだよ。いいか、お前みたいな宵越しの天ぷらはプライドを捨てなくちゃだめだ。俺の云った通りにやらないと後悔するぞ。もし素のままの自分でうまくいくと思っているのなら、心を入れ替えるんだ」
「わかったよ」

　俺はシャツの下に手を入れてどうにかこうにか古い心臓を抜きとると、窓の外に投げ捨てた。それから保冷剤と一緒にジップロックに詰めてきた新しい心臓を鞄から取り出し、注意深く胸にはめこんだ。
「これから何十年も働いて生きていくなんて、ぞっとするな」
　俺はシャツのボタンを閉めながらそうぼやいた
「金だよ。とにかく金を稼ぐんだ」と〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は云った。
「稼いでなにをするの？」
「なにもしないさ。金があればなにもやらなくていいんだよ」
「それなら初めからなにもせずに寝ていればいいじゃないか」
「そういうわけには、いかないさ」
　彼はウイスキーのグラスを傾けると、唐突に父親の話をした。
「俺の親父は寝たきりなんだ。まだ五十代なのに。病気なのさ。だんだん体が動かなくなる病気なんだよ。もうほとんど口もきけないし、目も見えないんだ。体中の筋肉が動かなくなるのさ。頭ははっきりしているのに、やりたいことはもうなにもできないんだ。いずれ意識だけを残して世界と断絶しちまうのさ。俺はこれからその親父に会いにいくんだ」

サングラスに隠された両目がどこを見ているのか判然としない。父親の病気についてしきりにしゃべる彼の声を聞いていると、気分が悪くなってきた。俺は深刻な話につき合うと、決まって吐き気をもよおすのだ。頼むからこんな話はやめてくれと思った。

「憎しみだよ」と〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は云った。

「俺はその親父を憎んでいるんだ。親父のほうも俺のことを憎んでいる。それがどういうことか、わかるだろ？」

「君は……」

「憎しみだ」と彼は俺の声をさえぎって云った。

汽車は駅に停まった。大勢の客が通路に押し寄せ、座席が見る見るうちに埋まっていく。荷物をたくさん抱えた高齢の夫婦が、会釈をしてから俺たちの横に座った。俺たちはもうなにも話さなかった。汽車が駅を発つと、夫婦は孫の大学入学祝いについて、ぽつりぽつりと話をした。

窓の外には日光をギラギラと反射するコンビナートが広がっていた。汽笛が鳴った。その残響がカモメの群れとともに後方へ流れ去り、〈ビューティフル・ワンダフル・バーズ〉は窓を閉めた。

汽車はトンネルに入った。

四・二

ネズミの走り回る舗道の先に、物流倉庫のような外観の汚らしいビルディングが建っていた。地図によると、それがお目当てのネズミ駆除会社の本社のようだった。舗道を進むと、ネズミたちは一目散に道の端に整列し、通行人を見あげた。

俺はエントランスの受付にいた女に大学の名と氏名を伝えた。女はカウンターから身を乗り出して、俺の右足をじろじろと見た。

「お気になさらないでください」と俺は云った。

「右足がどうしても靴を履きたくないと云い張るものですから」

「階段で十三階にあがってお待ちください」

女は瞬きもせずに俺の右足を凝視していた。

俺は迷路のような廊下を延々と歩き続けた末に階段を見つけた。そして十三階まで上がったが、フロアごとに階段の作られた場所がまちまちなので、階を一つ上がるごとに迷路をさまよい、登り口を探しあてる必要があった。

十三階にどうやら待合室らしい部屋があったので、壁際に立ってピロピロ笛を吹きながら待機した。

受付にいた女の声でアナウンスが流れた。

「チェリー・ブロッサムさん、二番室へお入りください」

俺は「2」と記された金属製の扉を押し開けて部屋に入った。そこは取調室をだだっ広くしたような空間で、壁はコンクリートの打ち放しだった。安楽椅子の備えられた机が一つあり、そこから十メートルも離れた位置に丸椅子が三つ並べられている。部屋の広さに対して不相応に小さい穴のような窓が一つ、安楽椅子の後ろの壁に空いている。

窓のある壁を除いた三つの壁には扉が設けられていて、俺はそのうちの一つから足を踏み入れたのだった。右の壁の扉には「1」、左の壁の扉には「3」と表記されている。部屋を観察していると、その二つの扉が開き、それぞれから学生が現れた。一人は男子学生で、もう一人は女子学生だった。俺は風呂敷包みを肩に掛けて壁の前に突っ立っていた。男子学生はノートを手にぶつぶつと独り言を云い、女子学生は手鏡を見ながら髪をいじっていた。

天井板の一つがぱっくりと開き、ロープに吊るされた金属製の檻がぎこぎこと軋みながら下りてきた。檻には鼠色の作業服を着た男が閉じこめられている。あれが面接をする社員なのだろうか、と俺は思った。檻が床に達すると男は格子を掴んで揺すぶった。

「ちょっとちょっと、そこの君、檻を開けてくれないかな？」

男子学生が恐る恐る近づいて扉のストッパーを外すと、男はのっそりと檻を出た。空になった檻はロープに引きあげられ、天井板の裏へと回収された。男は安楽椅子に深々と腰かけ、ティシュペーパーで鼻をかむと、俺たち学生にも席に着くように指示を出した。

我々は着座部分をガムテープでべたべたと補修された丸椅子に座った。俺の椅子は脚が歪んでいて、体を動かすたびに「かたん、かたん」と音を立てた。そこで一旦立ちあがり、ぴしゃりと座面を引っぱたくと、椅子の脚は真っ直ぐになった。

男は挨拶をした。

「私は弊社の人事部人事課で採用担当をしている〈猫に小判〉です。入社以来この浦安の地でネズミ駆除に明け暮れてまいりました。本日はどうぞよろしく。ではそちらの方から自己紹介をお願いします」

男子学生が大きな声で云った。

「はい。私は〈二十一世紀アルバイトリーダー〉と申します。よろしくお願いいたします」

女子学生がこれもまた馬鹿でかい声で云った。

「私の名前は〈クイーン・エリザベス号の救命ボート〉です。よろしくお願いいたします」

俺はネクタイを必死になって結わえながら云った。

「チェリー・ブロッサムです」

「えー、それではですね、学生時代にどのような活

動をされてきたのか、お一人ずつお話しください」
俺たち学生は目くばせをして、誰が先陣を切るのかを探り合った。最初に声を出したのは男子学生の〈二十一世紀アルバイトリーダー〉だった。
「私が力を入れたことは戦争です」と彼は誇らしげに語った。
「ＳＮＳで百二十人の同志を募って中東に渡り、高いコミュニケーション能力を活かして現地のアメリカ軍と交渉し、銃と弾丸と十二台の戦車を確保しました。私は持ち前のリーダーシップを駆使して最前線で部隊を率い、イスラム過激派から八つの都市を奪還し、百二十万人の市民を解放しました」
〈猫に小判〉は七福神の大黒天のような笑顔で首を縦に振りながら話を聞き、紙の上にペンを走らせた。
続いて女子学生の〈クイーン・エリザベス号の救命ボート〉が話を始めた。
「私が取り組んだことは霊的対話です」と彼女はやはり誇らしげに語った。
「インドのリシケシュにある僧院で半年間のインターンシップを行い、死者の霊と対話する能力を身につけました。それからイスラエルに渡り原始キリスト教の預言者たちと霊的対話を重ね、現在流布しているマタイ福音書に決定的な写し間違いがあることを発見し、教皇から感謝状を賜りました」
面接官は繰り返し大げさに頷いた。頷くというよりも体を軸にして頭を振り回すというほうが適切かもしれない。首がもげる恐れがあるので、なんとかして止めさせたほうがよいのではないだろうか。そんなことを考えているうちに俺の発言する番が回ってきた。
「えーっと、あ、これだこれだ」
俺は表紙にチェブラーシカのイラストがついた手帳を取り出し、あらかじめ準備してきた回答を読みあげた。
「私はダンゴムシの飼育に尽力しました。大学の一年次にベランダで拾ったダンゴムシを三年かけて体調一メートルにまで育てあげ、知性を芽生えさることにも成功しました。私の飼育記録は『ネイチャー』と『ナショナルジオグラフィック』に掲載され、大きな反響を呼びました。私はこの経験を通してダンゴムシの可愛らしさに気づくとともに、自然の逞しさを思い知らされました」
「チェリー・ブロッサムさん、そのメモ帳はなんですか？」と〈猫に小判〉が訊ねた。
「チェブラーシカです。ネズミじゃありませんよ」と俺は答えた。
〈猫に小判〉の顔からは、先ほどまでの笑顔が跡形もなく剥がれ落ちていた。

二人の学生は床を見つめて沈黙している。
俺はメモ帳をポケットにしまい、とっさに弁解をしたが、面接官の目線はもはや俺には向けられていなかった。彼はまたあの気色の悪い笑みを顔にぶくぶくと浮かべ、男子学生に次の質問を繰り出していた。
「同時多発テロは本当にアルカイーダによって実行されたのでしょうか？　あれはアメリカ政府の陰謀なのではないでしょうか？」
その後の面接は退屈極まりない時間となった。面接官がまったく俺に質問をしないのだ。俺は仕方がないので、首を高速で動かす〈猫に小判〉に向かい、「ネズミになあれ、ネズミになあれ」と念じることにした。
「ネズミになあれ、ネズミになあれ」
〈猫に小判〉はこの場に俺という人間が存在しないかのような空気をこしらえて、嫌に上機嫌な態度で他の二人に話を振っている。
「ネズミになあれ、ネズミになあれ」
俺は拡声器を通してがなり立てた。
「ネズミになれ！　ネズミになれ！　ネズミになれ！」
面接が佳境に差しかかったころ、俺の呪いはついに効力を発揮した。
「私はいつでも気のおもむくままに、自分の心臓を止めたり動かしたりすることができます」と〈クイーン・エリザベス号の救命ボート〉が云い、〈猫に小判〉が頭を振りかざした瞬間、どこからともなく出現した白い煙に彼の全身が包まれたのだ。二人の学生はぎょっとして俺を見た。
「ＰＯＮ！」という赤い破裂音とともに煙が星になって飛び散ると、面接官の姿は雲散霧消して、安楽椅子の背もたれの上にネズミがちょこんと乗っていた。
ネズミは小さな手足を動かして安楽椅子を下り、机の下をくぐり抜け、俺たちの前にやって来た。我々がしゃがんで顔を近づけると、後ろ足で立ちあがり、「チュー」と鳴いた。
「かわいい！」と〈クイーン・エリザベス号の救命ボート〉が手をあげて云った。
「これは驚きましたねえ」と〈二十一世紀アルバイトリーダー〉が肩をすくめて云った。
俺はネズミの尻尾を摘まんで持ちあげ、ゆらゆらと揺らしてみた。ネズミはひょこひょこと首を振って嫌がった。〈クイーン・エリザベス号の救命ボート〉が指先でネズミの腹を突っついた。
「さっきの話は本当ですか？」と俺は二人に訊ねてみた。

「冗談ですよ」と〈二十一世紀アルバイトリーダー〉が頭を掻きながら云った。
「本当は三つの町を取り返しただけです」
「私も話を盛ってしまいました」と〈クイーン・エリザベス号の救命ボート〉が目を細めて云った。
「教皇から頂いたのは感謝状ではなくて、チョコレートのメダルだったんです」
「これは驚きましたねえ」と〈二十一世紀アルバイトリーダー〉は肩をすくめて云った。
俺はネズミをジャケットのポケットに収めると、手持ち無沙汰な様子の二人に別れを告げた。待合室を通り、迷路を来た道とは逆に辿り、一階まで迷わずに下りた。エントランスを小走りに通過する間、受付の女が身を乗り出して、ずっと俺の右足を見つめていた。記憶が正しければ、先に話した女とは違う女だった。俺は右足に女の執拗な視線を感じながらビルディングを出た。
おびただしい数のネズミたちに見あげられながら舗道を歩き、貨物コンテナの立ち並ぶ区域にやって来た。この辺りには海からのやさしい風が吹いていて、ほのかに潮の匂いがしていた。俺はネズミを手のひらに乗せ、野良ネズミとして生きる術を諭してから、コンクリートの地面に放してやった。
「さようなら」と俺は云った。

ネズミは「チュー」と鳴いてコンテナの裏に走り去った。それは現代ドブネズミ語で「桎梏から解き放たれた喜び」と「自由の刑に処された苦しみ」の、相反する二つの意味を併せ持つ言葉だった。人間のものとは違って、ネズミの言語は複雑なのだ。

五

五・一

長身の郵便配達人が部屋を訪れて、白い封筒を手渡した。差出人は大学の事務室だった。俺は〈板垣退助の髭〉の背中磨きを中断し、中に入っていた手紙を広げた。

宇宙芸術学部　四年一組五〇二番
チェリー・ブロッサム殿
貴殿は三ヶ月分の授業料を滞納しています。
令和三年五月十一日（火）までに、裏面記載の指定口座へ納付してください。
期日までに納付されない場合、学則に基づき**除籍**となります。
学長　六大学野球

俺は大慌てでトイレに駆けこみ、壁に貼られた「ナイアガラの滝フォトカレンダー」に顔を近づけた。そして支払期日までわずか二日しか残されていないことを知るやいなや、便器の蓋を跳ねあげて嘔吐した。

俺は過呼吸状態に陥りながら部屋中を這いずり回ってお金を探した。戸棚を下から一つずつ開けて中を漁り、本棚の本を一項ずつめくって確認し、ベッドを持ちあげてその下を覗き、〈板垣退助の髭〉の甲殻の隙間を一か所ずつ点検した。しかしお金は一銭たりとも見つからないばかりか、街中の天婦羅屋の請求書が束になって現れた。

悲哀と絶望とがたちまち俺の胸を襲った。俺は座布団に顔を埋めて泣いた。先月にアルバイトを辞めたのが間違いだったと後悔した。不意に、啓示のように、大学の入口に掲げられた金言が思い出された。

地獄の沙汰も金次第

ゴミ置き場からリヤカーを転がして来て、部屋中の絵画と書籍を掻き集めた。

「気にすることはない」と俺は自分に云い聞かせた。

「またいつだって取り戻せるさ」

汗だくになりながら、集めたものをどかどかとリヤカーの荷台に載せていく。全て積み終えると、天井に届くほどの高さの絵と本の山ができた。絵と本のなくなった部屋は淋しかった。本棚と本棚と本棚と本棚は泣いて泣いて泣いて泣きまくった。空っぽの部屋を目の当たりにした〈板垣退助の髭〉は驚きのあまり、

「ギュルギュル！」と鳴いた。

俺はリヤカーのハンドルを腰に当て、街へ向けて出発した。

それはずいぶんと遠い道のりだった。住宅地を通り、ビルディングの谷間を抜け、いくつもの橋を渡り、行商人のようにのろのろと進んでいく。下り坂ではリヤカーが加速しすぎないように心がけ、上り坂では力を振り絞って押しあげる。部屋を出てから街に着くまでの間に、俺の頭の上ではウズラが巣を作り、卵を産み、雛が孵り、何事もなく巣立っていった。

街の外れに、通りを挟んで画廊と古本屋が向かい合っている。俺は頭からウズラの巣の残骸を払い落とし、まずは画廊を訪ねることにした。

「ごめんください！　絵を買いとってくださいな！」

「ではお手並みを拝見いたしましょう」

画商はリヤカーの前に立って俺の描いた絵を大雑

把に鑑定した。ところが絵を一枚見るごとに口を「へ」の字に曲げて首を横に振る。それを幾度か繰り返したのちに、吐き捨てるようにして云った。

「失礼ですが、才能のほとばしりを感じませんな」

「この絵などはどうでしょうか？」

「サルにしては首が長すぎますね」

「お言葉ですが、これはサルではなくキリンです」

どんなスタイルの絵を見せても画商は食指を動かさない。いよいよ俺はシルクのベールを剥がして渾身の一作を開陳した。それはあの尾形光琳作の近世日本美術の至宝『燕子花図』に着想を得た一品で、燕子花の代わりにパイナップルを豪勢に並べて描いた屏風絵だった。

「ひどいですねえ、これで画家を目指すなんて正気の沙汰じゃありませんよ」

画商はもうお手上げだというふうに、手のひらを天に向けて微笑んだ。

俺は激しく嗚咽しながら涙を流した。すると、どういう風の吹き回しか、とうとう口の中からパイナップルがまるまる一玉、飛び出した。パイナップルは画商の足元に転がり、黄色い声で「おぎゃあ！」と泣いた。

「おお！　なかなかチャーミングなパイナップルですな！」

画商はいたくお気に召したらしく、パイナップルを拾いあげて口づけをした。

「気に入りました。買いとらせていただきましょう」

続いて向いの古本屋に乗りこんだ。

「ごめんください！　本を買いとってくださいな！」

「ずいぶんとたくさんありますね」

古本屋の主人は窓の外のリヤカーを見るなりそう云った。彼はラジオのお悩み相談を聞きながら、本のページをちぎってくしゃくしゃと頬張っている。

「お見積もりに半年はかかりますよ」

とんでもないことだ。半年もあれば滞りなく大学を卒業してしまう。

「そこをなんとか、今日中にお願いできませんでしょうか」

俺は、口の中から定期的にパイナップルが飛び出すという世界でも症例の少ない難病を患っており、今日中に治療費を確保できなければ気が狂って海に身投げをすることになるだろう、と涙を流しながら話した。

「それはそれは」と店主は涙を流しながら云った。「さぞかしお辛いでしょうに。さっそくお見積もりをいたしましょう」

俺は所有する本のほとんどを売らなければならなかった。『本など読むな、バカになる』も、『私はバ

カになりたい』も、それからあのシャガールのフランス版画集も売らなければならなかった。しかし新編日本古典文学全集の『枕草子』だけはどうしても手放すことができなかった。本の厚みが枕にするのにちょうどよいからだ。

本たちが俺に泣きつくので、店主も俺も彼らをなだめるのに手こずった。

「泣かないでください！　もっと素晴らしい読み手が現れますよ！」

「そうだよ。俺よりもずっと賢明な読者がね。そいつはきっと俺みたいに飛ばし飛ばしに読んで満足したり、一文字も読まずに壁に飾ったり、ページをちぎってコラージュの材料にしたりしないはずだよ。だからそんなに悲しまないで！」

俺は脚に這いあがってこようとする本の群れを床に押し戻した。

店長は迅速に本の価値を検めて見積もりを出してくれた。それは滞納していた学費の支払いを済ませても、お釣りで千島列島を南から順に一つ残らず買収できるほどの金額だった。俺は札束で膨らんだ財布をズボンのポケットにねじこんだ。

絵画を積んだリヤカーを引いて帰る道すがら、俺の通った経路には、まるで異国の道しるべのように、等間隔にパイナップルが転がっていた。

五・二

その夜、すごく悲しい夢を見た。〈板垣退助の髭〉が死んでしまったのだ。

俺は部屋の前を流れる河に〈板垣退助の髭〉の死骸を流した。すると死骸は「ギュルギュル」と鳴きながら河を下っていった。俺は不安になって、河口監視員に電話を掛けた。

「ダンゴムシが流れていきませんでしたか？」

「たったいま、流れていきました」

「生きていましたか？」

「死んでいました。溺れたのでしょう」

そこで目を覚ました。

「夢の話なんて、つまらないな」

次の日の朝、大学の図書館でモンブランはそう云った。彼女は鉈の刃にべっとりとついた血液を、トイレットペーパーで一心不乱に拭っている。ようやく彼女にお金を返すことができたので、俺は胸をなでおろした。

六

森駈けてきてほてりたるわが頬をうずめんと
するに紫陽花くらし[5]

六・一

六・一・一

「ぼくちんは〈たぬき〉だよ。よろしくね！」とその白いウサギは云った。コーディロイのチョッキを着て、手首にシチズンの腕時計を巻いている。

「あのかわいい女の子はだれ？」

〈たぬき〉はモンブランを指さして云った。

「まさか、……あの有名な、アリス？」

モンブランは車道の真ん中で、横たえたザックの上に座り煙草を吸っていた。彼女の後ろには旧国道の打ち捨てられたトンネルが口を開けていて、その黒々とした広がりは、彼女の小さな体を飲みこんでしまいそうに見える。

俺はつい先日に『ヤフーニュース』で仕入れた情報を教えてあげた。

「アリスは認知症で施設に入れられているんだ」

「にんちしょうってなに？」

「簡単に云うとね、みんなの名前を忘れちゃうことだよ」

「名前を忘れるとどうして施設に入れられちゃうの？」

俺はズボンのポケットに手を入れた。

「どうしてだろうね」

モンブランが俺たちの側に来た。

「ねえ〈たぬき〉ちゃん、私たちの道案内をしてくれない？」

こうして俺たちは〈たぬき〉というウサギに道案内を頼むことになったのさ。

六・一・二

我々はすぐに〈たぬき〉を連れてきたことを後悔した。

ひどくやかましいのだ。

〈たぬき〉は自分の足で歩きたくないと駄々をこねるので、じゃんけんに負けた俺が抱えて運ぶことになってしまった。

「ぼくちんはこの辺りのことならなんだって知ってるよ。ぼくちんをガイドに選ぶなんて、人間にしてはいいセンスしてるよね。ああ！　道はそっちじゃないよ！　もう一つ先の分岐だよ！」

俺は〈たぬき〉をモンブランに放り投げた。

「やめて」と云って彼女は俺に投げ返した。

「わーい！　でもどうして山に登るの？　そんなに暇なの？　やっぱり人間って馬鹿だよね。山に登るなんて馬鹿だよ。馬鹿ちんだね！　ちょっと、耳を引っぱらないで！」

俺は再び〈たぬき〉をモンブランに投げた。モンブランはとっさに見事なレシーブをして打ち返して

きた。

〈たぬき〉は我々の間をバレーボールみたいに行ったり来たりした。その間にも彼はのべつまくなしにしゃべり続けた。あんまりしゃべりまくるものだから、夕食のメインディッシュがウサギの丸焼きに決まった。

我々は〈たぬき〉の案内に従って舗装路の終わりまで来ると、登山靴の紐を縛って山道に足を踏み入れた。

見通しのよい広葉樹林の中を、道はゆるやかに曲がりながら伸びている。

「いいかい」と俺は〈たぬき〉に苛立ちをぶつけた。「それ以上しゃべると、おまえをさばいて食べちゃうからな」

〈たぬき〉はばったりと地面に倒れて気絶した。

「クマに会えるかな？」とモンブランが云った。

「もう動物はたくさんだ」と俺は答えた。

我々は新緑に誘われるようにして林の奥へと分け入った。木の葉が光に洗われてひるがえり、エメラルドグリーンの木漏れ日が辺り一面に散らばっている。その光は木々の間を行く我々の体に沿って水のようにゆらめいた。

水の流れる音が近づいてきた。やがて楡の木に囲まれた、ささやかな沢の流れる河原へ出た。我々はしばらく休むことにした。木々は疎らで、せせらぎはかがやき、ウグイスが鳴いていた。その鳴き方は東北地方のウグイスどもによって発明された新手の歌唱法で、各音節にロングトーンのビブラートを響かせることを特徴としていた。

テントを積んだザックを地面に下ろすと、汗ばんだ背中に爽やかな風を感じた。俺は沢の水に指先を浸した。水は冷たかった。水を手のひらに掬って飲んだ。水は岩の間を流れ、野や街を抜け、大きな渦を巻く河となって、モンブランの瞳の中に広がる傾いた海に注いでいた。

モンブランは苔生した倒木に腰を下ろし、神戸屋の「ミルクフランス」をちぎって〈たぬき〉に与えていた。

「将来どんなところに住みたい？」と彼女は云った。

「庭と縁側のある家がいいな」

俺はエイワの「ホワイトマシュマロ」を噛みながら云った。

「大きな日本家屋だよ」

「私はどこか遠くで暮らしたいな」

「どうして？」

「私、先生を目指しているでしょ？　だからもし先生になれたら、どこでも好きな土地の学校で働くことができるの」

「どこでも！」と〈たぬき〉が口を挟んだ。
「でもね、本当は遠くでなくても構わないんだ」
モンブランは水の流れを見すえていた。
「私はいつも遠い場所に向かっているような気分で暮らしたいの」
「それはね、誰もが同じだよ」
「ねえ、どうして先生になるの？」と〈たぬき〉が訊ねた。
「生徒たちを虐めてやるんだ」
彼女は恍惚とした表情で云った。
「黒板消しで顔を引っぱたいたり、廊下を舐めさせたり、紐で縛って校庭を引きずり回したりしてやるの。楽しいだろうなあ。しごき甲斐のある子供たちに、たくさん会えるはずよ」
俺はザックから小分けになったギンビスの「たべっ子どうぶつ」を二つ取り出して、一つをモンブランに渡し、もう一つを〈たぬき〉に投げた。
「ありがとう」と云って、彼女は「たべっ子どうぶつ」の袋を開けた。〈たぬき〉はパッケージを一目見た途端、気味が悪いと云って沢に捨てた。
我々は沢を離れた。
やがて森が深くなり。登山道が不明瞭になった。我々は濃い藪の茂る急斜面に囲まれた窪地にいた。稜線に上がるには、この斜面のどこかにある道を登らなければならない。
「おかしいな。地図には道が描いてあるのに。どこかで間違えたのかな」
俺は斜面を見あげながら歩き回り、地形図上の道を探したが、それらしいものは見つからなかった。現在位置の判断を間違えているか、道が消失してしまったかのどちらかに違いない。沢まで引き返そうと云いかけた時、〈たぬき〉が、
「ここから登れるよ」と云って斜面の一部を示した。そこは方角としては正しいものの、他の部分と変わりない、藪に覆われた急斜面だった。俺にはそこに道が拓けるとは思えなかった。
「こんなところ、ほんとうに登れるの？」
「ぼくちんを信じてほしいな」と〈たぬき〉は云った。
「たしかに、一直線に登れば必ず稜線には出られるね」とモンブランは云った。
「〈たぬき〉を信じてみましょう」
彼女は黒いノースフェイスのレインジャケットを羽織ると、ザックのサイドポケットから鉈を引きぬいた。俺は地形図をポケットにしまい、軍手をはめた。〈たぬき〉は俺のザックのウエストベルトに引っついた。
モンブランが斜面に取りついた。俺はその地点に

生えていた木の枝に、目印の赤いリボンを結いつけた。

斜面に鬱蒼と生えた藪は幹や枝が硬く、我々の胸ほどの高さがあった。モンブランは体全体で藪を押し倒し、行く手をさえぎる枝を鉈で叩き落としながら前進していく。俺はそのすぐ後ろを追いかけた。藪についていた朝露が体にまとわりつく。〈たぬき〉は濡れないように俺のお尻にしがみついている。斜面が急角度になり、ザックの重みが体全体に圧しかかる。植物が足に絡みついて転びそうになる。

モンブランは道を切り拓きながら、信じられないような速度で登っていく。鉈で枝を絶つ子気味のよい音が頭上から下りてくる。俺は斜面に這いつくばりながら、彼女の姿を藪の向こうに何度も見失いかけた。背の高い植物が増え、視界が閉ざされた。むせかえるほどの湿り気に包まれて、粘着質の圧迫感が喉元に迫ってくる。意識が行為に溶け、行為が意識に溶けていくようだ。頭の上でモンブランが云った。

「そこ、気をつけて」

俺は激しい息切れを起こしながら、大きな岩をやっとの思いで乗り越えた。

ようやく藪が薄く傾斜の緩い場所に出た。我々はザックを下ろし、転がらないように慎重に木の根元に預けた。俺は木の枝にリボンを結んだ。

しばらくの間、モンブランは膝を抱えてぐったりとしていた。彼女の周りには金鳳花がたくさん咲いていて、日射しがいくつもの筋になって注いでいた。ザックから水を出して飲ませようとすると、彼女は物憂げに手ぶりで断った。我々のレインウェアは露をまとって艶を帯びていた。〈たぬき〉はチョッキをねじって水を絞り出している。辺りには濃密な草の匂いが立ちこめていて、そのどうしようもなく気だるい匂いは、我々の体の隅々にまでぐっしょりと染みこんでいた。

突然、銃声が響いた。一発、二発と立て続けに。

それから弱々しい動物の鳴き声と、人間のものとはっきりわかる、無遠慮な足音が聞こえた。

我々はじっと動かずに、藪の向こうの物音に耳を澄ましていた。草木のざわめきが風に乗って頭上を渡り、陽気な口笛が耳に届いた。

やがて狩人の口笛は遠ざかり、世界は静かになった。

我々は顔を見合わせて笑った。

「びっくりした！」とモンブランは云った。

俺は心臓の辺りを手で押さえた。

「蝶を飲みこんじゃったよ。この辺で羽をバタバタさせているんだ」

〈たぬき〉はひっくり返って意識を失い、手足をひくひくと痙攣させている。

我々は再びザックを背負った。

〈たぬき〉は斜面をつづら折りに登るように指示を出した。彼の云う通りに進んでいくと、はっきりとした獣道が現れて、藪と格闘する必要がなくなった。それでも俺はザックの重量に打ちひしがれそうになっていた。足腰にずっしりと応える重さだ。頭がぼんやりとして、前を歩くモンブランの姿が大きくなったり小さくなったりした。彼女は立ち止まって俺を顧みた。

「大丈夫？」

「うん、気にしないで……」

「もうすぐ稜線に出るよ」と〈たぬき〉が胸元で云った。

「ほら、その斜面の上だよ」

獣道が途絶えた。モンブランは細い針葉樹の立ち並ぶ斜面を軽やかに登った。俺は四つん這いの姿勢をとり、転げ落ちないように慎重に斜面を這いあがった。地面が急激に明るくなり、周囲から高木が消えた。

六・一・三

我々は尾根に出た。

かがやかしい雪渓を残した若緑の山脈が、深い陰影を抱いて果てしなく広がっていた。空気は澄んでいて、遠くまで見晴るかすことができる。草原に覆われた稜線が丸みを帯びたうねりを見せて、どこまでも延々と続いている。遠くの山脈は白みがかり、近くの山並みは鮮明だった。

我々の立つ尾根は一面の湿原地帯になっていた。ゆるやかな湿原が、雲の影を茫洋と映したり、風の描く波紋にさざめいたりしている。その所々にある池塘が青い水を湛えている。

〈たぬき〉は俺の腕から飛び下りて、山頂へと続くなだらかな湿原を駆けあがっていった。遠く離れても、白い体が緑の丘をひょこひょこと飛び跳ねるのがよく見えた。

湿原の中腹に、赤い三角屋根をふかれた小屋が建っていた。

我々は朽ちた木道の残骸を辿って小屋へ向かった。登山靴は湿原の水でびしょ濡れになった。足元には紫色の小さな花が咲いていたので、踏まないように気を配って歩いた。

小屋は丁寧に木張りをされた小奇麗な外観をしていたが、屋根も壁も明らかに色あせており、建てられてから長い年月を経ているようだった。屋根の上には錆ついた風見鶏が乗っていて、湿原の下から吹

きあがる風を受けてカラカラと回っていた。
「小屋があるなんて知らなかった」と俺は呟いた。
「地図にも描かれてなかったと思うけど」
「古い小屋だよ。もう使われてないんだ」と〈たぬき〉が云った。
モンブランは小屋の周りを一周してから、染みだらけの窓を覗いた。
「番人はいないみたい」
俺は引き戸を開けて小屋の中に踏み入った。八畳ほどの床に、テーブルが一つと椅子が二つだけ置かれている。その他の調度はなにもない。俺が歩くと、床からは埃がうっすらと立ち昇った。
我々は小屋の中にザックを置き、光と風の流れる湿原を散歩した。
モンブランは生け花に使うための花を摘みに行った。歩き回って疲れた俺は、小高い丘の上に生えている白樺の木の側に座って、〈たぬき〉と話をした。
「さっきから気になっていたんだけど、背中にあるこのチャックはなに？」
俺が〈たぬき〉の首についたファスナーの引き手のようなものに触れると、彼はピクリと体を震わせた。
「なんでもないよ！」
〈たぬき〉が逃げ出そうとするそぶりを見せたので、俺は首根っこを押さえてチョッキを剥ぎとった。そして首から背中まで伸びたファスナーを開け、中に収まっていた茶色い生き物を引っぱり出した。それは小さなタヌキだった。俺は右手にタヌキの首を掴み、左手にウサギの着ぐるみをぶら下げたまま、しばし呆然としていた。
「恥ずかしい！　穴があったら入りたいよ！」とタヌキは云った。
「ぼくちんは実はタヌキなんだ。それに、本当の名前は〈うさぎ〉っていうんだ。嘘をついていて、ごめんね」
「謝ることはないよ。でもモンブランは嘘や偽りを許さないだろうから、彼女の前では隠し通したほうがいいかもね」
「そうするよ。ありがとう」
〈うさぎ〉は再びウサギの着ぐるみに身を包むと、俺に体をすり寄せて云った。
「ぼくちんお腹すいちゃった。今日の晩ごはんなに？」
「タヌキの丸焼きだよ」
モンブランが色とりどりの花々を抱えて駈け寄ってきた。
「ねえ、そろそろ食事にしない？」

六・一・四

太陽が大あくびをして傾き、西の稜線が赤く光りはじめた。湿原の面はこれからゆっくりと暗くなっていく。

我々は小屋の中でランプを灯し、ラジオの局を気象通報に合わせた。ざらざらとした男の声が読みあげる日本各地の気象情報を、天気図用紙に書き写していく。高気圧を青鉛筆で、低気圧を赤鉛筆で描き、その周りに数本の等圧線を引く。このようにして、明日の天気を予測するのだ。俺はラジオの電源を落とし、二人の描いた天気図を見比べた。

「モンブランは丁寧だね」

「せいぜい九十点ってところかな」

モンブランは満更でもなさそうに云った。

「明日も晴れるね」

俺は天気図用紙を畳み、鉛筆やラジオとともにテーブルの端にどけた。モンブランは両手でカップを持ちあげて、紅茶をすすった。〈うさぎ〉は彼女の膝の上ですやすやと眠っている。俺はトランプを切り、カードの半分を彼女の前に置いて云った。

「ハイ&ローをやろう」

モンブランは云った。

「〈たぬき〉を起こさないように、ね」

窓から水平に射しこむ夕日が埃を浮かびあげ、テーブルの上に届き、静かに置かれた我々の手を茜色に染めていた。

六・一・五

夜は更けていた。俺は白樺の巨木の根元に座り、涼しい空気に身をさらしていた。その空気は夜の底にある見えない谷で生まれ、俺の見おろす湿地帯の斜面をしんしんと昇ってくるのだ。湿原は俺の背後からさえざえと広がり、遠くに黒く横たわる山並みに溶けている。その広大な闇に点在する池塘には、それぞれに小さな銀色の星空と、鋭い三日月の破片が閉じこめられている。

俺は地形図を筒状に丸めて望遠鏡を作ると、左目に当てて星空を覗き見た。そしてギンガムチェックのハンカチーフをふわりと空に広げ、春の大三角に囲まれた一群の星々を採取すると、水を汲んだナルゲンボトルの中へ落とした。星々は水中で煙となり、粒子がぱちぱちと弾け、きらきらと泡が立った。俺はそれをごくりと飲んだ。爽やかな香りが口から喉にあふれ、蒸留した水銀の味が舌に残った。俺は体の奥へ冷たく沈む星々のささやきを聞いていた。次いで望遠鏡を覗いたまま、ナイフで三日月の先を削りとろうとして止めた。三日月は味が悪く、とても食べられたものではないからだ。[6]

湿原を昇る空気は冷たさを増していた。俺の体は芯まで冷えきって震えていた。湿原の下方に、真っ赤な炎が火花を放ちながら激しく燃えている。その炎はとても離れた場所に、はるか彼方の谷の底にあるように感じられる。あそこでみんなが焚火をしているんだな、と俺は思った。彼女もあそこにいる。なにも心配することはないんだ。

俺はかじかんだ手でザックからガスバーナーと燃料缶を取り出し、かっちりと繋ぎ合わせた。つまみを回すと、つんとしたガスの匂いが鼻をついた。マッチを擦って火を灯し、バーナーの先端に近づける。金属の口からオレンジ色の炎が鈍い風音を立てて立ちあがり、わずかに膨らんでからコバルトブルーに変色した。

煙草に火をつけて口にくわえると、白樺の根元に寄りかかり、ザックのかたわらで膝を抱えた。バーナーの炎は間近で燃えていたが、暖をとるには火力が弱すぎた。湿原の果てに見える焚火は小さくなっていった。おかしいな、と俺は考えていた。どうしてあの炎はだんだん遠ざかっていくんだろう。どうして俺の体はこんなに震えているんだろう。……ひどい寒さだ。それに無性に気分が悪い。胃がむかむかする。さっき星を飲みこんで、食あたりを起こしたのかもしれないぞ。ああ、星なんて食べるから駄目なんだ。〈うさぎ〉が云ったとおりだ。俺はなんて馬鹿なんだろう。

モンブランが俺の隣にしゃがんで、バーナーの炎に両手をかざしていた。我々の体には炎の反射が赤くたゆたっていた。

「そういえば」と俺は猛烈な胸やけを堪えながら云った。

「月はチーズでできているんだよ」

モンブランは恥ずかしそうに笑った。

「知ってるよ。『天体論A』で習ったじゃない」

「それじゃあ、火星がなにでできているか、知ってる？」

モンブランの眼鏡の丸いレンズに、青く燃える炎のゆらぎが写っている。

「火星はね、チョコブラウニーでできているんだよ」

「そんなの常識じゃない！」と彼女は云うのだった。

「私なんて、産まれる前から知ってたもんね！」

東の山際がようやく白くなった。湿原地帯の果てに、淡く色づいた横雲が、夢のなごりのようにたなびいている。横雲はほの暗い山の背に吹きつけられ、散り散りになって、光をはらんだ明け方の空へ流れていく。

ふらふらとザックを担ぐと、首から下げていた紐がちぎれ、コンパスと笛が草の上に落ちた。湿原に

は紫色の花が一面に咲き、池塘が金色に輝いていた。風は一帯をゆるく動いていた。俺は朝露に濡れた草を踏みしめながら、紫にそよぐ湿原を下って行った。朝日に照らされた丘のふもとで、春の少女が手を振るのが見えた。

六・二

街へ帰った翌日、俺は表通りの真ん中に寝そべって休憩をしていた。息も絶え絶えの体たらくで、ひどいだるさに襲われていたのだ。俺のシャツやズボンはボロボロに擦りきれていた。

通りには誰もおらず、物音ひとつしなかった。影という影は窓の中に消えてしまい、白く乾いた建物が、古代建築の静けさで通りに沿って並んでいる。中天に燃える太陽の周りを、地表の獲物を狙うかのように、二羽のカラスが旋回している。

汗がだらだらと出てくる。俺はコーラのペットボトルのキャップを外し、中身を喉に流しこもうとした。しかしコーラは唇を反れてこぼれ、泡立ちながら頬や首元を濡らした。べとべとになった顔の横を、尺取り虫がえっちらおっちら這っていく。息を吹きかけると、動きを止めて、体を縮めたままぐらぐらと揺れた。それがなんだかおかしくて、にわかにクスクスと笑みがもれた。

俺は空になったボトルを地面に立てると、再び移動を開始した。

それにしても、この春という季節はどうにも好きになれない。妙に体が重くなったような気がするからだ。というよりも、重くなっていることは疑いようのない事実なのだ。いまでは通りを移動したくても、かつてのように二本の足で立ちあがることができないし、歩いていくなんて夢のまた夢だ。俺は大学図書館まで続く長く入り組んだ道のりを、匍匐前進をしながらじりじりと這って進まなければならなかった。

［脚注］

1　『月刊ラビット 2021 年 2 月号』アニマル書房 (2021) P. 15

2　『オリーブ 155 号 3 月 3 日号』マガジンハウス (1989) P. 98

3　正解「1ムーン・ドルは実は消えていない」

4　幸田露伴『努力論』岩波書店 (2001) P. 168～169

5　寺山修司『寺山修司全歌集』講談社 (2011) p. 98

6　「全種類の月を食したアメリカの料理研究家スタンリー・ルーカス氏は、生前にこう語った。『満月は上質なモッツァレラチーズの味がします。上

弦の月はトカゲの卵巣、下弦の月はヘビの睾丸の味がします。三日月は如何なる理由があろうとも、決して口にしてはなりません』氏は三日月の味にまつわる質問に対し、生涯を通じて口を閉ざし続けた」一川真『宇宙時代の食事と性愛』川崎書院（1999）P.102

「水死体」

永田　八重

■受賞のコメント■

この度私の作品が佳作に選出されたこと、嬉しく思うと同時に非常に驚いております。それというのもこの作品はぎりぎりの状況で書き上げたものだったからです。最初に考えていたプロットでは話のつじつまが合わなくなり締め切り二週間前にしてすべて消去するといったハプニングが起き、それにより急遽全く違う話を作らなくてはならなくなりました。風呂場で設定を考えながらもう書くのをやめようかとも思いましたが、一緒に応募しようと約束した友人の顔がちらついて手を止めることはできませんでした。結局書き終えたのは締め切りの日の朝五時でした。半ばやけになって書き上げたばかりの原稿を印刷し郵便局に持って行った後も我に返りなぜあんなものを応募できたのだろうと後悔してしまい、努めて忘却しようとしていました。

これらの苦労は全て私の常日頃の怠惰が招いたことではありますがこんな自分が一つの話を最後まで書くことができるとわかっただけでも挑戦した意味はあったと思います。

最後になりますが明治大学連合父母会様をはじめとしたこの賞に関わる全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

水死体

序

「どざえもん」という言葉は、それが表すものとは裏腹に存外かわいらしい響きをしている。

少年は川面にぷかぷか浮かぶそれを見つめながら午後の眠気をかみ殺していた。金色の髪がきらきらと輝く。

晩夏の少し柔らかくなった光のカーテンが緑の色に染められて降り注ぎ、苔むした崖と丸々とした河原石たちが孔雀の羽のような色をした水を挟んで悠然と存在していた。その中を男か女かも分らないほど腐りきって黒くなった物体が、腹に空いた穴からガスを吐き出しながら、するすると進んでいく。

美しいモノと醜いモノ。その差は歴然としていて少年を安堵させる。

突然シャーッという音がして自転車が河原の上をとる車道に現れる。キーっと派手な音を立てて停車した。

「こんなところにいたのか。爺さんが探してたぞ」

また別の少年が階段の上から自転車のスタンドを起こしながら声をかけてきた。金髪の返事がないことをいぶかしげに思ったのか、彼の視線の先を見つめ、一瞬ののち、息を呑む。とたた、と音を立てながらコンクリートの階段を降り河原に足を着けると、すっと金髪に身を寄せ隣に座りこんだ。

「人間か？」

周りにはだれもいないのに、少年は内緒の話をするようにそっと呟いた。

「たぶんな」

二人はそれ以上その物体について会話することはなかった。ただじっと寄り添って視線を逸らすことなく、ヒトの成れの果てがよく分からない液体の帯を引き連れて目の前を通り過ぎていくのをぼーっと見つめた。

太陽は未だ天中にあり、彼らの若き魂を祝福している。

I

午前七時。少し錆びたドアを開けると早朝の外気が清々しく吹き込んできた。その時、肇は一日のうち初めて息をした気分になる。どろどろとして停滞した空気が立ち込める我が家を後にして一歩外界に足を踏み出す。

カン、カン、と音を立てながら鉄でできた外付けの階段を降る。このアパートは本当にぼろくて、あちこちにガタが来ていた。階段の手すりを支える支柱も一番上のものがガコッと外れるようになっていた。このアパートに住んでいるのはもう肇と彼の母のみであった。二年前までは一階に猫をたくさん連れた老人が一人暮らしをしていたが老人が娘夫婦と一緒に暮らすと言ってアパートを出ると誰もいなく

なった。
　ド田舎でアパートに住んでいるのは大概根無し草だということを肇は肌で知っていた。そして田舎で受け入れられるためにはその土地の風習を尊重して下手に出ることが重要だということも。
　その点うちの母さんは最悪だからなあ。とため息をつく。考え方を押し付けることにかけては天下一品なのだ。
　通学路をたどっていくとすぐに川の流れる音が聞こえ始める。あのアパートに人が入らないのはこの立地もあるな、と考える。台風が来ると川があふれて一階が浸かるのだ。そのためかあのアパートには近隣の住宅というものが存在していない。
　ふと道の先にやけに目立つ金色が光るのを見つけた。
「おはよ、レオ」
「おう。おはよー肇」
　金色は肇の親友が持つ頭髪の色であった。金髪は年とともにくすんでいくものだと思っていたが、彼の金色は出会った時と変わらないように見えた。制服がブレザーだったらもっとその色が映えるだろうととりとめもないことを考える。残念ながら田舎の中学の制服なんてだいたいが学ランだったが。
　横に並ぶとレオが少し逡巡して口を開く
「そういやア明日雨らしいぞ。今年は集まんなくていいんじゃないのか」
「それでも約束は約束だ。行くよ。」
「無理しなくていい。お前のとこのお母さんが出してくんないかもしれないだろ。俺たち今年受験だから一層ピリピリしてるんだよ」
　肇が強情にその約束を持ち出すと決まってレオは悲しそうな顔をした。そしてわざと明るく話題を転換した。
「うちの母さんのことは気にしなくてもいい。高校なんてこんな田舎じゃどこ行ったってそう変わりゃしないんだから俺はレオと同じとこに行く」
　それは嘘だった。母は肇を県内で一番偏差値の高い高校に入れようとしていた。一方でレオの第一志望校は、定員割れするような学校ではないにせよお世辞にも進学校とはいえないところであった。おしゃれなブレザーの制服が人気で、肇はレオがそれを着るのをひそかに楽しみにしていた。当然母がその高校を受けるなどということを許すはずがなかったから今年に入ってから模試の点数を意図的に下げていた。そのせいで母が最近いつも以上に怒りっぽくなっているということに肇は気づいていた。
　このまま自分に興味を失ってくれればいいのに、と肇は考えていた。幼少期から続く過度な期待に彼は少々辟易していた。
　肇にとって一番大切なのは目の前の綺麗な親友で

あった。二年前のある出来事で失いかけてからその思いは一層強くなっていた。その時の記憶を薄れさせないためにも明日の約束は絶対に守らなくてはいけないものだった。

ああ、湿っぽい河蝕洞窟とダニのついた古びたソファ。それに猫と無造作に置かれたロープ！

二年前の明日と同じ日付の日、二人は新たな絆を得たのだ。その場所にその日毎年集まるというのが二人の交わした約束だった。

レオはその日終始肇を心配そうに見ていた。レオが肇の思いを不健康だと思っていて、ひどく気に病んでいることを彼は知っていた。しかし二人の関係を変えることは許せなかった。レオが自分のことを特別に思ってくれなくなったらと考えると、嫌な動悸がしてくるほどであった。

夕方になると空模様が少し怪しくなってきた。こちらを伺うレオに笑いかけながら手を一つ振り、空を仰いでこりゃ今夜は大分降るなと考えた。

家に帰ると仕事が早く終わったらしい母が待っていた。部屋の電気がついていないことに少し不気味さを感じた。

「最近成績が下がってるよね。どうしてなの」

「俺は母さんが決めた高校にはいかない」

はっきりと口に出して反抗したのはこれが初めてであった。そして、いつかは言っておかなければいけないことでもあった。

「どうして？前はそんなこという子じゃなかったじゃない」

「言わなかっただけだよ、母さん」

母がこのように肇に執着し始めたのはいつだっただろうか。はっきりしないが、幼少期の肇が記憶している彼女はもっと純粋に息子を愛していたはずだった。

「知っているでしょう？あなたは特別なのよ」

ガっと彼女は肇の肩を掴んだ。指が肉に食い込む痛みに少し顔をしかめる。

「神様のおかげで生まれた子なんだから！」

狭くて暗いアパートの一室で息子の肩を激しく揺さぶる母。外では雨が降り始めたようだ。雨音がうっすらと聞こえる。

母が肇のことを狂ったように神の子と言い始めたのは、肇が小学校に上がったころだった。母の信じている宗教は少々特殊で、周りの人間の理解を得ることができなかったようだった。引っ越してはその土地の人間に受け入れられずまた引っ越す、ということを彼らは何度も繰り返していた。

他人にその考えを否定されるたびに母は頑なになっていった。

純粋すぎたのがいけなかったのかもしれない。今振り返ってみると母はそれまで自分の考えが否定さ

れるという経験をあまりしたことがない人物のように思えた。

とっ……とっ……

シンクにちゃんと締めきれなかった蛇口から漏れ出た水滴が落ちる音が空々しく響いた。

肇は母の血走った目を見つめ続けた。数秒にも数分にも感じる時間ののち、

「そう、分かってくれないのね」

母はやけに気の抜けた声でぽそっと呟いた。

ぱさり、と伸びた前髪が耳から滑り落ちて彼女の表情を隠した。

「あの子がいけないのね。あの金髪の子。あなたが言うことを聞かなくなったのはここに越してきてからだもの。あの子のせいであなたがどれだけ害されたか！」

突然がばっと顔を上げると早口でまくし立てると、掴んでいた肩をぱっと離して、母は立ち上がった。

肇は混乱していた。金髪？レオのことか。母は彼に何をしようとしているのだろうか。

彼女は足早にリビングを抜けるとキッチンに行きシンクの下の戸棚を開き、肉切り包丁を手に取った。

ここにきて肇にも状況が分かった。母はレオに何かしらの危害を加えようとしている。戦慄した。二人は最初成績の話をしていたはずだった。だがいつの間にか母の中ではいうことを聞かなくなってしまった、母の思い通りに動かなくなった、肇の話になっていた。

母にとって肇は最後の味方だったに違いない。そんな彼が自分の知らないところで成長し、さなぎから羽化した蝶のように自分のもとから去っていく感覚がひどく恐ろしかったのだろう。

しかし、肇が感じたのは、母の執着に対する憐憫ではなく、母が金髪の友人を傷つけるかもしれないことへの怒りであった。

母は大きな包丁を持ってアパートのドアを開けた。小雨交じりの風が室内に入り込んでくる。

「母さん！」

肇は急いでドアまで走り母の左手を掴んだ。

「離して。私は行かなくちゃならないの。肇ちゃんの目を醒ましてあげなくちゃ。」

「そんなこと必要ない！包丁を離せ！」

二人は屋根のない階段で互いに掴み合った。母の左手はうっ血し、肇の頭髪は数本ぶちぶちとちぎれた。細かい雨粒が二人の体を絶え間なく濡らした。

一際強く肇が母の手を引いたとき、雨に濡れた金属の板に滑って彼女の体がバランスを失った。彼女が咄嗟に掴んだのは、一番上の段の手すりの支柱だった。

がこっ
「へ？」
間抜けな音を立てて支柱が外れると、母の体はいとも容易く空中に放り出され、ごんっごんっと音を立てながら、階段を数回ゴムまりのように跳ね、地面に転げだされた。
じんわりと母の体から漏れ出た体液が泥水と一緒になって土を湿らせていくのが見えた。
キーンという耳鳴りがしてなぜだか頭がスーッと冷えていくのを感じた。階段を駆け下りて母の死体を見下ろす肇に悪魔がささやいた。
肇は死体を近くの川に投げ込んだ。ばしゃんと派手な音がしてしぶきが飛んだ。
肇は不思議な達成感を感じていた。
「うちの母さんは雨の日に川を見に行って足を滑らせて死んだんだ」
部屋に戻ると母が落とした包丁を片付けて、肇はうっそりと微笑んだ。

Ⅱ

川上の方から流れてくる彼女を見たとき、男の胸の内を占めたのは「運命」という二文字であった。
見たことがある気がする。
それだけで男にとっては福音であった。
彼には二年前以前の記憶がない。初めて病院で目覚めたとき、自分の名前も顔も思い出せないことに気づき愕然とした。河口近くの河原に倒れていたところを発見されたらしく、全身に軽い打撲があった。医者は脳震盪がどうのこうの、それにしては外傷がどうのこうのと言った。清潔なカーテンが揺れても、病院の外から小鳥や子供たちの声が聞こえても、感じるのは周囲との隔絶のみだった。
いつまでも入院しているわけにもいかなかったから、男は外傷が治癒すると病院を出て働き始めた。昼は気のいい夫婦が経営する小さな商店に赴き手伝いをし、夜には行政の提供してくれた家賃の安い「そういう」人たちの暮らすアパートに帰る。安定した生活だった。それがいけなかったのかもしれない。安定した日々を送っていると余計なことを考える時間が生まれる。
例えば朝歩道を歩いているとき。向こうから走ってくる小学生を見て自分の無精ひげをなでながら、もしかして俺にもあのような幼い子供がいたかもしれない、と考えた。例えば一人で風呂に入っているとき。以前の自分は浴槽でどんな歌を歌ったのか考えた。例えば、例えば、例えば……
どれだけ考えても実感を持って自分はこういう人間だったといえるなにかは掴めなかった。そうしているうちに二年が経って、諦めかけていた。地面に足がつかないふわふわとした存在のまま生きていかなければならないのだと。

彼女を見つけたのはそんな時だった。
男は濡れるのにも構わず、川に入っていった。川の水を押しのけながら進む脚の感触に長いこと忘れていた生の感触がした。そしてそうっと彼女を抱き上げた。思ったよりも固い体に少し驚く。まぎれもない水死体。遠くからはよく分からなかったが顔にも確かに死斑が浮かんでいる。まだ死んでからそれほど経っていないらしい。水を含んだ肩までの髪が重たげにずるっと肩から落ちてその部位だけが生々しく生きているようだった。
彼女は男にとって希望であった。だからその行動をとったのも当然かもしれなかった。もしかしたら彼はもう既に少しおかしくなっていたのかもしれない。
男は彼女を自分のアパートに連れ帰って一緒に暮らすことにした。表向きにはその日の彼の生活は何も変わっていないように見えた。昼には商店へ働きに行き、夜には安アパートに帰る。しかし彼の心の中には以前とは明らかに異なる感情が生まれていた。ふわふわと頼りなかった足場が急に現実味を帯びてきて、朝起きた時の体の重さに晴れ晴れとした気持ちを抱いた。家に彼女がいて自分を待っていてくれる。それがまるで何年も続いてきたことのようにすっきりと肌に合うように感じた。
しかし彼女は生きてはいないのだった。死体であるからには彼女は着実に腐敗していく。連れ帰った翌日に彼女の体はその硬直を解き、体中の孔から血や汚物が噴出した。そんな体を男は丁寧に浴室で清めこれで柔らかくなったと喜んだ。
その日の夜にはレンタルビデオ屋で映画を借りてきては二人で鑑賞した。映画を見ることは目覚めた当初の男の趣味の一つであった。当時の彼は何でもかんでも片っ端からＤＶＤを借りていた。以前の自分の嗜好がどこかに隠れていないものかと躍起になっていた。
これが本当に同じ作品だろうか、と男は考える。隣に彼女がいるだけで以前感じていたような表現しがたい飢餓感が薄れているのを感じた。この家にはソファなんて上等なものは置いていなかったから、毛布を片付けたこたつテーブルに背を預けてテレビを眺めた。
「ねえ、君は今どんな気持ち？」
男の肩に寄りかかるように座らせていた死体がずり落ちてくる。
「俺は前にもこうして君と映画を見たことがある気がする」
ずり落ちた死体を持ち上げて元のように寄りかからせる。
「ずっとこうしていたいのにな」
死体はまたずり落ちて今度は男の膝の上に収まっ

た。そして彼はもう元の場所に戻そうとはしなかった。テレビの中では檜皮色の髪を持った女性が水に入っていった。彼女の物言わぬ濁った瞳を眺めながら男はひどく幸せそうに微笑んだ。

三日目。彼女の腹部が青く変色し始め、ガスがたまり始めた。彼は彼女の体液をこまめに洗い流してやった。なぜだかわからないが涙が止まらない。彼女が元の美しい姿を保っていられないことがひどく悲しく思えるのだ。結局その日は仕事を休んだ。落ちくぼんだ眼窩と口腔からは少し異臭がした。

夢を見た。彼女は美しい外見を保ったまま現れた。

「あなたには私が必要？」

口元に微笑をたたえて尋ねる。

「当り前じゃないか。君がいないと俺は生きている気がしないんだ」

「馬鹿ね。あなたが懐かしいと感じたのは私ではなくて水死体という物体かもしれないのに」

男は咄嗟に否定しようとした。だが、自分の心の内を考えるにつけ、本当に違うのか？という疑念がわいてくるのを感じた。背中がぞっと寒くなる。一昨日の自分はどこかおかしくなってしまっていたのか？そうだろう。まともな神経の人間が死体をお持ち帰りするか？答えは否だ。恐ろしくなって自分で上げた悲鳴に驚いて目が覚めた。

四日目。隣の部屋の住人から苦情が来た。ギャンブルで身を持ち崩した中年の男で一日中部屋にいるらしかった。住人は、臭いがきつくてやってられない、ゴミくらいきちんと捨てろ、と言い捨てて帰っていった。男は彼がそんな常識的なことをいうことがおかしくて仕方がなかった。しかしそれほど臭いが漏れているのだろうかとふと考える。改めて彼女をじっと見つめてみた。

彼女の様子は最初に河原で出会った時とまるで違っていた。美しかった顔には蛆がわき始め、腐敗が進んだ体からは常に腐敗臭が垂れ流されていた。

男はこれ以上彼女とともにはいられないのだと悟った。一瞬連れて逃げ出そうかとも思ったが、その瞬間夢で見た彼女のニヒルな笑みが頭をよぎった。もう自分がそれほどの執着を彼女に持っていないことがありありと分かったのだ。彼女に感じるのは懐かしさではなく、ただ少しの間ともにあった者への愛着のみであった。ただ少し、彼女が変わり果てたことに対してもう涙が流れないことを残念に思った。

それから男は日が落ちるのを待って彼女を川へ運んだ。腕に抱いた体はやけに冷たくて重かった。そっと彼女の体を川面に降ろした。少し味気なく思えたので川べりの菖蒲を数輪引きちぎって死体の周りに散らしてやった。やがて彼女は見えなくなった。

翌朝ゴミを出しにいくと隣のギャンブル中毒と鉢合わせた。くたびれた中年は男がゴミ出しに来たことに気づくと、ちっとは人間らしい生活をし始めたじゃねえか、と満足そうに階段を昇って行った。

男は本当におかしくてたまらなかった。自分から見てもとてもまっとうに生きているとは言えないオッサンが人間らしい生活を始めたな、だと。ひとしきり笑ってから独り言ちる。

「俺もあんたも正常なんかじゃないぜ。アンタは知らないが俺は気づいちまったからな」

昨日の晩月夜に照らされ流れていく水死体を眺めて、彼は思い出したのだった。懐かしく思う、流れていく水死体。美しきミレイのオフィーリア。そして実際に人が水死するところが見たくて仕方がなかったこと。なんてことはない。記憶を失う前から自分はおかしくて世間からも地面からもふわふわ浮いて生活していたのだろう。

「全部彼女の言うとおりだった！」

ひどく良い気分で男はゴミ捨て場を後にした。さて、仕事に行く準備をしなくちゃいけない。

Ⅲ

俺が肇と出会ったのは小六の三学期頭だったと記憶している。なんでこんな時期に転校してきたのかいぶかしく思ったのを覚えているから間違いないと思う。奴は真面目な顔をしてクラスメイトは全員敵だ！みたいに警戒していたから初端から話しかけに行く人間はいなかった。（それだけが理由というわけでもなかったが）俺はその野良猫みたいに毛を逆立てていた転校生に話しかけてみることにした。

なぜそんな奇天烈なことをしたのかというと、その当時俺はバリバリのボッチだったからだ。同級生のお友達はあの金髪の子と遊んではいけませんと親から言い聞かせられている風であった。俺の髪は地毛なのでひどい風評被害を受けていたわけだ。（もしかしたら外国人自体が怖かったのかもしれない。田舎の煮凝りみたいな土地なので十分あり得る。）

「なあお前、どこから越してきたの？」

下校間際の靴箱でまずは当たり障りのない質問をしてみた。

「……どこでもいいだろ」

なんということだ。この質問に答えられないとか、なんと転校生に向いていない奴だろう。

「俺はレオっていうんだ。友達になろうぜ」

肇はフンっと鼻で笑ってから

「レオだって？お前がライオンって何かの間違いじゃないのか？俺は軟弱な友達なんかいらない」

と言ってきた。

俺は当時背があんまり伸びないことと日焼けしにくいなまっちろい肌がコンプレックスだった。つまりあいつは初対面で見事に俺の地雷を踏みぬいたの

だった。
　喧嘩っ早さには定評がある俺は口より先に手が動いて奴の顔面にグーをくらわしてやった。肇は一瞬呆然としていたが、我に返ると同じようにやり返してきた。騒ぎを聞きつけた担任がやってくるまで俺たちは殴り合いをつづけた。見事俺たちはクラスの隅っこのボッチから要注意人物に格下げされたのだった。
　しかしこの喧嘩によって俺たちは不思議な友情を感じるようになった。こんな風に思いっきり誰かとぶつかったのは初めてだったから妙な爽快感があった。
　迎えに来たうちのじいちゃんが般若みたいな形相で俺を叱っている途中もにやにやしていたから、雷が数個余分に落ちた。
　そして俺は肇がなぜあんなにも最初他人を警戒していたのか、クラスメイトがなぜ誰も話しかけなかったのかを知った。
　俺たちが殴り合った日の翌日肇のお母さんが学校へやってきた。ひどく腹を立てていてキーキー声が三階の教室にまで届いていた。俺と肇が校内放送で職員室に呼び出された。
　この時俺は失敗したなーと思っていた。こいつはやっぱり俺とは違って愛してくれる母親がいて、彼女の宝物を傷つけた俺はその代償を支払わなければならないのだろうな、と思った。ただ迷惑をかけるであろうじいちゃんに申し訳なく思った。
「母さん。こいつを責めないでくれ。悪いのはどっちかというと俺なんだ」
　そんな風に自虐的になっていたから、肇が俺を開口一番にかばいだしたとき本当に驚いた。
「肇ちゃん、そんなこと言ってこの子に脅されてるんじゃないでしょうね」
　息子をちゃんづけすることにも俺みたいな粗忽物はちょっとうへえと思ったが何よりも驚いたのは彼女の次の発言だった。
「肇ちゃんは神様が授けてくださった子なんだから……」
　肇はその言葉を聞いて一瞬とても悲しそうな顔をした。
「母さん。そんなにひどい怪我じゃないから心配しなくても大丈夫だよ。十分分かってるから」
　その日、肇ママはそのまま説得されて帰っていった。ずっと俺のこと睨んでいたけど。でも俺は聞かずにはいられなかった。
「おい、なんだよ神様って」
　肇は少し逡巡して
「うちの母さんが信仰してる得体のしれない神だよ」
　と言った。肇の母さんが引越し早々近所にその謎

の宗教を布教して回った結果、転校初日肇はボッチになってしまったということだった。

後で聞いたことによると肇は母と二人暮らしだった。そして俺は血のつながっていないじいちゃんと二人暮らしだった。俺はじいちゃんの娘が結婚した相手の連れ子だったらしい。両親は物心つく前に事故で死んだ。そういう複雑な家庭のジジョーってやつが俺たちの距離をさらに親密にしたのは間違いなかった。

しかも奴はひどく頭がよかった。なんだかよくわからない難しい活字の本を読んでは楽しそうにしていたし、テストも九十点以下のものは見たことがなかった。いたずらもあいつが考案すると大抵うまくいった。それに、肇はいいやつだった。アパートの下の階に猫をたくさん連れたばあさんが住んでいてよく話し相手になっていた。猫が心配で娘夫婦に誘われても引っ越せないらしい、とばあさんとの会話内容をわざわざ俺に報告してきたものだった。奴の話は難しくてわからないものが多かったが聞くのは意外と楽しかった。つかると死人が生き返る水があるらしいだとか、ハムレットがどうのこうの、オフィーリアがどうのこうの、水死体のことを土座衛門（俺は某国民的猫型ロボットのことを連想した）と呼ぶことがあるとか。またそれを、幸運を運んでくるとか言って崇め奉る地域があるとか。なんだかんだ言って俺たちはお互いが唯一の友達だった。

中一になる前の春休み、俺たちは秘密の遊び場を見つけた。近くの川を数キロ下った場所で川に浸食された洞窟があった。二人でそこに近くの粗大ごみ置き場からかっぱらってきたソファやら棚やらを置いて暇を見つけては集まった。そうして何か月か割と穏やかな時間が流れた。相変わらず俺たちはバカなことをして、時々喧嘩をして、楽しく暮らしていた。肇ママも相変わらず電波なことを言って周囲を困らせていた。

少し風向きが変わったのはその年の秋口のことだった。最初にそのネタを持ってきたのは肇だった。いつものように洞窟のソファの上でごろごろしていると肇がやってきた。

「猫ばあさんちの猫が最近数匹行方不明らしい」

「おいおい、猫ってのはそもそもが家出するもんだろ。一所に留まる動物じゃねえんだ」

「分かってる。でもちょっと嫌な感じがするんだ」

その時の肇は少し顔色が悪くて、最初は何とも思わなかった俺でも何か起きるかもしれないと感じた。

案の定だった。俺はその会話をした数日後猫が川に浮かんで死んでいるのを見つけた。

俺はその猫を放っておけなくてそのままの格好で川に入ってそいつをひっつかむと急いで俺たちの洞

窟へ向かった。
　洞窟につくと俺は猫をまじまじと見つめた。猫は自分から川に入る生き物じゃない。だから殺されてから犯人によって放り込まれたに違いなかった。俺が違和感を感じたのは体温だった。
　まだ温かい。
　まだ近くにいる……！心臓がひときわ大きく鳴った。そして注意深く死体を観察すると、猫の首には絞殺した跡があった。ふと洞窟内を見渡すと見覚えのないものが棚の上に置かれていた。
　ロープだ。
　犯人はこの洞窟で猫を絞め殺したのだ、と気づくと同時に俺の体は息を吸うことができなくなった。
　無精ひげがうっすら生えた若い男が俺の首を絞めていた。ぶつぶつとよくわからない言葉を吐いている。その眼窩には明瞭な写像は一切認められず、俺は初めて人間を恐ろしいと思った。
「猫じゃもう足りない。男だけど綺麗な金髪だから水に広がったらさぞかし美しいだろう」
　猫を殺したのはどうやらこの男らしい。そして俺も今や猫と同じ運命を辿ろうとしているようだ。
　おかしなことにその時俺の胸の内を占めていたのは目の前の男に対する怒りだった。自分が殺されそうになっていることに対してではない。俺たち二人の秘密の場所を汚されたことに対してだ。かわいそうに。肇は俺が死んだあとこの場所には二度と訪れないに違いない。俺を思い出す肇はいつも笑ってなくちゃいけないのに。
　俺は酸欠で朦朧としながら首を掴んでいる男の両手に力の限り爪を立てて脛をげしげし蹴った。男は少しうめき声をあげ、このガキ、と三下のお手本のような声を上げた。肉を抉る生々しい感触がして俺は片方の口の端を上げてみせた。首を絞める力がもう一段階強くなって
（ごめん）
　頭の中で謝ったとき。
　ぐしゃ。
　何かがつぶれるような音がした。俺の首は解放されて、俺は咳き込みながら地面に倒れこんだ。
　顔を上げると河原の丸っこい石を細い腕で掲げている肇がいた。その石には赤黒いぬめっとしたものが付いていたから俺は奴が何をしたのか分かってしまった。肇は目を見開いてやけに大きな呼吸をしていた。
　男はまだ呻いていたが、頭がぱっくり割れてザクロのような肉が傷口から見えていたから、もうそんなに生きられないだろうと感じた。
　それから俺は男の脚を持って川べりまで引きずっていった。後ろからぼんやりとしている肇もついてきた。水が膝ぐらいになるところで手を放してやっ

たら、男の体はスーッと流れていった。
「これで俺たち共犯だ」
身を寄せ合って俺たちは夕日に照らされた死体が流れていくのを見ていた。
肇は何も言わなかった。肩に感じる体温が温かくて鼻の奥がつんとした。
死体は他の誰かに見つかることはなかった。元からそんな奴はいなかったかのように猫殺しのうわさがそっと消えただけだった。
俺たちの日常は変わらず、洞窟も秘密の遊び場であり続けた。ただあの事件が起こった日は毎年洞窟に集まる、という約束をした。俺たちの共犯者という新たな関係を守るためだったのかもしれない。肇は時々ガラス玉のような空虚な目をするようになった。死んだ生き物は蘇らない。それと一緒で肇の中であの時変わってしまったものはもうどうしようもない。考える度に俺は肋骨の内側をひっかかれるような後悔を感じた。肇の特別であるということは、俺に湿度の高い優越感を抱かせたが、同時に彼がおかしくなっていくのを実感していた。
俺の、肇に笑っていてほしいという願いは叶わなかったのかもしれない。

Ⅳ

女は水槽の中身をじっと見つめていた。その瞳には乾いた悲しみが滲んでいた。
水槽はその木造の小さな部屋の大部分を占めていた。ポンプで外から川の水を引いているのかゴウンゴウンという機械の動く音がする。川独特の生臭さが鼻をついて噎せそうになる程だった。
水槽の中には一体の水死体が浮かんでいた。この死体は女の姉のものであった。そして驚くべきことに腐りきって黒く変色した肌が少しずつ元の色を取り戻しつつあった。女は今日の死体の世話係である。死体が完全に生前の姿を取り戻して神になるまでには最低でも数週間は必要であった。
この姉は十六年前に追放されたはずであった。女は密かに姉を妬ましく思っていた。このような村に生まれたばかりにおぞましい死体を神と崇めなければならない苦痛……。しかしいくら妬もうとも、姉と同じ方法をとって村を抜け出すことも出来なかった。
姉は十六年前神と交わって子をなし村から消えた。
あの朝姉は女に実に嬉しそうに耳打ちしたのだった。
「私、神様の子を身ごもっているらしいの」
吐き気がした。神とはいえ、もともと死体であったものとの間に子供をなしてなぜ平然としていられるのか。女は姉とは違って神にも懐疑的であった。
姉が生まれてくる子供に妹の名前を付けると言い

始めたとき、彼女の我慢は限界を迎えた。
やがて姉の懐妊は村人全員の知るところとなり、その相手も明らかになった。
穢れた神は村人たちの手にかけられ、姉は村への立ち入りを禁じられた。
この時女は非常に腹立たしかった。本当は皆見ず知らずの死体であった神より小さい時から知っている姉の方が大切なのだ。だから姉を殺さなかったに違いない。
普段は女のことを不信心者だとか言っていたくせに。
二度と会うこともないだろうと思っていた彼女は水死体となって帰ってきてしまった。ちょうど二年前流れ着いた男の死体が処理を施され終わった途端半狂乱になって飛び出していったきりこの村には神がいなかった。村には不安が蔓延していた。
ひゅー、ひゅー。
近づくと呼吸の音が聞こえた。顔面は水に浸かっていないのでまだドロドロに腐っている。そんな状態なのにも関わらず肺と心臓は機能し始めているらしかった。濁って灰色の膜が張った瞳を見つめる。
一度だけ見せてもらったエコー写真を思い出す。あの時姉は、こんなに小さくて人間の形をしていないのにもう心臓が動いているのよ、と言った。人間になりかけの歪な怪物。
すっと乗り出していた体を真っ直ぐに直すと、女は懐からそっとマッチを取り出した。シュッと擦ると赤い頭に付着した赤燐が燃え上がった。フッとその火のついたマッチを放ると防水処理のためにタールを塗ってある床に容易く引火した。
水の中に浮かぶ死体を無造作に抱き上げ燃え続ける小屋を後にする。死体の口が少し動いたのが見えた。
女の心は酷く晴れやかであった。裏手の川まで来ると姉の死体を川の中に流した。
小さい頃から女は、美しくて従順で皆に好かれる姉があまり好きではなかった。そもそも自分のことを嫌いな人間などいないという幼い純心に寒気がした。一度は村人全員を裏切ったのに死んで戻ってきて今度は信仰の対象となろうとしていた。
あの人は馬鹿だ。と思う。
少し考えれば分かるだろう。村長に腹の中のこの父親について話したのが誰なのか。だというのに最後追放される直前の彼女はにこにこと笑いかけてきた。
でも全てもう過去の話だ。この限界集落では燃やされた施設の再建は難しい。若者の中には神を信じていないものも沢山いる。これから全てがいい方向に変わるだろう。
だから気にしないのだ。姉が最後に女の名でもあ

り息子のものでもある名を呼んでいたことなど。脳裏にちらつく姉の笑顔だってまやかしだ。
火炎は益々大きくなり、村人の悲鳴が聞こえる。女の表情は影になって伺うことはできない。

終

やがて水死体はカーブを曲がって二人の前から姿を消した。ふっ、と意識せずに止めていた息を同時に吐く。
「なあお前のお母さんの宗教じゃ水死体は神様なんだろ？」
金髪が口を開いた。
「それがどうしたんだ」
黒髪は心底つまらなそうに答えながら尻に着いた砂を払って立ち上がった。
「さっきのやつ捕まえとけばよかったかな」
「くだらない」
金髪は相手の本当にどうでも良さそうな顔を見て少し呆れたようだった。何も言わないが金髪は何となくあの雨の日黒髪の少年に何があったのか気づいていた。そして最後の抵抗をやめたのだった。
カエルの子は結局カエルで、どうしようもなかった。でもお前が泥濘に足をとられるなら一緒に底なし沼に落ちてやろう。
「だって俺の神様は何年も前から隣にいるからな」自信満々に黒髪は言う。金髪は少し呆気に取られて、そして声を上げて笑った。全くらしくないきざな言葉だ。冗談のつもりだろうが、俺は冗談にはしない。お前がそう言うのならずっとそばで神様をやってやろう、と金髪は思った。そして笑いが収まると柔らかく黒髪の方へ微笑みかけた。
黒髪は二人が共犯者になった夕方のことを思い出していた。あの日、太陽の残滓に照らし出された友人は今のようにひどく優しい顔をしていた。まるでピエタのように……
涼し気な風が吹いて斜面に生えた笹と二色の髪をさらさらと揺らした。
黒髪が片頬を上げて笑う。
「早めに帰らないと昼飯を食いっぱぐれる」
金髪はいたずらっぽく返す。
「自転車、後ろ乗っけてってくれよ」
滑るから注意しろよと黒髪が金髪の手を引きながら階段を上っていく。
金髪が後ろの荷台にまたがると黒髪の漕ぐ自転車はゆっくりと走り出す。
二人は振り返ることなく風を切る。真昼の光に金糸がきらきらと煌めいた。
そして彼らの姿も見えなくなった。川辺にはもう誰もいない。

阿久悠作詞賞　選評

三田完

全体講評

阿久悠が７０年の人生の最後に書いた詞は、新宿ゴールデン街で酒場を営みながら昭和歌謡をうたいつづけた渚ようこのための「ＫＡＢＵＫＵ」という作品でした。

ＫＡＢＵＫＵ女 そんな仇名が
ちょっと似合いだね
素顔なんて しょせん同じよ
恋に生きる身は

なぜ阿久悠最後の作詞に触れたのかというと、大賞受賞作をうたう太田仁子さんに「チミモウリョウ」の詞をメールで送ったとき、即座に「おお、カブいてますね」と返事が来たからです。彼女の言葉のおかげで、はるか彼岸の阿久さんも今回の受賞作をことほいでいるような気持になりました。

今回、総計６２篇の応募作品を拝見して印象に残ったのは、「大人になりたくない」という内容の詞がいくつかあったことです。それはユーミンの「あの日にかえりたい」とは異なるセンティメントでした。日本も地球も、そして民主主義までもネジがゆるんできた今、未来を展望するのは至難の業。そんな不安から大人になりたくない願望が生まれるのだろうか……などと、あれこれ考えました。

誰もがいやおうなく変化に対峙しなければならない現代、懐旧の殻の中に籠もる心地よさは重々理解できます。でも、せめて歌の中では意表を突く仮装をし、思い切り自由奔放なふるまいをしてみてはどうでしょう。カブいた詞の中に思いがけなく真の自分が見つかることもある。混沌とした未来にとまどいながら、それでも前へ突き進むあなたが。

受賞作品講評

大賞「チミモウリョウ」

今回の応募作の中で、一番奔放、というか、行っちゃってる詞でした。しかし、読みながら自然にメロディーが浮かんでくるところに、作者の才を感じます。

「魑魅魍魎」という課題を思いついたとき、私の胸には、泉鏡花「天守物語」の令和版というほのかなイメージがありました。美貌の姫とけなげに花咲く秋の千草、そして異形の者たちを身近に感じるような諧謔。

結果、ハロウィンの渋谷よりずっとゴージャスな行進に巡り会えたことは幸せでした。思わず「シタニシタニ」と 頭(こうべ)を垂れる次第。

佳作「キミユキ」

見慣れない言葉を用いたタイトルに惹きつけられました。雪が降れば見慣れた町の風景も泰西名画のようになる――そんな風景のなかで出会った「君」。

静かでスタティックな構図にもっと徹したほうがよかったのでは、と思います。雪の向こうにいる君は手を振ってくれなくてもいい。作者のちょっとした雑念で詞を貫く緊張がゆるんだ印象があり、残念。

佳作「学生街のカフェテラス」

映画に譬えればモンタージュが巧い作品です。ともすれば陳腐になりがちな恋愛の回想が、チェロ、絵葉書、ボートなどを重ねたことで、それなりの説得力を持つ詞になりました。

しかし、「キミユキ」とは逆にタイトルが悪かった。昭和のアイドルソングみたいで、せっかく構築した世界の艶が消えてしまいます。単純に「絵葉書」でよかったのでは。

「チミモウリョウ」

金澤　一輝

■受賞のコメント■

この度は、大賞という栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。難しい情勢の中、素晴らしい機会を設けて下さった明治大学連合父母会、（株）阿久悠、明治大学文学部に心より感謝を申し上げます。

創作中のエピソードを書いてほしいとのことで、恥を忍びに忍んで書きます。自分には何があるのかわからない日々の中で、大好きな阿久悠先生の名を冠した賞が存在すると知って、応募を決断しました。創作中はお風呂に浸ってじっくり考えたものの、作詞経験がない僕には書き方がわからなかったです。わからなかったのですが、どうせなら不格好だけど夢や目標に一直線な人を歌詞にしようと思いました。小さい頃から同じ目標がある自分への激励みたいなのも一応(笑)。のぼせてしまったのか浴室の照明が月に見えて、そこから見えてきたものを歌詞に乗せました。課題タイトルが『魑魅魍魎』だと知った時はゾッとしましたが、カタカナにするとどこか可愛らしく思えてきて、無我夢中で月に向かって百鬼夜行している光景が浮かびました。完成した頃にはもうお湯ではなくなっていて、後日風邪をひきましたが、多分人生で一番いい湯でした。改めて、こんな歌詞が選ばれてしまったこと、大変恐縮ですが、非常に自信になりました。次はもうちょっとお洒落な歌詞が書けるように頑張ります。

『チミモウリョウ』

あー眠れない　なんか寝つけない
月の光がまぶしすぎてさ
恋をした　秋の一目惚れ
心ときめく今夜は
ドアを開けて街へとびだそう

腕時計いつもと
逆につけてみれば
まえもうしろも
みぎもひだりも
こんがらがったロジウラこんばんは

真っ赤なペガサス　黒いマーライオン
学ランイルカもグラサンお釈迦も
みんなみんな月に向かってる
そこになにがあるのかな

あー眠れない　なんか寝つけない
あの子のヒミツ知りたすぎてさ
キリがない　これじゃキリがない
胸が高鳴る今夜は
ドアを開けて街へとびだそう

ロジウラのみんなは
自信がありそうで
なんかすんごく
楽しそうだよ
だったらぼくも連れてって

印度の白鳥　和服のフランケン
アノマロカリスもステゴサウルスも
みんなみんな月を探してる
そこに誰かいるのかな

おっとそこのけ猫のお通り
みけぶちペルシャの大名行列
夜空に浮かぶ月を目指して
シタニシタニ シタニシタニ

ぼくもいかなきゃ ぼくもいかなきゃ
歩き続ける サルといっしょに
いつの間にか月のてっぺんに
たどり着いた 疲れちゃった
すると夜風がぴゅーと吹いてさ
ぼくはふわりと宙に浮く
足がもつれて落っこちる

そこで
見つけたよ 秋のシルエット
下手クソすぎる バイオリン弾き
ふりかえる君は微笑んだ
月に向かって歩いてみたら
一目惚れしたあの子が待ってたよ

作編曲　竹中俊二
歌　唱　太田仁子

「キミユキ」

鈴木　涼太

■受賞のコメント■

ある時、雪が降る様子を一番眺めている時間はいつだろうかと考えたことがありました。するとそれは以前住んでいた雪国でのバスを待つ時を浮かべ、それがどこかわくわくした恋をしている気持ちのようでした。そこから雪降る中「キミ」に恋をする「君（と）雪」とバスの行き先の表記と一途さをかけて、想いが「君行き」との二つの意味を持つこの「キミユキ」という曲を作詞しました。

その情景は冬の寒さと春の訪れを感じさせることで美しくも儚い流れゆく時間と、主人公の焦りや戸惑い、憧れなど思わぬ形で過ぎていく日常の時間とを対照的に描いています。加えて冬の静けさを大切にしたく、音や声の表現を極力抑えた音のない世界をつくることにも努めました。

また登場人物の主人公からはあえて「好き」等の言葉を使わないことで「私」の内側の初々しさと葛藤を表しています。これらのこだわりを短くて少ない文章に詰め込み、１・２番の字数を対応させることで物語の展開に心躍る、まるで小説を読んでいるような心地よさを感じてもらえれば幸いです。

この度はこのような賞を頂き誠にありがとうございます。私の作ったこの曲で寒々しい季節の中でも負けない、温かくて真っ直ぐな想いを是非堪能してください。

キミユキ

この騒がしい通り　変わらずいつも通り
バス停で待つ私　前からは三番目
こういう時に限り　バスは時間通り
反対側でバスを待つ君を　まだ眺めていたかったのに

降りゆく初雪も　解け行く春空も
どちらの美しさと儚さを知っているから
まだ前に進めない

雪が舞っているこの街で　バスを待っているもう少し
真っ直ぐに見つめてる視線が　横切る車の間で隠れるように
触れたくて　でも遠すぎて　右手を独り　右のポケットに閉じ込めた

まだ話したことない　君の声がききたい
今日もバスは変わらず　きっと時間通り
新雪の上足跡のように　君のことを考えてしまう

あの日偶然に　すれ違ったここで
オレンジの街灯を　横切る雪のその中で
君は手を振ってくれたね

君を待っていたかのように　冬を知ったはじめての恋
きっと明日も会えるはず　でも定刻通りに来ないバス
たまらずに　横断歩道　駆け出す傘も　ささないで

溶けゆく時間があまりにも冷たくて　落ちる音さえ感じない
はじめての言葉が白い息になって　二人の上に舞う

雪が舞っているこの街で　歩幅合わせていくこの気持ち
真っ白な降り積もる想いが　解けずにまだ残っていてこれから先も
この寒さ　言い訳にして　右手を君の　左ポケットに閉じ込めた

「学生街のカフェテラス」

焼山　美羽

■受賞のコメント■

この度は明治大学文学賞阿久悠作詞賞の佳作に選出していただき、ありがとうございました。

高校時代、友人から誕生日に贈られた三枚のレコードの中に岩崎宏美さんの『未完の肖像』があり、詞の素晴らしさに圧倒されて歌詞カードをなめるように何度も読み返しました。そこで偉大な作詞家である阿久悠先生のお名前を知ったことを今懐かしく思い出します。

詞を書くにあたって、一本の映画のようなものを作れたらと考え、まず映像とストーリーを頭に思い浮かべました。また今回は推敲せずに応募してみたのですが全体的な詞の未熟さを思い知るばかりです。作詞というのは「詞」と「詩」のちがいや自分の気分だけの詞になっていないかを注意する必要があるため、どうにも難しいものだということも改めて感じました。しかし様々な言葉と触れ合い、色々な場所から素材を集め、流行を感じ取りながら、「ぜひ曲をつけたい」と思っていただけるような作品を生み出せるようにこれからも精進して参ります。

末筆ではございますが、このような機会を設けて下さった明治大学文学部、連合父母会、株式会社阿久悠、そして審査員の皆様に厚く御礼申し上げます。

そして、その拙い文字列を表現できる機会を用意してくださった皆様に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

「学生街のカフェテラス」

風が踊る　九月の学生街
チェロ背負う影また探してたカフェテラス
とまどいも喜びもガラスの向こうの物語
古いラジオ　針が飛んだバラード
何故かしら　涙こぼれ落ちるの
書き終えた絵葉書は
夕陽のインク滲んでゆく
人混みの海流せば誰かみつけるかしら？

二度目の春　ボート漕ぎに出かけた
揺れて怖がる私抱き寄せ微笑んだ
本当は下手くそなふりするあなたに気付いてた
ブラウス襟　愛が花びらみたい
舞い降りる　あの日に帰りたいの
卒業のセレモニー
「さよなら」言わず別れたけど
あなたから「また逢おうね」遠い約束したの

古いラジオ　あなたの曲聴ければ
異国住む　姿思い浮かぶの
書き終えた絵葉書は
夕陽のインク滲んでゆく
人混みの海流せば誰かみつけるかしら？
「いつまでも好きよ」

第 14 回（2022 年度）
明治大学文学賞　受賞作品集

2023 年 3 月 発行

編集・発行　明治大学文学部
〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台１－１